591
162

*0020570000*

0020570-000

591-162

# リカアドオ研究

小泉信三・著

鉄塔書院

昭和4

ADB

小泉信三著

# リカアドオ研究

鐵塔書院

591-162

# 序

デヰッド・リカアドオは近世理論經濟學の創成者にして、十九世紀の最も影響多き經濟學者であつた。近時の一リカアドオ研究者が、經濟學建築の基礎はリカアドオに依て据へられた。「故に人は皆なリカアドオを以て、而して彼れの肩に乘つて建築すべく始めねばならぬ。吾人の學問領域に於ける課題は……他のものを以てリカアドオに代らしめることではなくて、……彼れの思想を理解し、之を大成することである」と謂つたのは(A. Amonn)私の同意する所である。此意味に於て私は前年彼れを「理解」せんことを企て、數篇の論文を書いて雜誌に掲げた。今本書の要部を成すものは此諸篇に訂正增補の施されたものである。近年我邦に於けるリカアドオ研究は著しき發展を遂げて幾多の價値多き作物を生んだ。就中森耕二郎氏(「リカアド價値論の研究」)波多野鼎氏(「價値學說史」)第一

冊)堀經夫氏(リカアドウの價値論及び其批判史)の如き單行書は研究者の必ず逸すべからざる力作である。たゞリカアドオに關する私の見解には必しも諸氏の其と同じからぬ所もあつて、重複とはならぬやうであるから敢て本書をも版行することにした次第である。

本書の成る一に鐵塔書院主小林勇氏の厚意と熱心とに由るものである。又友人永田清氏は貴重の時を割いて煩勞多き校訂校正の業を擔當せられ、高橋秀明氏は校正を助けられた。玆に特に記して深く感謝の意を表する。

昭和四年九月

北品川御殿山

小泉信三



## 例言

本文中リカアドオの「原理」を引用するに或章では原版に據り、別の章ではマカロック全集版に據つたことを、印刷進行後に至つて見出したのは不注意の責を免れぬ。たゞ何れの場合にも拙譯「經濟學及課稅之原理」(岩波文庫)の頁附を併記して置いたから讀者幸ひに其に就いて見られんことを請ふ。

卷中諸編の最初の發表年月及び掲載雜誌名は左の通りである。

(一)正統學派總說(「岩波講座」所載「現代經濟思想」第一章)

(二)リカアドオの價値論(「三田學會雜誌」自第十六卷第二號至同第六號、第十六卷第八、九號)

(三)リカアドオの地代論(三田學會雜誌第十八卷第一、三、四、五、六號)

(四)較差地代と絕對地代(「三田學會雜誌」第十八卷第九、十號)

(五)リカアドオの通貨論(「三田學會雜誌」自第十五卷至第八號同第十號)

(六)リカアドオの機械論(三田學會雜誌第十五卷第十二號)

(七)正統派經濟學と功利主義哲學(「思想」大正十一年一月號)

# 目次


序……一頁
例言……三頁
正統學派總說……一頁
リカアドオの價値論……五八頁
リカアドオの地代論……二三七頁
較差地代と絶對地代(リカアドオ地代論續篇)……三一七頁
リカアドオの通貨論……四〇八頁
リカアドオの機械論……四七七頁
正統派經濟學と功利主義哲學……五〇五頁

# 正統學派總說

經濟學上の正統學派の何たるかに就いては、異說もあるが、アダム・スミス、マルサス、リカアドオの三者に依つて英國に建設確立せられ、幾多の者に繼承祖述せられてジョン・スチユアアト・ミルに及ぶ學派とするのが普通である。假に此通說に從へば、アダム・スミスの國富論が出た一七七六年に始まつてミルの經濟原論が出た一八四八年に至る約七十年を正統學派隆昌の時代と見ることが出來る。但し正統學派の學說上の主張なるものは、之を仔細に點檢すれば、必しも嚴密に終始一貫したものがあるのではない。假りに其確立者と目せらるゝ右の三者に就いて見ても、スミスとマルサス、マルサスとリカアドオ、リカアドオとスミスとの間に於ける研究方法、個々の學說の相違は、一々枚擧するに勝へないのみならず、スミスと他の二者との思想に於ける樂觀悲觀の色調の對照は到底看過すべからざるものがある。然らば、此學派共通の特色は何處にあるのであるか。私をして言はしむれば、其の第一は、アダム・スミスに

對する尊敬の念である。尊敬といふは、必しも其說を批評し、又は此に反對することをせぬといふ意味ではない。マルサス、リカアドオ其他、皆なスミスと殊なる說を唱へることには毫も躊躇して居らぬが、併し彼等は常にスミスに敬意を表することを忘れず、個々の點に於て其所見を異にしても、決してスミスの反對者克服者を以て自ら任ぜずして、皆な其後繼者大成者たらんことを期して居る。これが浪漫主義者、社會主義者、國民主義者、歷史學派と明に趣を異にする點である。正統學派は此意味に於てアダム・スミスに敬意を表すると共に、學說上に於ては原則としてマルサス、リカアドオを奉じた。卽ちアダム・スミスの傳統を尊重し、マルサスの人口論を採用し、リカアドオの價値論、分配論殊に其地代論を奉じ、而して異例を成す者はあるが、先づ原則としての自由交易主義を守ること、大體に於てこれが正統學派の特色であると言つて好い。其詳細は左の諸節に述べる通りである。

## 第一節　アダム・スミス(Adam Smith)

アダム・スミス(一七二三—一七九〇年)出生の地は蘇格蘭エヂンバラに近き一小市カコオヂイ(Kirkcaldy)其父は此市の一小稅關官吏であつた。長じてグラスゴウ及びオクスフオオドに



學び、一七四八—五一年にはエヂンバラに於て文學並に經濟學の講義を試み、一七五一年グラスゴウ大學に聘せられて論理學、次で翌年道德哲學の講義擔任を命ぜられて一七六三年に及んだ。此年、少年貴族バックルウ公爵の指導敎師に迎へられ、翌年此と同行して佛蘭西各地及び瑞西に歷遊し、一七六六年歸國し、鄕里に隱棲して、其外遊中トウルウズに於て起稿したと傳へらるゝ大著國富論を完成して一七七六年之を公にし、一七七八年エヂンバラ稅關委員に任命せられて其歿年に及んだ。スミスの尊敬せる師友には哲學者ハチソン(Francis Hutcheson)及びヒユウム(David Hume)があり、外遊中會見往來の機會を得た思想家にはヴルテエル(Voltaire)チユルゴオ(Turgot)ケネエ(François Quesnay)等があつた。

〃　アダム・スミスの著作として此處に第一に論ずべきものは無論其「國富論」

An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations, 1776, 2nd ed. 1778, 3rd ed. 1784, 4th ed. 1786, 5th ed. 1789.

である。次に擧ぐべきものを其の「道德情操論」

The Theory of Moral Sentiments, 1759, 6th ed. 1790.

とする。アダム・スミスの計劃は廣汎なる其道德哲學講義の全般に亙る研究の成果を發表する

ことに存し、上記二大著は僅に其中の經濟學及び狹義の倫理學に關するものであつたが、爾餘の部分に關するスミスの說は、幸にして保存刊行せられた其のグラスゴウ大學に於ける講義筆記錄に由つて其一斑を窺ふことが出來る。

Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow, reported by a student in 1763,and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, 1896.

が其標題である。

先づ經濟學がアダム・スミスの道德哲學全體の上に占めてゐる位置を見ると、彼れの道德哲學の講義は、大體蘇格蘭大學の慣例に從つて、四部門に分れてゐたと報告されてゐる。自然神學、倫理學、正義論及び經濟學がそれである。而して更に別の記載に由つて見ると、此の經濟學をスミスは當初法律學の一分科として取扱つた。法律の大目的は正義、警察、收入及び軍備の四である。而して警察の目的はスミスに由れば、貨物の低廉と公安と淸潔とであるが、低廉即ち豐富を獲得すべき最も適當なる方法を知らんが爲めには、先づ富裕の何たるかを明にすることが必要だといふので、彼れは後に國富論中に說かれた幾多重要の經濟學說を其處で述べた。即ちスミスの國富論は法律の一分科たる警察論中の最要項目たる富國政策論の發展大成したものに外ならぬのである（國富論は其財政論中に收入論及び軍備論をも述べてゐる。）

國富論は五篇に分れて居る。第一篇は主として分業、價値、價格及び所得分配を、第二篇は資本の本質と其用途を論じ、第三篇は諸國に於ける富の發達を說き、第四篇は政治經濟上の諸主義、即ちマアカンチリズムとフイジオクラチズムとを論評し、第五篇は財政學を內容とする。

スミスが解する所の國富なるものは、各國民が年々消費する「生活必需品並に便宜品」を以て成り、而して是等のものは直接其國民の勞働の所產たるか、或は勞働生產物を以て他國から購入するかしたものである。即ち國富の本質は必需品便宜品、國富の原因は勞働だといふことになる。そこで國富の多少は勞働生產力の大小と、國民中に於て國富の生產に當る者の占める比例とに由つて決せらるゝことが明かである。勞働の生產力を增進せしめるものは分業である。分業が勞働の生產力を增進せしめるのは、其が同一事の反覆に依つて熟練を高め、仕事の變更の際に費さるゝ時間を節約し、又一事の專掌に由つて新機械の發明を促すからである。次に國富の生產に當る者と然らざる者との比例は、資本の蓄積に由つて左右せられる。資本とは、直接消費の用に供せられずして收入贏得の用に充てらるゝ富である。スミスは生產的勞働

と不生產的勞働とを區別して居る。勞働の加へられた客體の價値を增し、勞働の結果が具體商品として跡に殘るものが生產的勞働、勞働が其給付の瞬間に消滅するものが不生產的勞働で、後者の例を擧げれば婢僕の勞働、藝人の勞働などがそれである。而して生產的勞働者多ければ一國は富み、不生產的勞働者多ければ其國は貧しい。生產的勞働者は資本に依つて支へられ、不生產的勞働者は收入に依つて支へられる。然るに資本は節約に由つて蓄積せられ、浪費に由つて減少する。故に曰く、浪費者は公共の敵で、節約者は公共の恩人なるが如しと。但し一定額の資本が支へる生產的勞働の量は產業の種類に由つて同じからず、スミスは農業が其第一位に居り、(二)工業(三)運輸業(四)分配(小賣商業)が順次之に次ぐものであるから、一國の資本未だ不充分なる時は先づ之を農業に投じ、次で工商業に及ぼすのが適當であると謂つて居る。

斯くして生產せられた國富は如何に國民諸階級の間に分配せらるゝか。之を知るには先づ價値論から入らなければならぬ。スミスが主として論ずるのは使用價値でなくて、交換價値である。交換價値を測定する最良の尺度は勞働である。但しそれは一物の生產に投入せらるゝ勞働でなくて、其物に依つて購買せらるゝ勞働である。一物の生產に投入せらるゝ勞働量と其物に由つて購買せらるゝ勞働量とは原始社會に於ては相一致したが、文明社會に於ては一物の價格



は主として賃銀、利潤及び地代の三者を以て構成せられる。此三者には一地方若しくは一社會に於て各々其自然率卽ち平均率があり、三者が其自然率に合致する時は、その合成する價格を自然價格といふ。一物の市場價格は其時々の需要供給に由つて定まるものであるが、此の市場價格は右の自然價格を中心にして旋回するのである。斯く一貨物の價格が右の三要素を以て成るが如く、此等の貨物を以て合成せらるゝ國富も亦た先づ勞働者、資本家及び地主なる三階級の間に分配せられる。而して賃銀は國富の增進しつゝある國に於て高く、その減退しつゝある國に於て乏しい。利潤はその反對で、商人の競爭に依つて「賃銀を騰貴せしめる資本の增加は利潤を下降せしめる傾がある」。地代に至つては、其有無大小は生產物の價格が農業家の出費と並に利潤とを償うて剩りあるか否かに由つて決せられ、而して食物の存在は人口を增加せしめ增加人口は食物需要を增加せしむるが故に、食物生產に充てらるゝ土地は常に地代を生じ、食物以外のものを生產する土地は之を生ずることがあり、又生ぜぬことがあるといふ。

上記の生產及び分配の起動力となるものは、各個人の自利心、或は「各個人の其自家の狀態を改善せんとする自然の努力」であるが、アダム・スミスは此の自利心發動の結果が福祉と調和とを齎すものとして安心して居つた。玆に彼れの英國の理神論(Deism)に基づく樂天觀があ

る。世界は世界以上、世界以外に存する「彼の偉大なる慈愛全智の實在」、卽ち神の創造に係るものであつて、神の定めた秩序法則に從つて運動する。而して此く定められた秩序法則に適へるものが所謂「自然的」なるものである。スミスに由れば、神は其目的を達せんが爲め、人間に賦與するに自利と慈愛の本能を以てし、又是等本能の發動を適宜のものたらしめんが爲めの同情感情を以てした。故に人間は其天賦の自然的衝動の發動に從ふことに依つて、自ら期せずして一身の幸福と共に全體の維持完成幸福を促進すること猶ほ時計の齒輪が自ら其を識らずに回轉しながら、時刻を指示するといふ製作者の目的を達せしめるが如きものであるといふ。

此の慈愛全智の實在に對する信賴が、經濟生活の領域に於ては自利心發動の結果に對する樂觀となる。卽ち各個人は其自家の狀態を改善せんことをのみ念頭に置いて、毫も公共の利害を顧みないでも、「目に見えぬ手」の導きが必ず全體の福祉を進めしめねば已まぬといふのである。玆に彼れの經濟上の自由主義の根據がある。同時に自然法思想に養はれたスミスは、個人の自利的行動に對する國家の干涉を自然權の侵害と見たのである。

國富論中最も文章の精彩に富めるは、第四篇中のマアカンチリズム批評であるが、其批評は上記の思想を根據とするものであつた。マアカンチリズムは近世の初頭、統一的民族國家成立



の時期に際して諸國政府が採用した、全國民の生產力を充實せしめるのに國家權力の周到煩瑣なる指導に依る政策の主義であつて、宛も其時に於ける貨幣制度確立の必要と相俟つて、屢々海外よりの貴金屬吸收政策の形を以て現れ、通俗の見解は往々金銀卽富となす迄に至つた。スミスは上記の國富觀に基づいて、「貨物流通の大車輪」に外ならぬ貨幣と富とを混同するの不可を論じ、例へば一國に於て一定量以上の庖廚用具の不用なると同じく、一定量以上の金銀も亦た不要なることを說いた。さて海外から金銀を吸收する爲めに提議せらるゝ方法は、關稅又は禁止に依つて外國商品の輸入を制限防遏することが其の主なるものである。然るに、一國の產業は前記の如く資本に依つて制限せらるゝものであるが、資本は關稅其他の手段に依つて增殖するものでないから、此等の方策の效果はたゞ一定の資本を人爲的に特定の方向に向はしめるに過ぎず、其結果は却て國富の減少となる。斯くマアカンタイル・システムの不合理は明瞭であり、「消費は有ゆる生產の唯一の終局目的である」に拘らず、此政策を利益とする商人及び製造家の利害は、到底自由貿易の實現せらるゝことを許さぬであらうと、スミスは自ら諦念して居つた。

マアカンチリズムと反對の誇張に陷つたものが佛蘭西のフィジオクラアトに依つて代表せら

るゝ重農主義である。スミスはその工人、製造家及び商人の勞働を不生產的となす點を其の主要誤謬として居る。但し彼れは此學派が、國富は貨幣でなくて、年々產出せらるゝ消費財を以て成ると謂ひ、又完全なる自由を以て此國富生產を最大ならしむる唯一の有效手段と爲したるを多とし、其主張を從來發表せられたものゝ中最も眞理に近きものだと評して居る。

要するに、重商重農共に非である。スミス謂へらく、是等一切の保護制限の政策を一掃すれば、彼の所謂「簡明單純なる自然的自由の體系」が自らにして確立せられる。自然的自由の主義とは卽ち苟も「正義の法を侵さぬ限り」各人をして恣に其自利を追求し、又恣に他人と競爭せしむるの主義である。從つて此主義に由れば、君主の業務は僅に三となる。(一)社會を外敵に對して保護すること、(二)司法制度を確立すること、及び、(三)私人は其費用に堪へぬ、併し社會の爲めには必要なる公共事業(道路、橋梁、運河、學校其他)を起すことがそれである。國富論第五篇は此等君主の職分遂行の爲めに要せらるゝ經費を論じ、之を支辨する爲めの租稅徵收に就いて著名なる(一)公平(二)確實(三)便宜(四)節約の四原則を立てたことは人の知る所である。

スミスとフイジオクラアトとの間には其自由主義思想に於て重要なる一致がある。併し前者が之を後者に學んだと解するのは、甚しい速了であらう。それはスミスがそのフイジオクラアトとの接觸以前、否なフイジオクラアトの著作以前に既に其自由主義的意見を表明してゐるからである。卽ちスミスが一七五五年に其所屬の一學會に於て試みた講演中既に左の文言があるのである。「國家を最低度の野蠻から最高度の富有に導き到らしめる爲めには、平和と輕易なる租稅と、相當程度の司法行政と以外には、必要なるものは殆どない。爾餘一切の事は事物の自然的經過(natural course of things)に依つて齎される。此自然的經過を妨げ、强ひて之を別の通路に行かしめ、又は特定點に於て社會の進步を阻止せんとする一切の政府は不自然であつて、云々」。スミスは此講演で發表した意見の大部分は既にそのエヂンバラで一八五〇年の冬に試みた講義中に述べた所であると證言した。然るにフイジオクラアト學派の開祖ケネエの「農民論」が始めて發表せられたのが一七五六年、「タブロオ・エコノミク」(Tableau Economique)が一七五八年、「自然權論」(Le droit nature)が一七六五年であるのであるから、此點には疑問の餘地を剩さないのである。

然らば、スミスは何人に其自由主義思想を得たか。此疑問は必しも答へ易くない。併し彼れのグラスゴウ大學々生時代の恩師たるハチソン(一六九四—一七四六年)の思想は、思ふにスミスの思索に發足點を供したものであらう。ハチソンはプフエンドルフ(Pufendorf)の自然法學

の流を汲み、倫理學說上に於てはシャフツベリイ（Shaftesbury）、政治學說上に於てはロック（J. Locke）を奉ずる人で、經濟政策上に於ては猶ほマアカンチリストの域を脱しなかつたが、政治上宗教上に於ては自由主義を主張する者であつた。彼れは天賦の人權として、生存に對する權、自由判斷の權、無主物占有の權、等合計八を數へてゐるが、其中特に注目すべきは、彼れが其第二として、各人は他人を害せざる限り任意其能力を行使すべき自然の權利を有するといひ、之を「自然的自由」と名づけてゐることである。スミス以前に經濟上、殊に貿易上の自由主義を主張したものには、バアボン（Nicholas Barbon）、ノオス（Dudley North）、ヴンダリント（Vanderlint）、ヒユウム、タツカア（Josiah Tucker）等があり、殊にヒユウムの貨幣及び貿易差額論は恐らくスミスを益すること甚大なりしなるべく、彼の「政治論」（Political Discourses, 1852）は「明かにスミスに取つて彼れの講義以前に現れた、他の何れの書籍よりも有用であつた」と言はれてゐるが、スミスに其自由主義の基礎を與へたのは、グラスゴウ大學に於けるハチソンの道德哲學講義であつたといふことは蓋し大過なきものであらう。

フイジオクラアトの影響に關聯のあることであるが、國富論は正義の法に抵觸せぬ限り、各個人の自利追求を是認して之を自由に放任すべしと說き、例へば「吾人が毎日食事を爲すこと



を得るは、屠獸者、釀造者又は麵包製造者の慈愛に依るものでなくて、彼等各自が其利益を思ふが爲めに外ならぬ。吾人は彼等の人情に訴へずして、其自愛心に訴へ、決して吾人自身の必要を告げずして彼等の利益を告げる」と說いてゐる。然るに「道德情操論」は道德の基礎を同情に求めてゐるので、此二著の與へる印象は、一見したところでは同じからざるものがある。そこで此二大著の根本思想は果して能く容れるか否かの問題が起り、偶々スミスの佛蘭西旅行が其中間期に行はれた爲め、彼れの思想が佛蘭西學者との接觸の爲めに變化したのであると解し、甚しきは、英吉利に留まれる限りスミスはハチソン及びヒユウムの影響の下に唯心論者であつた。佛蘭西に行はれた唯物論に接觸すること三年の後、彼れは唯物論者として英國に歸來した」といふ者もある（Skarzynski）。併し此解釋は今日では認められて居らぬ。それは正義の範圍内に於ける自利心の發動は、道德情操論が既に之を承認して居るのみならず、國富論刊行後も、著者自身明かに之と其舊著とを、統一ある全一體の部分として取扱つてゐたからである。

然らば、スミスの大陸旅行は彼れの思想に影響を與へなかつたかといふに、決してさうではない。而して其事を見るには、彼れが渡佛前に試みてゐた大學の講義筆記と國富論との内容を比

較して見るのが捷徑である。それをして見ると、國富論にあつて講義筆記に缺けてゐるものゝあることが分る。經濟理論の上から見て其の最も重要なるものは、國富論第二篇に資本理論及び生產的不生產的勞働論の採用せられ、第一篇の終りに近く價格理論中に分配論が潛入し、又年々の生產といふ概念の力說せらるゝに至つたことである。然るに此の新に加はつたものは、皆なこれフイジオクラアト學說の特色とし、若しくは其と密接の緣故あるものであるから、是をスミスの大陸旅行の收穫と見ることは蓋し略ぼ異議なき所であらう。而して大體を言へば、此の新たに獲たものは國富論第二篇の主要なる內容を成してゐるから、彼の第一篇の理論は主として之を其鄕土に得、第二篇は主として佛蘭西思想の影響の下に書かれたと言つて差支あるまい。然らば、此兩篇の特色如何といふに、それは講義筆記を取つて之と比較する迄もなく、仔細に觀察すれば判然看取し得るものがある。卽ち第一篇が主として價値、價格、賃銀、利潤、地代の如き、財貨と財貨、若しくは財貨と勤勞との交換現象を說明せんとするに對し、第二篇は交換現象から離れて、財貨が自然から採取せられ、生產、製造せられ、分配せられて遂に其終局消費者の手に到達する迄の全行程を包括的に概觀せんとしてゐることがそれである。大體に於て、第一篇は交換價値又は價格現象を究め、第二篇は全國民經濟に對する貨物供給の理法



を明かにせんとして居る。卽ちアダム・スミスは國富論に於て、其既得の交換理論と、フイジオクラアトに學び得た國民經濟の有機的考察とを結合して一體たらしめんと試みたものだと謂ふことが出來る。但し此結合の試みは充分成功しては居らぬ、といふのはキアナン（Edwin Cannan）、ハスバッハ（Wilhelm Hasbach）等の權威ある學者もいふ通り、第一篇及び第二篇の內容が未だ渾然たる一體を成さず、互に他を缺くも完全に自立し得るものゝ如くであるからである。

フイジオクラアトとの接觸以前に既に有してゐた交換經濟學をスミスは何人に得たものであらうか。前記ハスバッハの考證する所に由れば、是より以前の英吉利には、人口、國富、貨幣、利子、貿易差額、勞働等に關する個々の經濟理論はあつたが一個の經濟學體系といふものは立てられて居らず、その僅にある一は、自然法學の一部として說かれたものに外ならなかつた。卽ちグロシウス（Hugo Grotius）の「戰爭及び平和法論」の第二篇第十二章契約論中に價値、價格、貨幣、貸借を論じたのからプフエンドルフ（Samuel Pufendorf, De officio hominis et civis, 1723）ヲルフ（Christian Wolff, Jus naturae et gentium, 1740, 1749）を經てハチソンに及ぶ思想家に依つて其自然法學の中に說かれたものがそれである。就中ハチソンは一

面自然法學をプフエンドルフに承けると共に、他面英國に發達した經濟理論を攝取することに依つて、其經濟學智識に於ては遙にプフエンドルフを凌ぎ、且つ勞働概念を說くに特に力を用ゐて居る。今國富論第一篇を取つて、之を上記自然法學者の經濟論と比較する時は、其間に著しき一致のあることが認められる。「彼處でも此處でも價値論があり、價値が使用價値と交換價値とに分れ、價格、貨幣、利子、賃銀論があり、價格論と所得論との密接なる結合がある」のである。(これはハスバッハの言であるが、價格論と所得論との密接なる結合云々の一點に就いては異論をなすものがある)。加之、それはハチソンの創見とは言はれぬが、價値尺度を購買せらるゝ勞働に求める說に於て、彼れとスミスとの間に著しき類似のあることも注目に値する。

要するに經濟學の建設といふ見地から見れば、スミスは、獨英自然法學者の體系と佛蘭西フイジオクラアトの其れと、當時に行はれてゐた此の二大體系の融合を企てたものと謂ふことが出來る。其企圖の成果は完璧を以て許し難きこと前述の如くなるにもせよ、近世經濟學を廣大なる基礎の上に確立せんとした、綜合家としてのスミスの面目は最もよく是に窺はれるのである。

併し乍ら、綜合の才能は、他面に於てアダム・スミスの短所をも成して居る。彼れは實際生



活に對する豐富なる智識を有し、又一偏の理窟に依賴して判斷を下すことをせぬ、現實主義的常識家であつたが、其代り此常識は屢々彼れの透徹一貫した理論家たることを妨げた。理論家としての彼れの短所は、必しも其推究の出發點の謬れることではなくて、其の當初の立脚地を固執せぬことにあつた。自家の見地と相容れぬ觀察を拒絶する理論的潔癖の足りないことにあつた。此短所は國富論全篇を通じて、殊に其價値論、分配論に見られる許多の矛盾、曖昧、雜駁に其跡を留めて居る。國富論は經濟思想史上に於ける不朽の偉著たること勿論であるが、理論的には缺陷多く、決して完成品を以て許す可からざるものであつた。故に經濟學の確立の爲めには、先づスミスに存する矛盾曖昧雜駁を整理するものが出なくてはならぬ。リカアドオは卽ち其の第一人であつた。

〃 スミスの直接後繼者として擧ぐべき一人は、ベンサム(Jeremy Bentham, Defence of Usury etc. 1789)である。彼れは啻にスミスと共に利息徵收の禁止を否議したのみならず、更に一步を進めて、利率の最高限度を法定すべしといつたスミス自身の意見にも反對して、徵利貸借の完全なる自由を要求した。但し彼れの唱へた功利主義と經濟學との密接なる關係は、リカアドオに由つて結ばれたものであるから、茲には其事を略する。大陸に於てスミスを祖述し、其學

說の普及に最も貢献した者は佛蘭西のセヱ（Jean Baptiste Say）である。其著「經濟學」Traité d'économie politique. 1re ed. 1803.は啻にスミスの思想を明晰なる文章體裁を以て說明したに止まらず、其間併せ述ぶるに若干の獨創的意見を以てした。一般的生產過剩の不可能なることを說いた「販路論」の如きは其一である。獨逸に於けるスミス遵奉者として擧げらるゝ者は、クラウス（Ch. J. Kraus, Staatswirtschaft, 1808–11）ルユウデル（A. F. Lueder, Über Nationalindustrie und Staatswirtschaft, nach Adan Smith bearbeitet, 1800–04）ロッツ（E. Lotz, Revision der Grundbegriffe der Nationalwirtschaftslehre, 1811–14）ラウ（K. H. Rau, Lehrbuch der politischen Oekonomie, 1826–37）其他である。

國富論はスミスの生前五版を重ね、初版發刊の年に既に僞版と覺ぼしきものがダブリンで出版せられて居り、其佛譯は一八〇二年に出たGarnierの標準的飜譯出づるに先だつて既に二種の版本が行はれ、獨逸では、一八四六—七年のスチルネル(Max Stirner)の飜譯までに同じく二種の譯本が出てゐたことに由つて其流布の弘きを察することが出其る。爲政家中にあつては傳ふる所に由ればピットは之を熟讀し、スミスをして著者の思想を理解することは著者自身に



優ると嘆賞せしめたといふことである。國富論出でゝより數十年間、自由主義的改革の要求者は殆ど常にスミスを引いて其論據とするの觀があつた。而して一八四六年の穀物關稅法撤廢、及び一八六〇年の保護關稅廢止に至つて、アダム・スミス自身夢想しなかつた自由貿易は、遂に英吉利に實現せられたのである。

國富論の刊行は所謂十八世紀の產業革命を惹き起した各種工業機械の發明と略ぼ時を同じうした。スミスが目前に見た工業は、手工業ならぬ迄も家內工業が、或は精々其分業論に引かれた留針製造の實例の如き、マヌフアクツウル（手工工場）制で、機械を備附けた工場の出現と其に伴ふ諸般の社會的變革は、未だ彼れに取つては殆ど問題とはなつてゐなかつた。國富論は、產業革命の前夜とは言はぬ迄も未だ其進行中に書かれたのである。然るに、既に十八世紀末年に至つて見れば、個人と個人、個人と全體との間にスミスの樂觀したやうな利害の調和があるといふ說は、事實が之を許さなくなつた。木綿紡績業を中心とする工場工業の出現に依つて、一方生產力增進の恩澤は爭ふ可からざるものであるが、他面手工業家內工業は爲めに壓倒せられ、工場內に於ては女子少年勞働者の虐使が行はれ、成年男工の賃銀は壓迫せられ、英國全體の工業化と共に漸く外國穀物の輸入が增加して農業勞働者失業の禍を甚しからしめた。此

變動の重大なる一結果は、貧民救助費の膨脹となつて現れた。一七五〇年に英蘭及びエエルスの人口約六百五十萬の時、救貧費額は六十九萬磅であつたものが、一八一八年人口一千一百七十萬の時救貧費は七百九十萬磅に上つたのである。而して救貧方法として當時行はれた貧困者の賃銀補給の制度が下層民の輕卒なる早婚を促す結果があつたことも確かに事實であらう。

茲に於てスミスの唱へた自由主義は保守し乍らも、自由競爭の行はれる處は利害の調和ある處ではなくて、寧ろ人間は狹隘なる自然の限界内に於て其の乏しき賜を爭奪しなければならぬ約束の下にあるものだといふ、悲觀的見解が擡頭せざるを得なかつた。是を代表するものはマルサス及びリカアドオである。

## 第二節　マルサス (Thomas Robert Malthus)

マルサス（一七六六—一八三四年）に其人口論を著さしめた誘因は極めて樂觀的なるゴドキンの社會改造論であつた。マルサスは一七八五年にケムブリッジ大學ジイサスカレッヂに入つて學び、一七九七年には其校友教師（フエロウ）となり、一八〇五年東印度會社の設立にかゝるヘリイベリイ(Haileybury)學校の歴史及び經濟學教授に聘せられて其殁年に及んだ。マルサスの父ダニエルは學識ある紳士でヂルテエルと文通し、又ルソウと交際があつて其著作に關する遺言執行を托されたやうな人であつたが、此父は當時の佛蘭西革命時代の急進思想に同情を有し、從つて理性に依る人間完成の可能性を說くゴドキン等の意見にも贊成であつたのに、子は是に反對であつたから、父子はゴドキン其他を主題として爐邊に說を戰せはた。人口論は此の父子の家庭の討論から生れたものである。匿名で公にせられた初版の標題は左の通りであつた。

An Essay on the Principle of Population as it affects the Future Improvement of Society, with remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other Writers, 1798.

問題を惹き起したゴドキンの著作は、一七九三年に出た「政治的正義論」

William Godwin, An Enquiry concerning Political Justice, etc.

と、一七九七年に出た「研究者」(Enquirer) と題する文集とであつた。彼れが信ずる所に由れば、生れながらの人間は猶ほ白紙の如きもので、その善となり惡となるのは一に外界の境遇の左右する所である。然るに其の外界の境遇は、人爲の制度の爲めに不良不公正を極めてゐる。そこで現行社會制度の根本的改造、就中私有財産制度及び政府の撤廢が要求せられる。彼れが

無政府主義の創唱者と目されるのは此の爲めである。彼れが所謂正理に基づく眞正の所有權制度は、一物を最も之を欲望する者に、即ち一物を其所有に依つて最も利益する者に屬せしめんとするものであるが、是に對して起るものは、斯る所有制度の下に於ては人口が增加し、此增加が結局斯る制度の維持を不可能ならしめはせぬであらうかといふ疑であつて、既に之を表明するものにロバアト・ヲレス(Robert Wallace)があつた。併しゴドヰンは斯る憂懼を齒牙にかけてゐない。假令人口過剩が事實となつて現れることがあつても、地球面の四分三が未だ耕作せられて居らぬ現在に於ては、それは非常に遠い將來に豫期すべき事である。加之、人間の發達に由つて、人口過增の危險は避け得られるとて、人間が理智の力に由つて性慾を失ひ、不眠不死の狀態に達し、戰爭、犯罪、司法、政府なく、疾病悲痛憂愁怨恨なく、「各人は名狀し難き熱心を以て全員の利益を追求する」日の到來すべきことを彼は想像したのである。

マルサスは此の極端なる樂觀的空想を破壞せんが爲め、更に其人口原則を提げ來つたのである。謂へらく、ゴドヰン等の說く所は極めて愉快であつて、彼れも其の眞實ならんことを祈るものである。しかし彼れの見る所では「大なる、人力を以て如何ともすべからざる困難が途に横はつて」居る。それは人口が食物よりも速に增殖するといふ人口原則のあることである。



マルサスは二個の命題から出發して居る。(一)食物は人間生存の爲めに必要である、(二)男女兩性間の欲情は必然であつて、將來も殆ど其現在の狀態と變らぬであらう、といふのがそれである。此の斷案が承認せられたものとして次に彼れは「人口增殖力は、土地の人間食物を產出する力よりも無限に大きく、」人口は之に對する制限のない場合には「幾何級數の比を以て增加し、食物は僅に算術級數の比を以て增加するに過ぎぬ」といふ。此斷定の根據は何處にあるかといふに、人口の增殖に就いては、マルサスは比較的人口增加に對する制限のない北米合衆國の事實を見て、其處では人口が二十五年毎に倍加することを指摘して居る。食物增加の速度に就いては、彼れは土地收穫遞減法則といふ名稱は擧げて居らぬが、結局此法則を承認するのであらう。次のやうに說いて居るのである。假に今日英國に於て最善の政策を盡して農業を奬勵することに依つて、二十五年間に農產物が倍加するものと假定すれば、何人も其見積を少なきに失するとは言ふまい。而かも更に次の二十五年間にそれが四倍することは、吾々の智識を以ては想像し得られぬ。吾々の想像し得る所は、第二の二十五年間に更に現在の生產額丈けが增すことを以て極度とする、云々。

斯く人口と食物增加力が異なるとすれば、人間の生存に食物は必要不可缺のものであるので

あるから、何等かの方法に由つて人口の増加を妨げて二力を平均せしめねばならぬ。動植物界にあつては、それは「種子の徒費、疾病、早死」に依つて行はれるのであるが、人間の場合には理性が本能の發動を妨げるから、問題が餘程複雜になる。卽ち人間の場合には、人口增加の制限は、食物の缺乏を顧慮して結婚を差控へる豫防的制限と、現實の窮厄の爲め既に生れた人口に壓迫の加へられる積極的制限との二つになる。然るにマルサスは、人間が生活の顧慮の爲め、自然の命に逆つて結婚を差控へる結果は、正當ならぬ男女の接觸に導き、「殆ど必然的に罪惡を生む」と考へてゐたから、生命の增殖と食料增加との不平均の結果は「人類にあつては貧窮及び罪惡である」。別言すれば、(一)人口の增加は必然食料に依つて制限せらる。(二)食料增加する時は人口必ず增加す。(三)人口の優勢なる增殖力が抑壓せられ、且つ實際の人口と食料とが平均を保つのは貧窮と罪惡とに依る。といふ結論が生ずるのである。

マルサスは此結論を以てゴドキン等の人間完成可能論に臨み、ゴドキンの大なる誤謬は、「社會に見らるゝ殆ど一切の罪惡及び貧窮を人爲の制度に歸する」ことにある。人爲の制度は人類に害をなす明白有力なる原因たるの觀があるけれども、是等は素と表面的の原因であつて、人生の水流を汚濁する深因に比較すれば、水面に浮ぶ羽毛に過ぎざるものであると言つた。右の



所謂深因は、言ふ迄もなく人口原則である。今假りにゴドキンの說くやうな理想社會が英吉利に實現せられ、潤澤なる生產物は仁慈公正の精神に從つて、欲望に應じて各員に分配せられ、男女の結合は全然自由にせられて、何人も其子女の扶養する義務を負はぬことになつたものとすれば、此狀態は人口增殖に最も便利なる狀態であるが、姑らく人口增加の速度は亞米利加と同樣に二十五年每に倍加するものとすれば、五十年後には人口は現在の七百萬の四倍、卽ち二千八百萬なるに對して、食物は二千一百萬人を養ふ丈けしか生產せられず、七百萬人分の食料が缺乏することになる。年を閱することと更に五十年ならば、三千五百萬人分の食物に對して人口は一億一千二百萬人に上り、慘憺たる食物爭奪の光景は到處に出現せざるを得ぬであらう。而かもこれは「全然有ゆる人爲の制規に關係なく、人性固有の法則に依つて」斯うなるのである。而して平等社會が假りに一旦實現せられても、斯く速に崩解せざるを得ない理由は、また斯る社會が當初から建設せらるゝ筈がないことを證明するとマルサスは言つて居る。財產の私有や結婚の制度は、ゴドキンが人爲の惡制度として攻擊する所であるが、マルサスに由れば、寧ろ是等人爲の制度は、自然の法則に基づく貧窮を除却することこそ出來ぬが、それを「可なり緩和する方に傾いて」ゐるのである。

同じ人口原則は又マルサスをして、富者の所得を割いて貧者に分つ救貧制度の無效有害を切論せしめた。曰く「英國救貧法は、……二の方法に於て貧民の一般狀態を壓迫する嫌がある。其の第一の明白なる傾向は、其を養ふべき食物を增加せずして人口を增殖せしむる傾があることと是れである。第二に、救貧民院內に於て、社會の中、概していへば、最も價値ありとは認め難き部分に依つて消費せらるゝ食物量は、社會の一層勤勉、一層價値ある成員に屬すべかりし配當分を減少せしめ、斯くして同樣の方法に於て、更に多くの者をして獨立を失ふことを已むなからしめる」と。彼れは貧困の救濟に對しては住居移轉の自由を認め、農耕を奬勵する等の二三の彌縫策以外には其手段を知らぬと告白して居るのである。

マルサスは、人口論第一版で右のやうに說いた。然るに其後彼れはゴドキン其人とも會見し、諸家の批評をも受け、又外國にも旅行して見聞を廣めた結果、ゴドキンの理性過重に對して慾情の力を强調するに過ぎたこと、卽ち後年自ら告白したやうに、弓の曲れるを矯めんが爲め、之を他の一方に曲げ過ぎたことを發見したのである。そこで彼れは一八〇三年の人口論第二版（第二版以後マルサスは署名した）に於て、新に「道德的抑制」(Moral restraint) なるものを說いた。道德的抑制とは結婚を差控へて、而かも其獨身期間中淸潔なる品行を保つことの



謂である。これを「不正常なる滿足を伴はぬ豫防的制限」又は「愼重なる動機よりする結婚の抑制」にして、其抑制期間中嚴格に道德的なる行狀と相伴ふもの」と彼れは稱して居る。卽ち此の一部改訂せられた意見によれば、人口と食物とを平均せしむる制限は、罪惡、貧窮及び道德的抑制の三となるのである。而して此三者中、その何れを取るべきかに就いては固より議論のあるべき筈はない。

斯くマルサスは罪惡にも貧窮にも陷ることなくして人口と食料とを相調和せしむべき方途のあることを認めるやうになつたのであるから、其議論全體が與へる印象は、餘程陰鬱の度を薄くした。マルサス自身も此點に重きを置いて、人口論第二版は之を一個の新なる著述と見ても差支ないと言つて居る。其後人口論は著者の生前猶ほ度々版を重ねて第六版に及んだが、議論の要旨は變易する所を見なかつた。

マルサスは人口原則の發見者だとはいはれない。遠くアリストテレエスのプラトオ「法律論」に對する批評は姑く措くとするも、人口が食料よりも、速に增殖せんとする傾あることは、既にボテロ（Giovanni, Botero）タウンセンド（Joseph Townsend）スチュアアト（James Steuart）フランクリン（Benjamin Franklin）ヤング（Arthur Young）オルテス（Giammaria Ortes）

等に依つて說かれて居る。此等先驅者に比較しての彼れの長所は、マルサス研究の權威者たるボオナアに由れば、彼れが普遍的原則を確實に把持したことである。曰く「他の人々は救貧法に關し、古代諸國民の稠密なる人口に關する特殊問題に對して正しき答を與へたかも知れぬ。マルサスは何故に凡て是等の解答が正しくなければならぬかを示す最初の人である」と。

右のボオナアは、アダム・スミスの著書が「諸國民の富の本質と原因とに對する研究」なるに對し、人口論は「諸國民の貧困の本質及び原因に對する研究」であるといひ、又アダム・スミスは凡ての人が賞揚して何人もが讀まぬ書を、マルサスは何人も讀まずして凡ての人が惡罵する書を遺したと言つた。果して讀むか讀まざるかは姑らく措き、人口論に對しては最初から盛んな反響があつた。反對說は樣々の方面から唱へられたが、就中社會主義者がマルサス排斥に最も努力したのは當然の事である。蓋しマルサスは貧窮及び罪惡を人口原則といふ「自然の法則」又は「人性固有の法則」の作用に歸するものであるから、若しマルサスが正しければ、現行社會組織を改造すべしといふ議論は成立せず、社會主義者の努力は結局徒勞に終ることが必然でなくてはならぬからである。マルサスの生前並に死後に於て、固より二三の例外はあるが、代表的社會主義者は大概彼れを非難し痛罵するのが常になつて居る。就中マルサス攻擊の



最も辛辣なるものゝ一は、マルクスのそれであつて、彼れはマルサスが說いたやうな、一方には人口、他方には食物との關係を言ひ現はす永久不易の人口原則といふものは、人間が干涉する以前の動植物界にはあるけれども、人間社會にはない、人間社會に通用する人口法則は、常に時代毎に、卽ち社會の發達段階毎に違ふものである、卽ち自然法則でなくて、歷史的法則であると主張した。卽ちマルクスは、マルサスが食物に對する人口過剩と觀察したものを、單に失業勞働者の發生に過ぎぬものとして說明する。資本に對しての相對的人口過剩をマルサスは食物に對する絕對的人口過剩と誤認したと謂ふのである。然らば、此の失業者は何故に發生するかといへば、それは資本の蓄積と共に、勞働者雇傭に充てらるべき賃銀資本、卽ち所謂可變資本の總資本に對する比例が減退するからであるといふ。從つて資本主義的生產方法の撤廢と共に相對的人口過剩の問題も消滅するといふ結論になる譯である。

此外にも猶ほ幾多の反對論は唱へられ、佛蘭西經濟學者及び近年に於ける獨逸學者中にはマルサス反對者は尠からずあるのであるが、次節に述べる通り、リカアドオは全然此を奉じ、其後繼者も大體同樣であつたから、或意味に於てはマルサスの根本思想は「經濟學の確定財產」（ロッシャアの言）となつたと言づて好いのである。

マルサスの名聲を定めたものは、無論人口論であるが、それ以外にも彼れの地代論、恐慌論、價値論は夫々の學說史に傳へらるべきものである。彼れの地代論は、リカアドオの場合と同じく、一八一三—五年の穀物法論爭に刺戟せられて發表せられたもので、多くの點に於てリカアドオの其れに近似し乍ら、彼れが地代を以て自然の恩惠となすの點に重きを置き、決してこれが「獨り地主にのみ有利で、消費者には比例的に有害なる價値の移轉に過ぎぬ」ものでないといふことを力說する點に於て、地代は自然の鄙吝の爲めに生ずるといふリカアドオ說と相容れぬものであつた。

恐慌論に於ては、マルサスはセエ、リカアドオ等の、供給は反面需要其者を意味するといふ、普遍的生產過剩不可能論に對して、シスモンヂ等と共にその起り得べきことなるを認めた。

價値論に於ては、リカアドオの生產上に費された勞働を以て價値尺度とするの說に對し、マルサスは當初は穀物と勞働との中項を以て之に充つべしと說き、後にはアダム・スミスに從つて專配せられ若しくは購買せらるゝ勞働量をそれとすべしと主張し、又リカアドオに對して、價値決定に就いては獨り供給の條件のみならず、需要を顧慮するの必要なることを說いた。研



究方法に就いては、リカアドオの抽象的推論に對して經驗的事實を重んじ、「早熟の概括を下さんとする傾向」、「其理論を經驗の試驗に附することを好まざるの風」を排斥した。是等の立場は皆な彼れの「經濟學原理」

Principles of Political Economy, Considered with a View to Their Application, 1820, 2nd ed. 1836.

に就いて窺ふことが出來るのである。

## 第三節　リカアドオ　(David Ricardo)

〃アダム・スミスが其の綜合の大才に依つて、近世經濟思想の其より發流すべき貯水池となつたと謂はれるに對し、其の異常なる分析的頭腦に依つて近世理論經濟學の創始者となつたものは、デギッド・リカアドオ(一七七二—一八二三年)である。〃リカアドオは和蘭から渡來して歸化した猶太商人を父にして倫敦に生れ、株式仲買として成功し、後に下院に選擧せられた人であるが、其學歷は殆ど皆無で、高等の學校に籍を置いたこともなく、講壇に立つたことは勿論なかつた。學問は好む人であつたが、其讀書の範圍は狹く、哲學文學に對する素養は皆無ではな

いが極めて不充分であつた。故に彼れの經濟學體系は、偏へに其業務上の經驗に由つて得た智識と其の天賦の推理力、而して實務處理の間に鍛錬せられた其の推理力に依つて打ち立てられたと謂ふべきものである。たゞ彼れの興味を經濟學に向はしめた誘因は何であつたかといふと、偶々スミスの「國富論」を一讀したことがそれであつたと傳へられて居る。

斯くアダム・スミスに刺戟を受け、常に彼れに對する敬意を忘れず、又幾多の點に於て國富論を其思索の基點とはしてゐるものゝ、リカアドオとスミスとの間には一見して看取せらるゝ重要なる幾多の相異がある。既述の通り、スミスの經濟思想には其根柢に理神論に發する樂天主義が横はつて居つて、國富論の通篇到處に、豫定せられた諸利害の調和が說かれてゐるが、極めて非哲學的なリカアドオにあつては、此の形而上學的樂天觀は全く缺け、其議論はたゞ偏へに經濟的事物相互間の因果理法をのみこれ求め、而して社會階級の間に重大なる利害衝突の避け難きものあることは、遠慮なく指摘せられて居る。序ながら記せば、極めて非哲學的なリカアドオに若し何等かの哲學ありとすれば、それは「最大多數者の最大幸福」に立法及び道德の原理を求めるベンサム主義であつた。彼れは其友人にしてベンサムの高弟たるジエエムス・ミル（James Mill）に由つて「道德及び立法の原理」（Introduction to the Principles of



Morals and Legislation, 1st ed. 1789）の著者を知つた。ベンサムが、ミルを己れの思想上の子、リカアドオをミルを通じての思想上の孫だといつた言葉は屢々引用せられる所である。斯くリカアドオが功利主義を奉ずると共に、ベンサム主義者はまたリカアドオの經濟學を我物とした。功利主義哲學と英吉利經濟學との間には斯くして特別の親緣が結ばれたのである。

同時にリカアドオが經濟學の主要問題とする所もアダム・スミスとは異つて居る。アダム・スミスが國富の「本質」と其增減の「原因」とを主として論じたのに對して、リカアドオの主要著作「經濟學及び課稅之原理」

On the Principles of Political Economy and Taxation, 1st ed. 1817. 3rd ed. 1821.

は土地生產物が地主、資本家及び勞働者なる三階級の間に抑も如何なる割合を以て分配せられるか、「此分配を左右する諸法則を決定する」ことを其主要問題として居るのである。

リカアドオに此の經濟學「主要問題」を注目せしめたものは、外國からの輸入穀物に對する關稅を引上げることの可否如何といふ當時の時事問題であつた。是より先き英國は其工業の著しい發達と共に、元と穀物輸出國であつたのが、漸く反對に其の一部食料品の供給を外國に仰ぐやうになつてゐた。而してそこへ奈翁戰爭が終了して俄に低廉なる穀物が流入せんとする。リ

カアドオの思索を刺戟したものは、此の所謂穀法論爭によつて惹き起された穀物の低廉を不利とする地主階級と餘の諸階級との利害關係、及び穀物の廉不廉に由つて影響せらるゝ各階級收得分の割合果して如何の疑問であつた。而して此疑問を解くものは彼れの地代法則である。

此の穀物關稅問題に刺戟せられてリカアドオと同じく地代理論を說いたものに、既記の如くマルサス（An Inquiry into the Nature and Progress of Rent etc., 1815）エスト（Edward West, The Application of Capital to Land, 1815）其他がある。而してマルサスとリカアドオとは其地代論に於て重要なる共通點と共に若干の相違點を持つて居り、其他の問題に就いても互に說を殊にする所が甚だ多かつたのであるが、たゞ人口原則の一點に於てはリカアドオは全然マルサスに服し、マルサス反對論者の攻擊は、たゞ其强みを證明することにのみ役立つたと信じて居つた。一方エストは、土地收穫遞減法則を公式化した最初の一人と認められて居るが、リカアドオはエストを俟つ迄もなく、當然自明の理として此法則を承認して居る。そこでリカアドオは漸次に生產力の減退する土地の上に、苟も生活に餘裕ある限りは、其極度迄增殖せんとする人間を棲まはせ、而して其人間は、資本家も地主も勞働者も、皆リカアドオが日々其業務生活上に於て接觸する仲買業者金融業者等の如く、最も機敏にして合理的なる打算家であるものと想像した。此前提に基づいて彼れは其分配論を演繹したのである。而して其推究をなすに當つては、經驗的事實の細目に捉はれず、自ら識りつゝ其の「餘りに理論的である」ことを避けなかつた。其分配論の大要は左の如きものである。

既に生活に餘裕ある限り人口は增殖するといふ約束であるから、勞働者の賃銀は、勞働需給の關係上久しきに亙つては其生活必要費以上に上ることが出來ぬ。これが後年ラッサアルに依つて「賃銀鐵則」と名づけられたものである。さて土地の收穫が此賃銀を超過する其餘剩は、資本家の利潤となる。利潤の刺戟は資本の蓄積を促す。資本の增加は勞働需要の增加を意味し、是に因る賃銀の騰貴は人口の增加を促す。此人口を養ふ爲めには、更に從來よりも豐度の劣等なる土地を耕さねばならぬ。此の豐度劣等なる土地の收穫から賃銀を控除した餘剩の利潤は、當然前に比して減少する。然るに、自由競爭は資本利潤率に二率あることを容さないから、斯く人口の增加に連れて新たに耕される最劣等地の利潤率は、農工商、一切產業の利潤率を決定する。然るに、先きに耕された優等地の利潤も是に由つて律せらるゝものとすると、收穫から賃銀と利潤とを控除しても、猶ほ其以上に餘剩が殘らなくてはならぬ。これが地代である。

故に地代は耕作せらるゝ土地に優劣の差等のあることに由つて生じ、益々劣等なる土地の耕さるゝに從つて騰貴し、而して地代の騰貴は反面に於てそれ丈け利潤率の下落することを意味する。玆に地主と資本家との間に避け難き階級利害の衝突がある。リカアドオがマルサスの「正しき地代說」を唱へたことを認めながら、彼れの如く地代を以て「寛大なる攝理の賜」と爲すことの反對に、これを自然の鄙吝の爲めに生ずるものとしたのは是が爲めである。斯くして人口の增加に連れて愈々劣等なる土地が耕作せられて行けば、利潤は益々低減するが、抑も資本の蓄積を刺戟するものは利潤であるから、利潤が零に達せぬ迄も或程度以下に降ると資本の增加が止む。資本の增加が止めば、人口の增加も止み、一切の發展が廢せられる。リカアドオは此の一切の發展の起動力ともいふべき資本利潤の高いことを尙び、之を倘ぶことを殆ど之を自明の理となすかのやうであつた。そこで穀物關稅に依つて自國の劣等地耕作を促し、以て地代を騰貴せしめ、利潤を下落せしむることを非とするの論據が生ずる。

以上穀物始め一切財貨の價値、價格は姑らく之を度外したが、リカアドオに由れば、一物の價値は其生產費に因つて定まるものであるから、人口增加に因つて益々劣等なる土地が耕作されゝば、地代は騰貴し、又穀物の價値並に其貨幣的表現なる價格は騰貴する。併し此價格は其



時の最劣等地、即ち無地代地の生產費に因つて定まるものであるから、假りに比較的優良地の地主が進んで其地代の收得を放棄したところで、穀物の價格は下落する筈はない。故に曰く、地代は價格中に入ることなしと。これがリカアドオの學說中に於て最も生命ありと認めらるゝ其地代論である。此地代論に對しても勿論其後幾多の反對說は提起せられてゐる。其の最も重なる一は、米人ケリイが唱へた、土地の耕作は、リカアドオが認定したやうに、肥地に始まつて漸次瘠地に及ぶものではなくて、反對に肥地の耕耘は後にせられるものだといふ說であり、他の一は、社會主義者ロオドベルトスやマルクスの唱へた、現耕の最劣等地と雖も猶ほ普通資本利潤以上のものを產出するといふ絕對地代說である。併し大體に於て地代論は、リカアドオの學說中最も多數の學者の承認を博したものだと謂つて差支なからう。是に對する批評は多くは之を否定せずして、其修正若しくは擴充を求めて居るのである。

さて「經濟學及び課稅之原理」の卷頭に說かれてゐる價値論であるが、價値論に於ては、リカアドオはアダム・スミスに出發して、之を終始一貫したものにしようとして居る。その使用價値と交換價値とを分つことは、スミスと同樣である。而してリカアドオが主として問題にするのは、任意に生產し得べき財貨の交換價値であるが、此價値は「其生產に必要なる勞働の相

對量に由つて定まり、其勞働に對して支拂はるゝ報償の多寡に由つて定まるものではない」といふのが彼れの定則である。玆で彼れは、アダム・スミスが未開社會と文明社會とに由つて諸財貨の交換比率を左右する法則が同一でないやうに說いたのに對し、彼れは社會發達段階の如何を問はず、諸貨物の交換價値を決するものは、常に其生產に直接間接に投入せられた勞働量であるといふ原則を以て一貫せんとした。而して此立場から、彼れは「支配せらるゝ勞働量」を價値尺度とするスミス、並に結局スミスを奉ずるに歸着したマルサスの價値論に反對したのである。これが幾多の社會主義者、就中マルクスに多大の影響を與へると共に、又他面幾多の反對說を喚び起した彼れの價値論である。

これ丈けの處では此說は當然勞働價値說と稱すべきものであるが、實はリカアドオは此の單純なる原則を以て一貫することが出來なかつた。それは、同じ一定量の勞働を生產に投入するにしても、それを直接生產物其者に費すのと、それを機械又は道具の生產に投じ、而して其を用ゐて或物を造るのとでは、其の生產物の價値に及ぼす影響は同一でないこと、或は又一定數の勞働者を二年に亙つて使用するのと、其二倍の勞働者を一年間使用するのとでは其結果は同一でないことに彼れが着目したことに由るものである。そこで彼れは投入勞働量の外に勞働成



果が市場に齎される迄に經過する時間の長短も亦た、價値を與かり左右するといふことを言明するやうになり、漸く此「修正」に重きを置くやうになつた。學者中に彼れの學說を勞働價値說と言はずして生產費說と稱する者があるのは是を以てゞある。

此外リカアドオの學說として傳ふべきものには、數量說に基づける其通貨論、スチュアアト・ミルの推重した國際貿易若しくは國際價値理論としての比較的生產費說等がある。

上述の如くリカアドオは、人口原則と土地收穫遞減法則とがある爲め、社會の發達は、彼れが反社會的階級と認める地主階級を獨り利益するに歸着するとの結論に到達した。而して地主が收得する地代を除けば、殘る所のものは勞働者と資本家との間に分割せられるのであるから、此二階級の利害も亦た相衝突することを免れぬ。彼れが幾度となく繰返して說いたのは、利潤を騰貴せしむるものは賃銀の低廉の外にはないといふ命題であつた。さて勞働者階級の狀態であるが、彼れは雇主對勞働者間の契約も他の有ゆる契約と同じく之を全然自由に放任すべきものであると說き、僅にマルサスの所謂道德的抑制に之を改善すべき唯一の途を求めた。玆に於てリカアドオは彼れの學說を以て資本家階級の利益代辯論と爲し、其推論の動機の正純をも疑ふ批評を受けることを免れなかつた。固より彼れの眼界が其職業と生活環境の爲め、不知不識

の間に局限せられてゐたといふことは避け難き所であつたらう。併し其以上に、彼れが故らに所信を枉げて資本家に有利の結論を引くに努めたといふは當つて居らぬ。彼れが晩年其說を改めて、機械の採用は屢〻勞働者に不利であるといふ勞働者の意見を承認したことなどは其に對する一證左となすべきものである。

リカアドオの思想を窺ふ爲めには前記の著書の外に其書簡集

Letters T. R. Malthus. Edited by J. Bonar, 1887. ——Letters to J. R. McCulloch. Edited by J. H. Hollander, 1895.——Letters to Hutches Trower and Others. Edited by Bonar and Hollander, 1899.

及び、最近に至つて其原稿の發見上梓せられた「マルサス批評」

Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" by D. Ricardo. Edited with an Introduction and Notes by J. H. Hollander and T. E. Gregory, 1928.

がある。

リカアドオの祖述者といふべきはジエエムス・ミル、マッカロック（McCulloch）ド・クインシイ（De Quincey）である。トルレンス大佐（Colonel Torrens）も彼れと意見を同じうする所



が多かつた。シイニオア（William Nassau Senior）に至つては、その經濟學を純演譯的方法に依つて打ち立てんとすることは寧ろリカアドオに越え、且つ其と共に獨創と見るべき新學說をも唱へ出した。利潤は、欲望の滿足を延期するといふ犧牲に對する報酬たること賃銀の勞働に於けるが如きものだといふ、利子制欲說（Abstinence Theory）は此人の名に由つて記憶せらるゝものである（An Outline of the Science of Political Economy, 1836）。但し此說も或意味に於てリカアドオ學說の發展と解し得ることは後述（次章第十八節參看）の如くである。更に次節に論ずべきジョン・スチユアアト・ミルはリカアドオ經濟學を祖述して、之を其發展の極點に達せしめると共に種々の意味に於ける轉向の避け難き必要事なることを躬を以て示した思想家であつた。

併しスチアユアアト・ミルを論ずるに先だつて、吾々はマルサス、リカアドオの悲觀的自由主義に對し、社會的利害の調和を確信する見地から唱へられた樂觀主義的反對論を見なければならぬ。玆に主として問題となるのはケリイ（Henry Charles Carey）、バスチヤア（Frédéric Bastiat）の意見である。

マルサスの人口論及びリカアドオの地代論並に反對するケリイ（一七九三―一八七九年）が土地廣く、人口寡く、天然の資源殆ど無際限の觀ある北米合衆國に出たことは決して偶然でない。彼れの社會學說が完全なる調和の信仰に基づく學說であることは彼れが其主要著作（Principles of Social Science, 1858-59）に「世界は一個の調和ある全一體にして神は其靈である。神は最高の調和であり、凡ての靈に一個特有の內的調和を其畫像として刻印した」といふケプレルの語を揭記したことに由つて見ることが出來る。

「ケリイは富と價値とを對立せしめる。富は人間の自然に對する力、價値は之に反し、必要物の獲得上に於て「打ち克たるべき抗抵の尺度」、卽ち「人間に對する自然の力の尺度」である。」而して人間の自然に對する力は、技術の發達と共に不斷に增進し、自然の抵抗力は益々減退する。ケリイは土地を生產要具中にあつて特殊の位置を占めるものとは見て居らぬ。土地も占有、開墾、灌漑等人力によつて始めて生產力あるものとなるのであるから、爾餘一切のものと同じく人造の道具であり、資本である。從つて地代も亦た一個の資本所得であり、土地生產物も亦た價値遞減といふ一般法則に從ふものである。リカアドオは人口增加に連れて耕作は豐度劣れる土地に及び、獨り地主階級のみが是に由つて利益すると說いたのであるが、ケリイは是



に反對し、耕作は先づ豐度劣れるも丘腹にあり、乾燥して耕し易き土地を以て始まり、人口增加を俟つて始めて肥沃なる溪谷の地に及ぶこと、宛も人類が漸次複雜精巧なる機械を使用するに至るのに等しいものである。「若し耕作が肥地に始まらないで、反對に常に瘠地に始まり、而して此よりして常に優良地に移つて、勞働收益は絕えず增進するものとする時は、此命題（人口の增加と共に地主獨り利益すとの命題）の正反對が眞理である」、從つて勞働者の分前は絕對的にも相對的にも益々增加し、資本家の所得も絕對的には增加して社會諸階級の完全なる利害が實現せられると謂つて居る。人口原則に就いては、彼れは先づア・プリオリに人間に自然征服の能力を賦與した神が人間を自然の奴隸たらしむべき筈なきを確信し、又人口が衆ければ生產者が衆いのであるから人間の數の增加は富の增加を意味するといひ、增殖するものは人間のみでなくて、人間の食物たるべき下等動物亦然りといひ、人間精神力の發達と共に生殖力は減退するといつて樂觀したのである。

ケリイの思想を最も高く評價するものは蓋し數學家、物理學者、哲學者、經濟學者たる獨逸人デユウリンク（Eugen Dühring, Careys Umwälzung der Sozialwissenschaft und Volkswirtschaftslehre. 1866）であり、或意味に於て今日此を繼承するものはオツペンハイマア（Franz

Oppenheimer）である。

極度の樂觀的自由主義者バスチャア（一八〇一—一八五〇年）が佛蘭西に出たことも遇然ではない。蓋し佛蘭西には一方フイジオクラアト以來の自然秩序に對する信賴の傳統があり、他面此國に於ける社會主義學說の發達が、反動としての此の樂觀思想を生んだとも見ることが出來るからである。彼れが其能文能辯を以て力說主張する所は、其主要著作の標題にも見えてゐる「經濟的調和」（Les harmonies économiques, 1850）であり、彼れも同じくリカアドオに反對して地代の不勞所得なることを否認して、之を資本及び勞働投下に對する報酬と解した。バスチャアは到底深き理論家を以ては許し難く、又屢〻此に加へられたケリー剽竊の譏も必しも寃罪と謂ひ難きものであつたが、彼れの一方に保護貿易論者、他方に社會主義者を敵として爭つた其氣力と文章とは自由主義の世論を喚起することが決して尠少でなかつた。プリンス・スミス（J. Prince-Smith）其他獨逸の自由貿易論者は皆なバスチャアの影響の下にある人々であつた。

英吉利に於ては、コブデン（R. Cobden）ブライト（J. Bright）の率ゐる穀物法反對同盟（一八三九年設立）の運動其效を奏して、一八四六年に穀物關稅は撤廢されることになつた。コブデンの自由貿易論はスミス、リカアドオの精神を奉ずるものであつたが、此の所謂マンチエスター派も亦たバスチャアの影響を蒙る所があつた。



## 第四節　ジョン・スチユアアト・ミル（John Stuart Mill）

正統學派の隆昌と完結と行詰まりとを躬を以て示すものは、ジョン・スチユアアト・ミル（一八〇六—一八七三年）である。彼れの大著「經濟學原理」Principles of Political Economy. With Some of Their Applications to Social Philosophy. 1st. ed. 1848, 7th. ed. 1870.は、當時の英國經濟學の最高の產物であつた。著者は此書に於て其視界を廣汎にして、一般原理と其適用との關係を忘れざることに於てはアダム・スミス、而して經濟學の抽象的理論を說明することに於てはリカアドオたらんことを期したものであつたが、而かも一方、ミルは既にリカアドオ經濟學の限界に着目したのである。

ミルの父ジエエムス・ミルがベンサムの高弟にしてリカアドオの親友であつたことは、前節に述べた。父はミルに對して、之を謂はゞ第一等の思考機械たらしめんとするのであるかの如

き、峻嚴極まる理智教育法を試みた。此事は、後者の自叙傳に詳である。父ミルは毎日其散歩の途上、其子に向つてリカアドオに基づく經濟學の一節を語り聽かせて翌日其報告を書かしめ、不滿足なる時は幾度でも書き改めさせた。斯くして成つた小ミルの報告書が父が「經濟學要論」(Elements of Political Economy, 1821) を書く爲めの手控となつたのである。これが實に小ミルの十三歳の時の事である。次に父は子にリカアドオ其者を讀ましめ、日々報告を書かしめ、又此に基づいて附帶問題を論ぜしめた。最も複雜な貨幣問題に就いては、リカアドオの地金論爭中に書いた小冊子と此に次いでアダム・スミスを讀ましめ、又少し遲れて「經濟學要論」が脱稿した時には、毎小節の要旨を摘錄せしめた。斯の如くして極度の訓練を加へられた早熟の少年が、年十九にして早くも「エストミンスタア評論」に通貨論貿易政策論を寄稿する一個の經濟學者になつたのは、必しも異しむに足らぬかも知れぬ。

リカアドオと共にミルの思想の根柢を定めたものは、同じく父ミルと親交のあつたベンサムである。彼れは或機會に自分はベンサム主義の中に育てられ、且つ殆ど其中に生れたと言つても好い程だと言つたことがある。彼れがベンサムの立法論 (Traité de législation civile et pénale. Edited by E. Dumont. 1802, 2nd ed. 1820) を讀んだのは其の十五六の時の事である





が彼れは其自叙傳に此書を讀んだ事が「我が生涯の一紀元であり、我が心意の歴史に於ける轉回點の一であつた」と記して居る。又曰く「ベンサムがそれを解したる如くに解せられた『功利の主義』は……予の諸物の概念に統一を與へた。予は今や意見を有するに至つた。一個の信條、一個の學說、一個の哲學、其語の最も良き意味の一に於ける一個の宗教を有するに至つた」と。ベンサムを奉じて、後に哲學的急進主義者 (Philosophic radicals) と稱せられた一團の青年に就いてミルの記する所によれば、「彼等の思考法は……ベンサムの見地を近世經濟學の其と、及びハアトリイの形而上學と結合することを特徴とした。マルサスの人口原理も特にベンサムに屬する何れの意見とも同樣に吾々の間に於ける旗幟であり結合であつた」のである。

玆までのミルの思想發展は、正しくジエエムス・ミルの希望通りのものであつた。而して經濟學理論、又は經濟學の「抽象的且つ純科學的要素」、卽ち自由競爭を條件とする分配及び交換學說に於ては、ミルは其父より繼承せるリカアドオ・マルサスの經濟學を終生棄てなかつた。主として經濟學原理の始めの三篇(生産論、分配論、交換論)に說かれてゐるものがそれである。彼れは經濟學の此部分は旣に完成せるものとして、これに疑問を懷いてゐなかつた。現に彼れは第三篇價値論の始めに、「幸にして價値の法則には現在及び將來の學者が闡明すべき問題

が一も殘つて居らぬ。此問題の理論は完全である」と言つたのである。然るに、ミルは其父よりも遙に廣き視野と鋭敏なる感受性とを持つてゐたから、其以後に於て猶ほ幾多の方面から新しい影響を豪ることを拒否しなかつた。そこで彼れは絶えず其の上述の既得のものと新なる眞理とを聯絡する「橋梁を架し、通路を拓」かなければならなかつた。これが彼れの生涯の事業であり、又此故に、彼れは一方に於ては正統派經濟學の完成を代表する學者たると共に他の一方に於て過渡期の思想家たるものと見られるのである。ベンサム、リカアドオ以後に彼れに重要の影響を與へた者としては、アッシュレェに從つて特に三人の名を擧げることが出來る。コォリッジ（S. T. Coleridge）コント（Auguste Comte）及び後にミルと結婚したテェラア夫人（Mrs. Taylor）がそれである。

コォリッジをミルは十八世紀の哲學及び其成果たるベンサム主義に對する反動を代表するものと解し、而して此反動の大なる程度に於て正當なることを承認して、此兩主義の相補ふものなることを明にしようと試みた（Articles on Bentham and on Coleridge, in London and Westminster Review 1838, 1840）。ミルがコォリッジに由つて覺り得たものは、政治に於ける歴史的觀察と自由放任主義の不十分なることであつた。自由放任學說に就いては、ミルはそ



れは近世歐羅巴諸國政府の利己心と無能との爲めに生じたもので、一般的理論としては、一半は眞理、一半は誤謬」であることを認めるやうになつた。

コントの大著「實證哲學講義」（Cours de philosophie positive）六卷は、一八三〇—四二年に出た。ミル自身のコントに告げた所に由れば、彼れは一八四一年の頃既にコントの「講義」を反覆熟讀して、其中に會心のものを發見し、第二義的問題の中に猶ほ意見の合致せぬものがあるけれども、「此相違は恐らく何時か消滅するであらう」と言つて居るのである（L. Lévy-Bruhl, Letters Inédites de J. S. Mill à A. Comte. Paris, 1896）。其大著「論理學」（System of Logic, 1842）の中にも、ミルはコントを「科學的方法一般に對する最大の現存權威者」と稱して居る。さてコントは誰も知る如く、人間の社會生活全般を包括する「社會學」を樹立せんとし、而して此社會學の方法として實證的方法、即ち觀察、實驗及び此較の方法を主張するものである。而して此社會學を彼れは「社會存在の條件の根本的研究」と「其の連續運動の法則の研究」とに分つた。即ち社會靜學と社會動學とである。當時の經濟學に對しては、コントは其方法の實證的ならざることを非とし殊にその經濟現象を他の社會生活の諸方面と引離して考察することを難じた。社會生活の一方面は、他の諸方面を考察することに依つて始めて適當

に説明せらるゝものであるから、「社會の經濟的、産業的分析は、一切の智的道德的及び政治的分析を除外しては、實證的に爲し遂げ得られざることが確實である」と言つた。

ミルがコントに得たものは、方法論の上に於ては、所謂「逆演繹」(inverse deduction)である。ミルは始めその經濟學上の處女著作たる「經濟學上の未決定諸問題」

Essays on Some Unsettled Question of Political Economy, 1831.

に於ては、演繹法が經濟學に適當なる唯一の方法なることを極論したのであるが、コントの觀察研究方法を知るに及んで、主として歷史及び統計の復雜せる主題に適用すべき方法として逆演繹なるものを說くやうになつた。逆演繹は歷史的方法であつて、逆演繹と通常演繹との殊なるところは、「一般的推論に由つて結論に到達し、特殊の經驗に由つて之を證明する（有形科學の演繹的部門に於ける自然的順序の然るが如く）代りに、それは特殊經驗の對照によつて其概括を取得し、それが果して既知の一般的原理から生ずるが如きものであるか否かを確めることに依つて之を證明する」點にあるのである。同時にミルは、英吉利經濟學者が人間の有ゆる時有ゆる場所に於て常に自利心に促され、最少費用の本則に從つて行動するものとするの想定に不滿を感じた。斯の如き想定は僅に英米二國に就いてのみ當つてゐるに過ぎぬ。「英吉利經濟學



は、人が其帳場に於て品物販賣の業務を營む上に於て、其金錢的利得よりも其安樂又は其虛榮心を重ずることがあり得ることを殆ど學んでゐないのである」と。此事をミルは更に其「經濟學原理」中の「競爭と慣習」の章に論じて居る。競爭は啻に近世の現象なるのみならず、現今に就ても猶ほ其影響は屢々想像せらるゝ程絕對的のものではない。「……一般に經濟學者、就中第一に英吉利經濟學者は是等作用者の第一のもの（競爭）に殆ど一に重きを置き、競爭の結果を誇張し、他の之と衝突する原理をば殆ど無視するのが常になつてゐる」といふのである。

斯く從來の方法の缺陷を指摘するものゝ、ミルは價値分配論の研究卽ち經濟學の「純科學的部分」に於ては、自由競爭を想定しての演繹方法が已む可からざるものなることを承認した。從來經濟學者の所爲も「經濟學が一個の科學たる性質を主張し得るは僅に競爭の原理を通じてのみであることを思へば、一部分は理解し得ることである。地代、利潤、賃銀、價格が競爭に依つて定められる限りは、之に對して法則を定めることが出來る。競爭が是等のものゝ唯一の規制者たることを假定すれば、其に由つて是等のものが左右せらるゝ大體の原理と科學的明確とが定められる。經濟學者が之を其職務としたのは至當である。而して一個の抽象的假說的科學としては、經濟學に此以上の事を要求することは出來ぬ。」

ミルは斯く一方リカアドオ・シイニオアの經濟學理論及び研究方法を承認し、而して他方幾多の點に於て是と相容れぬコントの思想に影響を受けた。そこで經濟學原理に於て彼れの試みたのは、リカアドオ經濟學をコントに由つて知り得た社會學の枠にはめることであつた。是が卽ち彼れの大著に「經濟學原理、並に其の社會哲學への適用の若干」の標題ある所以である。而して斯く經驗學を其自體に於て獨立せるものとして取扱はないで、之をより大なる全體の一斷片として取扱つたことが、本書の成功せる所以であつたとミル自身は認めて居る。

ミルは其「原理」に從來の經濟學書と調子を殊にする所があることを以て自任した。其特徴は富の生產の法則と分配方法の法則との間に「適當の」區別を設けた點にある。前者は客體の性質に由つて定まる自然の法則、後者は人間の意志に由つて時の社會の法律及び慣習の如何に由つて左右せらるゝものである。而してミル自身の言ふ所に由れば(自叙傳)、彼の「原理」に此の特徴あるに至つたのは主として之をテエラア夫人の影響に負ふものである。彼れは曰く「普通の經濟學者等は、經濟法則なる名稱の下に之を(生產法則と分配法則とを)混同し、之を人間の努力に依つて破毀し若しくは變更すること能はざるものと思惟して、吾人の現世生活の變更すべからざる諸條件に由つて左右せらるゝ事物と、特定社會的裝置の必然的歸結に過ぎ



ずして、單に是と共存するものに外ならぬ事物とに同一の必然性を認めるのである。一定の制度と慣習との與へられたところでは賃銀利潤及び地代は、一定の原因に由つて決定せられるであらう。併し乍ら、此種類の經濟學者等は此の不可缺前提を捨てゝ、此等の原因は、人力の如何ともすべからざる一個の內在的必然性に由つて生產物の分割上に於て勞働者、資本家及び地主に歸する所の分前を決定しなくてはならぬと論ずるのである。「經濟學原理」は彼等が前提する條件の下に於て此等の原因の作用を科學的に評定せんことを期する點に於ては、其先人の何人にも遜らなかつた。併し此書は此等諸條件を最終的のものとして取扱はぬ範を示したのである。自然の必然性に基づかず、社會の現存裝置と結付ける必然に基づく經濟的概括を、本書は單に假のもの、社會改良の進步に依つて大に變更せらるゝを免れぬものとして取扱ふのである。予は此の事物の見解をサン・シモン主義者の思辨に依つて予の內に喚び醒まされた思想から既に一部分學んではゐたが、それが此書に充滿し、之を活氣付ける活きた原理にせられたのは、予の妻の激勵によるものである」と。

ミルは斯の如く分配法則及び其基礎を成す現行の財產私有及び自由競爭の制度を單に一時的のものと解したのであるが、此等制度の將來如何の問題に就いてば、ミルの思想は長途の變遷

過程を閲みしてゐる。社會組織改善の可能性に就いては、ミルの當初期の思想は彼れの所謂「舊派經濟學者」の其と殆ど軒輊する所がなかつた。彼れも始めは私有財産と相續とを以て「立法の最終語」となし、此制度から生ずる不公平は長子相續と相續限定の廢止及び教育の普及に俟つ任意的人口制限の外に其匡正の途なしと信じてゐた。即ち「一個の民主々義者ではあつたが、毫も社會主義者ではなかつた」のである。然るに、始め主としてサン・シモン主義者、次いでテエラア夫人の影響に依つて、後年彼れ自身已れの社會主義者なる概稱の下に編入せらるゝを至當とするやうになつた。而して此傾向は「經濟學原理」が版を重ねるに從つて顯れて來た。乃ち自叙傳に曰く「一方吾々は、大多數の社會主義體系に包藏せられると認められてゐる、個人に對する社會の壓制を極力非難しながら、吾々は猶且つ社會が最早怠惰者と勤勉者とに分岐せず、働かざるものは食ふ可からずといふ規則が、單に貧民のみならず、公平に凡ての者に適用せられ、勞働生産物の分配が、今日爾かく甚しく然るが如く、出生といふ偶然事に依つては決せられずして、承認せられたる正義の原則に基づく合意に依て行はれ、又人類が已れ獨り專らにせずしてその屬する社會と共に分つべき利益の獲得の爲め奮勵努力することが最早不可能でないか、若しくは不可能と思惟せられない時の到來すべきことを待望した。將來の社



會問題は、個人行動の最大自由と、土地原産物の共同所有及び結合勞働の利益に對する一切人の均等參加とを如何にして合一するかに存するといふことを吾々は認めた」と。

但し斯く社會主義者の說に同感の意を表しながら、ミルは猶ほ重要の一點に於て社會主義者と意見を殊にした。それは彼れが依然として自由競爭の良效果を確信して疑はなかつたことである。「……予は社會主義者の所志の此の實行的部分に於ては彼等に同意し同情しながら、彼等の敎義の最も顯著にして力强き部分、即ち競爭に對する彼等の反對演說に全然不同意である。」彼等は競爭の行はれぬところには獨占があることを忘却して居る。而して獨占は、其の何れの形態に於けるものも、「よし掠奪ならぬ迄も、懶惰を扶持せんが爲めの勤勉者に對する課稅である。」故に幾多の重要な例外を認めながらもミルは自由放任を本則と認め、「其に背離することは、何等かの大なる利益の之を求めるにあらざる限り、確實なる害惡である」とした。ミルの念頭にあるものは協同組合による社會主義であつた。殊に彼れが望みを囑したのは勞働者生産組合であつた。

自由競爭の利益を說くところで、ミルは勞働者が過剩なるにあらざる限り、競爭は賃銀下落の原因たるものではないが、「一方若しも勞働者の供給が過大なる時は、社會主義と雖も彼等の

報酬の低くなることを能く妨げぬ」と言つて居る。此主張は賃銀基金説に基づくものである。一方には勞働者人口、他方には流動資本中の賃銀支拂の用に充てらるゝ基金額は、勞働者の賃銀は此兩者の比例に由つて定まるものであるから、賃銀を騰貴せしむるには前者の增加を抑制するか、後者を增加せしめるより外はないといふのが此説の要領である。此説は主にミルの名に由つて記憶せられてゐるが、素とスミス、マルサス、リカアドオ、シイニオア等の學説を擴充したに過ぎぬもので、決して獨特の新説と目すべきものではない。此説はソオントンの「勞働論」(W. Th. Thornton, On Labour, 1868) に於ける批評に鑑み公けに撤回せられたが（一八六九年）、其後に出た「經濟學原理」の最終版（一八七一年）は、此點では訂正せられずに了つた。

ミルの祖述者と見るべきものはケアンス (J. E. Cairnes, Some Leading Principles of Political Economy newly explained, 1872)、フォオセット(Henry Fawcett, Manual of Political Economy. 1863) 等である。前者はミルによつて放棄せられた賃銀基金説の救濟を試みた。

一面正統派經濟學の完成者にして同時に他面此より脱却せんとする過渡期思想家たるミルの立場は實に上述の如きものである。而して正統學派の發展は茲に一段落に達したと見るべきもの

# リカアドオの價値論

## 一

Adam Smith は時々現實の需要供給に由りて騰落する貨物の市場價格の外に、その自然價格なるものを覓め、市場價格は或は自然價格以上に昇り、或は其以下に降ることがあるけれども、長時間に亘つて見るときは、前者は必ず後者に歸着せんとするものであることを說き、而して此自然價格は、一貨物の生產販賣に參加せる土地、勞働及び資本に對する、自然率の地代、賃銀及び利潤を以て構成せらるゝものであると謂つた。「自然價格の何を以て構成せらるゝかに就ては、Ricardo は Smith と所見を異にしたけれども、市場價格は自然價格の支配を受け、究竟此に歸着せんとするの約束あるものなることは、彼れの同じく認めるところである。而して彼れは貨物の交換價値とはその自然價格の義に外ならざる事を明言した (Principles, Ch. IV. 拙譯「經濟學及課稅之原理」(岩波文庫) 第六九—七三頁)。卽ち Ricardo は其價値論に由て、貨



物の價格は究竟何に由て支配せらるゝかの理法を明にせんと志したるものである。

市場價格の背後に自然價格なるものありて、之を支配すとの說は、Smith の創唱に係るものではない。凡そ一貨物がその品質、又はその生產に要する費用に變動なきに拘らず、需要供給と概稱せらるゝ諸般の事情の爲めに、市場に於ける其の價格の絕えず騰落を免れざる事實は、恐らく容易に人をして、此の外部の事情に由て定めらるゝ、謂はゞ可變的偶然的なる價格の外、別に物に固有の不變的、必然的なる價値又は價格ありて、之と相對することを想はしめるものであらう。Smith に於ける市場價格と自然價格との對立は、Smith 以前の經濟論には、或は同じく自然價格と市場價格、或は內在價値 (intrinsic value) と外附價値(extrinsic value)との對立として現はれて居る。今 Ricardo の價値論を論ずるに方つて、先づこの自然價格と市場價格、又は內在價値と外附價値との關係に關する思想の沿革を知ることは無用ではあるまい。

先づ擧ぐべきは William Petty の說であらう。Petty は等量勞働の生產物は相互に等價なりとなし、その一を以て他の自然的價格となすものである。彼れは其著 A Treatise of Taxes and Contributions, 1662 の中に、地代の性質を說明して、一定面積耕地の收穫より耕作費を控除せる餘剩は、其土地に對する其年の自然的地代若しくは眞實地代を構成することを謂へる後、

此の自然的地代は果して貨幣幾許に相當するかの問を起し、之に答へて、別に一人ありて、耕作に費すと同一時間を費して銀の採堀、精錬、運搬に從事し、斯くして擧げ得たる銀產額より一切の費用を控除せる殘額が是であると謂つた。「一方の者の銀と他方の者の穀物とは、之を同價と評定せざるべからず。假に一方は二十ヱ、他方は二十ブッシェルなりとせば、當然此穀物一ブッシェルの價格は銀一ヱの價格たるべし」(The Economic Writings of Sir W. Petty, edited by C. H. Hull, 1899 p. 43)。「人若し一ブッシェルの穀物を作ると同時間內に、銀一ヱを秘露國の地中より倫敦に輸致することを得ば、一は他の自然價格(natural price)なり。然るに今採堀一層容易なる新鑛の爲めに、能く從來一ヱを得るに要したると同一の勞を以て銀二ヱを得とせば、穀物は、他の事情にして變らざる限り、前に一ブッシェル五志なりしもの十志たるを相當とすべし」(pp. 50-51)。卽ち貨物の價値はその生產に要する勞働量の增減と共に昇降する、「穀物は、一人が十人分の穀物を生產するとき、その僅かに六人分を生產するに過ぎざるときよりも低廉なり」(p. 90)といふのである。

然れども玆に Petty が論ずるところは、貨物の自然價格であつて、彼れは現實の貨物交換比率が必しも常に必要勞働量のみの定むるところにあらずして、投下勞働量は更に他の複雜な



る事情を俟て決せらるゝ實際價格の基礎たるに過ぎざることを認めて居る。故に彼れは前記自然地代が貨幣幾許に相當すべきかを說明した後、是を以て「價値の平均並に權衡の基礎」なりとし、「此上に築かるゝ上部結構と實際とには、猶ほ多くの變化と錯綜とあることを告白す」と記して居る(p. 44)。彼は又自然的廉不廉(natural dearness and cheapness)なるものを擧げて政治的低廉(political cheapness)なるものと相對峙せしめた。自然的價格の實現を妨げて、政治的價格(現實價格)を決定する諸原因としては、Petty は或は生產者又は企業家の全出費の、價格に由て補償せられざる可からざること、土地產物の價格の生產地附近に居住する消費者數に由り國民の民事的、自然的、宗教的意見(civil, natural and religious opinions)に由り、その生活の華美なると質素なるとに由りて影響せらるゝこと、又或は貨物に代用物あると否と、新奇の風、長上の好む所に倣ふこと等の物の價格を增減することあるを擧げた(R. Zuckerkandl, Zur Theorie des Preises, 1889 S. 231)。Petty はまた別に寶石の値を論じて、その廉不廉を決するものに、寶石自身に存する內在的(intrinsec)原因と外附的(extrinsec)又は偶生的(contingent)原因とあることを述べた。彼れが內在的原因として數へるところは、重量、大小、色澤、瑕疵の有無、及び細工の五にして、偶生的原因としては、(一)原產地に於ける購買の禁

止、(二)印度に於ける商人が其資金を金剛石以外の商品に投下することを利となし、從つて之を輸入せざる場合、(三)戰亂の破裂を恐れてその買占めらるゝ場合、及び(四)盛裝して列席するもの多き大貴族の結婚式近ける場合に、その高價となることを擧げた(The Dialogue of Diamonds, The Economic Writing pp. 625-6)。玆に彼れが價値決定の內在的原因として擧ぐるところは、直ちに投下勞働量の多少に歸すべきものなりや否や明かでないけれども、貨物の實際交換比率が、投下せられたる比較的勞働量と比例することは、その所謂偶發的原因の爲めに妨げらるゝものなることは明白である。而して此に Petty が偶發的原因として擧ぐるところは、何れも市場に於ける需要供給の動搖を來たさしむる原因であるから、彼れの意は、貨物には市場に於ける時々現實の價格の外に、是等一時的偶然的動搖に左右せられざる必然永續的の價格あるものとなし、その決定原因を生產に要する相對的勞働量に求めたるものと解すべきであらう。(vgl. Zuckerkandl, S. 231-2—H. R. Sewall, The Theory of Value before A. Smith, 1901-W. Liebknecht, Geschichte der Werthcorie in England, 1902, S. 3-5)

時々の市場價格の外に必然的、標準的價格があつて、之を支配するといふ思想は、Richard Cantillon の內在價値(valeur intrinsèque)の說にも明かに現はれてゐる。是より先き、內在價





値外附價値なる語は、素と敎會法學者及び民法學者が貨幣の品質量目を bonitas intrinseca その稱價を bonitas extrinseca と稱したるを繼承したるものであつて、A Discourse of Coin and Coinage, 1623 pub. in 1655 の著者、Rice Vaughan も、凡そ貨幣の素材に基づく普遍的價値及びその地方的法定價値なる意義に此二語を用ゐてゐたが、漸くにして intrinsic value 又は natural intrinsic value は、物の欲望を滿たす力、又は固有の質の意義に用ゐられて、その交換力たる extrinsic value と相對せしめらるゝに至つた。卽ち Locke は物の內在的自然的價値は、その人生の必要を滿たし、又は便益に貢獻するの適否に由て定まるものとなし、「貨物の販賣(市場)價格(marketable value)の變動は……何等貨物の內在價値又は性質の變更にはあらずして、其貨物の他物に對する或比例の變更なり」と謂ひ、又例へば An Essay on Money, Bullion and Foreign Exchange, London 1718 の匿名著者の如きも「それ自體最も有用愉快の性質を具備するものは、最大の內在價値を有す。土地、水、光線は世の最も普通のものなりと雖ども、最大の內在價値を有するものなり」と記して居る(Zuckerkandl, S. 13-15, Sewall, P. 51. Liebknecht, S. 3)。然るに Cantillon に至つて此內在價値なる語は、Smith に於ける自然價格の如く、市場價格の變動の中心、又はその究竟の支配者の意義に用ゐらるゝに至つ

た。彼れはその Essai sur la Nature du Commerce en Général,1755. Reprinted for Harvard University, Boston, 1892 中に於て、物の生産に投ぜらるゝ土地生産物の量並びに勞働の量及び質がその價格を構成するの理を種々の例證を以て說明した後、之を概括して曰く「是等の歸納と例證とに由り、一物の內在價格又は內在價値（le prix et valeur intrinsèque）はその生産に入る土地及び勞働の量の尺度たること（土地の豐度及び生産物量並に勞働の性質を酌酌するものとして）了解せられたるべしと信ず」と。此の內在價格又は內在價値は、必しも常に市場に於ける現實の價格となつて現はるゝものでなくて、後者は前者の或は以上或は以下に離るゝことあるものではあるけれども Cantillon の見るところに從へば、正常なる狀態の下に於ては、二者は相一致せんとするものである。而して一物の市場に於ける現實の價格をして、內在價値の上下に逸脫せしむる原因は通常需要供給の名の下に概括せらるゝ諸原因である。乃ち曰く「現に此の內在價値を有する幾多の物は、屢々市場に於て此價値に從つて賣れぬことがある。これ人の趣味、氣分及びその行ふべき消費に由つて然るものである。」例へば一大貴族が、其庭苑に渠を通じ臺を築く爲めに巨額の費用を投じたりとせば、其內在價値は土地と勞働とに比例すべしと雖も、其の實際の價格は必ずしも常に此比例に從ふものではない。是を賣却するに當つ



ては、或は其の費やしたるところの半ばを償ふ能はざる事あるべく、又之を買はんと欲するものが多ければ、內在價値の倍額をも收むることあらう。又一國農產物の收穫が年々の消費必要量以上に上るときは農產物「過剩にして買手以上の賣手あるを以て市場に於ける小麥の價格は必然內在價値又は價格以下に降るべく、反對に農民が消費の必要量以下の小麥を作るときは、買手は賣手より多かるべく、市場に於ける小麥の價格は內在價値以上に騰貴するであらう。」「物の內在價値には決して變動あることがない。然れども、一國に於て商品及び食物の生產をその消費に比例せしむることの不可能は、市場價格の日々の變動、不斷の騰落を惹起する。然りと雖も秩序宜しきを得たる社會に於ては、消費の充分不變均等なる食物及び商品の市價は、甚しくその內在價値より遠ざかることがない」と（pp. 33-39）。而して貴金屬の價値も亦同一の理に由て支配せらるゝ事を說いては「金屬の眞實內在の價値は凡ての物のそれと同じく、その生產に必要なる土地と勞働とに比例する」と謂つたのである（p. 127）。

Cantillon は此處に步を止めずして、更に Petty も嘗て試みたる如く、幾許の土地は幾許の勞働と等價なるかを決定せんとする。曰く、「土地は一切の食物及び商品の素材、勞働はその形式である。而して勞働するものは、必然土地生產物に依て生活せざる可からざるを以て、勞働の

價値と、土地生産物の價値との關係は之を發見し得るものゝ如くである」と。乃ち彼れは先づ最卑賤なる奴隷の勞働を以て論を起して、此種の成人奴隷一人の勞働は、該奴隷自身並に二人の小兒を勞働年齢に到達する迄養ふ爲めに、其所有者が充用せざる可からざる土地量の價値と一致すると謂ひ(p. 42)、次で各種各階級の勞働者の必要及び習性を論じたる後、是等の歸納に由りて「人は日傭勞働者の勞働の價値は、土地生産物と關係あること、及び一物の内在價値は、その生産に充當せらるゝ土地量と生産に入る勞働量、卽ち又更にその生産物が其處に勞働せる者に歸せらるゝところの土地量とに由て測定し得るものなることを認む」と記して居る(p. 53)。卽ち彼れは土地生産物の價値と土地其物の價値とを同一視して、最下級勞働者の勞働の價値は、該勞働者と其家族とを養ふに足る土地量の價値に等しと論結するものである。

Cantillon と、又從て William Petty とも通ずるところ多きは William Harris が An Essay upon Money and Coins. Part I, 1757 の中に述ぶるところの說である。Harris も亦 Cantillon 等と共に「土地と勞働とは相合して一切の富の源泉たる」事を說き、「土地の力に俟たずんば生活を維持すること能はず、又勞働なくんば甚だ貧寒不快適なる生活のみあるであらう。故に富(wealth or riches) は、或は土地の適宜性か、又は土地と勞働との生産物かを以て成る」と謂



つた (A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts on Money, from the Originals of Vaughan, Cotton, Petty, Lowndes, Newton, Prior, Harris, and Others. Printed for the Political Economy Club, 1856, pp. 347–8)。而して彼れも亦市場に於ける現實の交換比率以外に物の内在價値あることを認め、之れが決定原因を該貨物に費やさるゝ土地及び勞働に求めんとした。而して内在價値なる語が最早 Locke の時代に於けると異なり、物の欲望充足力其者の意義に用ゐられざることは、左の引用に由て之を窺ふことが出來る。曰く、「一般に物はその人間の必要を滿たす上に於ける眞の用に應じては評價せられずして、寧ろ之を生産するに必要なる土地勞働及び熟練に比例して評價せらる」と。而して貨物の内在價値は專ら之に由て決定せられ、而して内在價値は貨物間の交換比率を支配するものなることは、「物又は貨物相互の交換は略ぼ此比例に於てせられ、大多數の物の内在價値が主として評定せらるゝは上記の尺度に由るものなり」と謂ふに徵して知ることが出來る(ibid., p. 350)。斯く Harris は貨物内在價値は生産に要する土地勞働及び熟練に由て決定せらるるとは云ふけれども、就中重きを勞働に置いて居る。卽ち謂へらく、一切物若しくは一切貨物は、土地と勞働との所産なるを以て、貨物の様々なる價値は此二者に依て調節せらる。「然れども大多數の生産に於て、勞働は最も重きを

占むるを以て、勞働の價値は一切貨物の價値を左右する主要標準と見るべきものである。……人々の樣々なる必要と欲望とは、彼等を驅つて、自己所有の貨物を、その換えて得んと欲する物に投ぜられたる勞働と熟練とに比例せる一定率に於て賣ることを餘儀なからしめる。」と(ibid., p. 352)。但し貨物の內在價値はその相互の交換を支配すと云ふも、市場に於ける個々貨物の現實の價格が必しも常にその內在價値と一致するものにあらざることは Harris の明かに認めるところである。乃ち曰く、「特定貨物に對する急速若しくは緩漫なる需要は、その內在價値若しくは原費に何等の變動生ぜざるも、屢々其價格を騰貴若しくは下落せしめるであらう。人は常に他人の嗜好、出來心若しくは必要に應ぜんとして其機を待てるものなるを以てである。又買手の賣手に對する比例若しくは特定物に對する需要のその量に對する關係は、常に市場に於て影響を有するであらう」と(p. 350)。然れども彼れの見るところを以てすれば、貨物の價格は結局その內在價値に一致せんとする傾きを有するものである。而して此兩者を一致せしむる動力は自由競爭である。卽ち人若し市場に順應することを肯んぜざるときは、(投ぜられたる勞働量に比例して交換を行はざるときはの義)彼等の商品は賣れずしてその手中に留まるべく、又最初に、勞働熟練及び一切の危險を考量して、一產業が他のものよりも有利なるとき



きは、其產業に參加するもの增加すべく、その相互の競爭に於て價格を引下げ、遂に其の大なる利潤を他と同一率まで下降せしむるに至るであらう。」勞働の價値を土地に約元せんとしたる Petty 及び Cantillon の嘗試も亦 Harris の倣ひ試みるところであつて、其の到達せる結論はの矣れと其軌を一にし、普通勞働者の勞働を以て普通勞働者を養ふに足る土地量と同價となすものである。曰く、「……勞働者の生活維持の用に充てらるゝ土地量は、彼れの傭賃となり、此傭賃は又再び土地の價値となる。」固より土地一エエカアの一定勞働量に對する比例は、全世界を通じて一ならず、之は啻に土地の肥瘠の同じからざるより生ずるのみならず、又農民の生活狀態の處に由りて異なるより生ずる。蓋し貧民は、その衆多なるよりして土地產物の主なる消費者なるが故に、勞働の低廉なるところ、卽ち勞働者の生活の甚だ貧寒なるところは、土地も亦低廉なるべきを以てである。從て土地の價格は常に勞働の價格に由て影響せられると(p. 358)。

上記諸家の說と多少相觸接するところのあるものは Sir James Steuart が An Inquiry into the Principles of Political Economy, 1767 の諸節に述べる說であらう。彼れに從へば、一貨物の生產費は、その眞價(real value)を決定し、市場に於ける賣價の眞價を超過する部分は利潤を

構成し、而して價格は此眞價以下に降ること能はずと謂ふを以て、Steuart にあつては貨物の生産費はその價格の歸向中心にあらずして其動搖の最低限を定むるものと謂ふべきである。曰く(Bk. II Ch. IV)貨物の價格中には、全く相異なる二物があつて存する。「貨物の眞價 real value 及び賣却に際しての利潤 (profit upon alienation)是れである」と。眞價を構成する要素に二あり、(一)一貨物の生産に費やさるゝ平均勞働量、卽ち Steuart の語を以て云へば、一人が一日一週一月内に該貨物の幾許を造り得るか、(二)勞働者の生活費及びその生産要具を供給する爲めの必要費用(三)原料の價値が是である。「是等三個條を知れば製作物の價格は決定せられる。價格は此等三者の總額以下、卽ち眞價以下なること能はず。是以上のものは悉く製造家の利潤である。是は常に需要に比例し、從て事情に應じて動搖するであらう。」而して生産と需要、卽ち供給せられたる貨物の數量と、需要若しくは欲望せられたる數量とが相均衡するときは、價格は貨物製作の實費に製造家及び商人に對する少許の利潤を加へたるものと適當の比例を保つのである(Bk. II Ch. X)。彼れは別にその貨幣を論ずる章(Bk. III Ch. I) に於て物の價値の由て決定せらるゝ原因を擧げてゐる。(一)評價せらるべきものゝ多少(二)是に對する人間の需要(三)需要者間に於ける競爭(四)需要者の範圍及び能力が是である。然れども玆に謂ふところの價値は、前に所謂貨物の眞價ではなくて寧ろ價格である。而して右記四個の原因に由りて決定せらるゝ價値は決して生産費に由て定められたる物の眞價以下に下降す可からずといふ道理なきを以て、物の眞價はその價格の最低限を決定すといふ說は承認し易からぬものである。彼れの、需要の單一 (simple) と複合 (compound)と、その强弱と大小とを分ち、又單純競爭と複雜競爭とを區別して、其上に立てたる價格理論は「彼れの時代に取りては甚だ進步せる學說である」(Zuckerkandl)けれども今は說かぬ。玆には市場價格の歸向中心としての自然價格に關して Smith 及び Ricardo の學說を論ずるに方り、先づ其萠芽と見るべきものを Smith 以前の文献に溫ね、其大略を記して本論の準備をなさんとするに過ぎないのである。(註)

註。Zuckerkandl (S. II ff.) の記すが如く、Smith 以前の英吉利經濟論に於ては、value, worth, price の語は嚴密に區別せらるる事なく隨意併用せられたやうである。一財の價値 (value) は之と交換せらるゝ他財の數量に現はるゝその購買力を現はし、その價格 (price) は之と交換せらるゝ對價物量を指すことを常としたけれども、此區別も必しも常に嚴守せられなかつたことは、例へば Petty が「Amsterdam に於ける建物の價値(value)は巴里の夫れの半ばなるべし」「佛蘭西より輸出せられたる貨物の價値(value)」「然れども和蘭より英吉利へ輸出せられたるものは三百磅の價値(worth)あり。」(Pol. Arithm.)「然れども次の問題は此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價値(worth)あるか」(Taxes & Contribution) と記し、之と相並んで「貨物の價格」「土地の價格」「穀物の價格」と云ひ、又前記「此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價値あるか」の問に對して「……一方の銀は他方の穀物と同價値 (equal value)と評定せざる可からず……

…故に當然此穀物一ブッシェルの價格(price)は銀一弓なり」「世界は物を金及び銀にて測れども主として後者に由りてする。…而して若し品位量目同一と認められたる銀にして其價格(price)昇降し、又一個所に於て他に於けるよりも價値あり(more worth)…又それに由て評價せられたる(valued)諸物に對する比例に於て相違せんか云々」(Taxes etc.)の句あるを以て知ることが出來る。同樣の混用は Locke に於ても之を見る。即ち「一物の價値(value)を正しく評價せんとするものは、其數量を、その販路に對する比例に於て考察せざる可からず。蓋し價格を左右するものは是事のみなるを以てなり。」「其内在價値(intrinsic worth)に於て考ふれば、銀一弓は常に他の銀一弓と同價値(equal value)なること確實なり…然れどもそは同時に世界の諸處に於て同價値(same value)ならずして、その商業に比して最も貨幣少なき處に於て最も價値(most worth)あり」(Consequence of Lowering of Interest)「一物の價値若しくは價格(value or price)は單にその或他の物に對する關係的のものに過ぎざれば(Of Raising Our Coin)云々等の如くである。

## 二

Adam Smith は價値なる語に特定物の效用、即ち「使用上の價値」と、一物の所有が賦與する他物購買力、即ち「交換上の價値」の二義あることを指摘したけれども、前者に就てはたゞその大小の必しも後者の大小と並行せざる一事を擧ぐるの外全く言ふところがないから、その價値論は交換價値論を以て終始したと謂ふべきものである。交換價値に就て Smith が論ずる



主要問題は二ある。一物に既有の交換價値は果して何の尺度に由つて最もよく測定せらるゝことを得るか、及び、抑も一貨物の他の貨物に對する交換比率は何に由つて決定せらるゝかが是である。彼れは Wealth of Nations 第一篇の「眞實價格と名義價格と」(real and nominal price of commodities)を論ずる章に於て第一の問に答へ「貨物價格の構成諸部分」並に「貨物の自然價格と市場價格と」を論ずる二章に於て專ら第二の問に答へる。

Smith は一貨物の交換價値は、その購買(purchase)若しくは支配(command)し得る勞働量を尺度として之を測定すべしと說くものである。謂へらく、分業一度行はれて自給自足己みたる後の社會に於ては、人の貧富はその他人の勞働を支配し得る程度に由つて岐れる。「故に一貨物の、之を所有し、而して自ら之を使用又は消費するの意なくして、他の貨物と交換せんとするものに取りての價値は、其物が能く彼れをして購買又は支配することを得しむる勞働量に等し。」「凡そ一物の眞實價格、即ち之を獲得せんと欲する人が、眞に爲めに費すところのものは之を獲得する努力煩勞である。凡そ一物の之を獲得し、而して之を或る他の物と換へんと欲するものに取りての眞價値は、彼れが自ら免れて他人に課することを得る努力煩勞である。貨幣又は貨物を以て購はるゝものは、吾人が肉體の努力に依つて獲得するものであると等しく、勞

働に依つて購はる。この貨幣又はこの貨物は、實に吾人をして此努力を免れしめるのである。勞働は一切物に對して支拂はれたる最始の價格、本來の購買貨幣であつた。地上一切の富が最初に購買せられたるは、金銀に依らずして、勞働に依れるものである。而してその之を所有し、且つ之を或る他の新生産物と交換せんと欲するものに取りての價値は、正にそれが能く彼等をして購買又は支配することを得しむる勞働量に等し。」「……勞働は有ゆる貨物の交換價値の眞尺度である」と（Wealth of Nations, edited by Cannan, pp. 32, 33）。

然れども勞働量を測定するに當つては、啻に勞働時間のみならず、併せて勞働の難易、工風を要することの多少等を參酌するの困難があるから、價値の測定は勞働量に由らずして貨幣に由ることを常とする。然れども Smith を以て見れば、貨幣は他の貨物と同じく、其自體の價値に變動あるを以て、價値測定の尺度たるに適せぬものである。勞働自體の價値を不變なりとなすの理由を Smith は一定量勞働の勞働者に感ぜしむる苦痛の常に同一なる一事に求めた。曰く「勞働の同一量は、有ゆる時及び處に於て、勞働者に取りて同價値なりと言ふことが出來よう。その健康、體力、及び元氣の普通狀態に於てし、その熟練及び技巧の普通程度に於てすれば、彼れは常にその安易、その自由及びその幸福の同一部分を拋たねばならぬ。」故に勞働の



報酬として受くる貨物の幾許なるを問はず、彼れが投ぜざる可からざる價格は、常に必ず同一である。その購ひ得る貨物量には增減あるべしと雖も、變動は貨物の價値にあるのであつて、之と交換せらるゝ勞働の價値にはない。勞働のみ遂にそれ自體の價値に變動なきを以て、獨り有ゆる時、有ゆる處に於て一切貨物の價値を測定比較すべき終極眞實の尺度なり。故に勞働は「その眞實價格にして貨幣は單に其名義價格に過ぎず」（p. 35）。「同一の眞實價格は常に同價値なりと雖も、金銀價値變動の爲め、同一の名義價格は往々甚だ價値を異にすることがあるのである」（pp. 35-6）。長年月を取りて見るに、同一稱呼の貨幣に含有せらるゝ金屬量の、時代に由りて同じからず、又金銀一定量の價値其者に變動ある爲め、一定額の貨幣が代表する價値は甚しく異なる事がある。長年月を取りて見れば、勞働者の食物たる穀物の同一量は、金銀の同一量よりも同量の勞働を買ひ得るに近きを以て、長年月間に於ける價値の尺度としては、穀物の方が金銀に優るけれども、またその價値の年々の變動は金銀よりも甚しい。獨り「勞働に依つて、吾人は之を（諸貨物の眞價値を）長年月並に年々最大の精確を以て測定することを得るのである」（pp. 38-9）。

以上叙ぶるが如く、價値の尺度は勞働なりと謂つた Adam Smith の意は、一物の交換價値

は是に由て購買若しくは支配し得る勞働量に依て測定せらるると云ふにある。然らば一物の交換價値、卽ちその一定量の他物の幾許量と交換せらるゝかを決するものは何であるか。これが上記第二の問題である。

一物の價値は、その支配し又は購買する勞働量に由て測定せらるるを說くと相並んで同一章中に、Smithは一物と他物との交換比率は、その生產に費さるゝ勞働量に由て左右せちると云ふが如き口吻を漏して居る。例へば貨物が交換せらるゝ場合「是等のものは勞働の或一定量の價値を含み、吾人は之を其時に於て等しき〔勞働〕量の價値を含めりと見做さるゝものと交換す」(p. 32) と云へるは、同一量勞働の費されたる諸貨物は、相互に等價なりと謂へるものと解するを得べく、又新鑛發見の爲め金銀價値の下落せることを言ふに方つて「是等金屬を鑛山より市場に搬出する爲め費すところの勞働減少するを以て、(as it cost less labour) その市場に搬出せられたる曉に購買又は支配する勞働は減少する」(p. 34) と云つたのは、物の價値はその生產に要する勞働量の增減に由て增減するといふものと解し得るのである。然れども是等の言は恐らく屢々 Smith に免れざる不用意の發言であつて彼れの意が、費されたる勞働を以て、有ゆる場合に物の交換比率を左右する唯一の働因となすに存せぬ事は、彼れが第六章の冒頭先



づ資本の蓄積並に土地の占有未だ行はれざる以前と、その既に行はれたる以後の社會とを分ち、特に前者に於ては生產に要する勞働が交換比率を決定する唯一の事情なることを明記せるに徵して疑なしと信ずる。卽ち曰く、「彼の資本の蓄積と土地の占有とに並びに先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要なる勞働量の比例は、その相互交換の規則たるを得べき唯一の事情なるが如くである。例へば狩獵民族の間に於て、一頭の海狸を殺す爲めには、一頭の鹿を殺す勞働の二倍を要することを常とせば、海狸一頭は當然 (naturally) 鹿二頭と交換せらるべきもの、或は鹿二頭の價値あるべきものである。通常二日又は二時間の勞働の所產たるものは、通常一日又は一時間の勞働の所產たるものゝ二倍の價値あるべきを當然 (natural) とする。」(此場合勞働の難易、特殊の技術熟練を必要とするの程度の參酌せられざる可からざることは Smith 明に之を認む。)「此狀態の下に於ては、勞働の全生產物は勞働者に歸屬し、且つ貨物の獲得若しくは生產に通常投ぜらるゝ勞働量は、その貨物が通常購買し、支配し、若しくは之と交換せらるべき勞働量を左右し得る唯一の事情である」と (pp. 49, 50)。然るに資本の蓄積土地の占有行はれたる後に於ては、啻に生產物の價値の悉く勞働者の手に歸屬せざるに至るのみならず、貨物の價値は復た獨り投ぜられたる勞働のみに依ては決せられぬことになる。謂へ

らく、資本一度蓄積せられ、其所有者之を生産に投ずるときは、生産物の價格の一部は此企業家(undertaker of the work)に對する利潤として與へられねばならぬ。「故に勞働者が原料に附加せる價値は、此場合二個の部分に分たれる。一は勞働者の賃銀支拂に充てられ、一は雇主が原料及び賃銀として前拂ひせる全資本に對する利潤となる」(p. 50)。卽ち「貨物の價格中に於て……利潤は勞働の賃銀と全然異なり、且つ全く別の原則に由りて支配せらるゝ構成部分をなすものである」。既に斯の如くなれば、「勞働の全生産物は必しも常に勞働者に歸屬せず。勞働者は多くの場合、己れを雇傭する資本の所有者と之を分たねばならぬ。通常一貨物の獲得又は生産に投ぜらるゝ勞働量も、亦その通常購買し、支配し、又は之と交換せらるべき勞働量を左右し得る唯一の事情たらず。豫め賃銀を支拂ひ、彼の勞働の原料を供給する資本の利潤として、更に追加量の與へらるゝものがなくてはならぬ」と(p. 51)。更に又土地が私有せらるゝや、勞働者は土地使用の許可を得んが爲に、その勞働が聚集又は生産せるものゝ一部を地主に投棄せねばならぬ。「此部分は、若しくは畢竟之と同一物なる、此部分の價格は地代となり、全貨物大半の價格中に於て第三の構成部分をなすもの」であつて、進歩せる社會に於ては、大多數貨物の價格は多少の程度に於て賃銀(或は謂ふ勞働)利潤地代の三者を以て構成せられる。而して個々



の貨物の價格が、結局賃銀利潤並に地代に分解せらるとせば、是等貨物の全量を以て成る一國年生産の全量、若しくは其價格もまた賃銀利潤若しくは地代として國民の間に分配せらるるであらう。故に「賃銀利潤及び地代は、一切所得並に一切交換價値の本源的源泉である」と(p. 54)。

價格若しくは交換價値の構成要素を明かにしたる後、Smith は貨物の自然價格がその市場價格を左右し、後者は結局前者に歸着せんとするものなることを説明する。一貨物の自然價格とは、價格の三構成要素が、各々その自然率に一致せる場合の價格を謂ふ。而して價格構成要素の自然率とは、その普通率又は平均率の義である。曰く、各社會又は各地方(neighbourhood)には、勞働及び資本の各種用途に於ける賃銀並に利潤の普通率又は平均率なるものがある。……同じく又各社會及び各地方に於ては、地代の普通率若しくは平均率がある。……是等の普通率又は平均率は、之をその通常行はるゝ時及び處に於ける賃銀、利潤及び地代の自然率と稱して好からう」(p. 57)。一貨物の價格が「其を産出し、準備し、且つ市場へ搬出するに投ぜられたる土地の地代、勞働の賃銀、及び資本の利潤を、その自然率に應じて支拂つて正に過不及なきときは、此貨物は此場合その自然價格と稱すべきものを以て賣却せられたのである」(p. 57)。之に

反し、市場に於て或貨物が現實に賣買せらるゝ價格を稱して市場價格と云ふ。市場價格は現に市場に販出せられたる貨物量と有效需要(effectual demand)との關係によりて決せられる。有效需要は絶對的需要ではなくて、敢て貨物の自然價格を支拂ふことを辭せざるものゝ需要の義である。貨物量が有效需要を滿たすに足らざるときは、その市場價格は、その不足の程度、需要者の資力及び奢侈、並に貨物の重要の度に應じて自然價格以上に騰貴し、貨物量が有效需要に超過するときは、その過剰の程度及び賣手に取り速かに過剰物を處分し了するの必要切なると否とに應じて、市場價格は自然價格以下に下降し、貨物量と有效需要と正に相等しきときは、市場價格と一致する。斯の如く一定の時を取て云へば、市場價格は自然價格の上下に逸脱するものであるけれども、長きに亘つて見るときは、自由競爭の妨げらるゝことなき限り、貨物量は有效需要に適合し、從て市場價格は自然價格に一致せんとするの傾向を有する。蓋し一貨物の市場價格がその自然價格の下に在る時は、價格構成要素はその自然率以下に下降せざるを得ぬ。從て勞働、資本又は土地は、その現用途より撤回せられて、貨物の供給を減少せしめ、反對に、一貨物の市場價格が自然價格以上に在るときは、その生産に參加せる勞働、資本及び土地の何れかは、必ずその自然率以上の報酬を受くるを以て、勞働、資本又は土地は、他より吸



引せられ來つてその供給を增加せしめ、何れにしても結局貨物量をして有效需要に一致せしめずんば已まぬからである。故に曰く「自然價格は謂はゞ絶えず一切貨物の價格を吸引する中心價格である」と(p. 60)。是れが Adam Smith の交換價値及び價格論の大要である。

## 三

上記の如く、予が見るところを以てすれば、Adam Smith は購買せられ若しくは支配せらるゝ勞働量を以て、交換價値測定の尺度となし、貨物と貨物との交換比率に至つては、原始野蠻の社會に限つて、貨物の生産又は獲得に費さるゝ勞働量が之を決するけれども、資本既に蓄積せられ、土地既に占有せられたる曉に於ては、之を決定するものは、生産に參加せる勞働、資本及び土地に對する賃銀、利潤並に地代の多少なりとなすものである。但し此解釋に對しては疑を介むの餘地が全くないのではない。疑問は資本の蓄積及び土地の私有既に行はれたる曉、貨物の價値又は價格は、果して賃銀、利潤及び地代の三構成要素に由りて左右せらるゝものなるか、或は價値又は價格は依然として生産上に費されたる勞働量のみの決定するところであつて、たゞその收得が、右の三要素に分配せらるゝに止まるかの點に懸るものである。予の解する

ところを以てすれば、Smith は資本の蓄積及び土地の私有未だ行はれざる以前と、その既に行はれたる以後とに由つて、貨物間の交換比率を左右する原因の同一ならざる事を認めたることは上述の如くであるが、彼れは又之と相容れざる、物の交換價値は投下勞働量のみに由て決定せらるゝけれども、資本の蓄積、土地の占有行はれたる曉に於ては、生産せられたる價値全額は勞働者の手中に歸入せずして、彼は之をば地主、資本家と分つものであるとの思想をも表白せることが一再に止まらないのである。例へば既記の如く、資本家が生産に參加せる曉に於ては「勞働者が原料に附加せる價値は、此場合二個の部分に分たれる。一は勞働者賃銀支拂の用に充てられ、一は雇主が原料及び賃銀として前拂ひせる全資本に對する利潤となる」と云へるが如き、また一旦土地が悉く私有財産となるや「地主も亦凡ての他の者と同じく、蒔かざるところに刈らんと欲し、その自然的生産物に對しても猶且地代を要求する」と(p. 51)云ふが如き、或は「土地が私有財産となるや、地主は勞働者が土地より或は産出し、或は蒐集し得る殆ど一切生産物の配當を要求する。地主の地代は、土地の上に投ぜられたる勞働の生産物に對する第一の控除である。」「……利潤は土地に投ぜられたる勞働の生産物よりの第二の控除である。他の殆ど凡ての勞働の生産物も亦同樣の利潤控除を免れぬ。一切の手工業及び製造業に於て、勞働



者の大部分は豫めその製作の原料と、製作の完成するに至る迄の賃銀と生活資料とを供給する雇主あることを要する。雇主は勞働者の勞働生産物、又は勞働がその加へられたる原料に附加する價値の分配に與かる。彼れの利潤は此配當分を以て成る。」(p. 65) と云へるが如きは是である。

故に例へば Zuckerkandl の如きは、Smith の眞意は交換價値が常に勞働のみに由て造られ、利潤及び地代はその造られたる價値の控除に由て發生するものであつて、是が爲めに物の價値價格は變動することなしと謂ふにありと認めんとするものであるけれども(a. a. O. p. 247—252)既に Adam Smith が特に資本の蓄積土地の占有未だ行はれざる場合を限つて、貨物交換比率の、費されたる勞働のみに由て決せらるゝ事を言ひ (pp. 49, 66)、價値の尺度は一貨物の購買支配する勞働量なる事を明かにしたる後、文明社會に於ては貨物の獲得、生産に費さるゝ勞働は、その購買支配すべき勞働量を左右せざることを明記し、(p. 51)「賃銀利潤の高低は價格高低の原因なる」ことを認むる(p. 147) に徵して、予は Zuckerkandl 等の解釋を容れることが出來ぬ。又物の價値は常にその投下勞働量に由て決せらるゝものであつて、賃銀、利潤及び地代は單に既有の價値を分取するに過ぎぬものなりとせば、Smith は是等價格構成部分の

増減が、決して價格の高低を來す能はざること、並に構成要素の何れかの增加は、必ず殘る要素の減少を來たすべきの理を明かにしなければならぬ。今地代は姑らく措き、賃銀と利潤とに就て云へば、彼れは右記の如く、此の二者の騰落が價格騰落の原因たることを認め、「勞働賃銀の增加は價格中賃銀に歸約せらるゝ部分を增加せしめ、以て必然多くの貨物の價格を騰貴せしむ」(p. 88) と謂ひ、利潤に就ては「事實上高利潤は高賃銀よりも遙かに多く製作物の價格を騰貴せしむるの傾がある」と謂つて居る。蓋し、高率の賃銀は貨物價格の構成分子中賃銀より成る部分を增大せしむることに依りて、それ丈け價格を騰貴せしむるに止まるけれども、利潤率の騰貴は累積的に作用して物價を騰貴せしめる。卽ち利潤率の騰貴は先づそれ丈け價格を高からしめるけれども、斯く高價となれる貨物をば、原料として購入すべき位置にある資本家の投資はそれ丈け膨脹し、而して膨脹せる投資額に對して更に騰貴せる高率の利潤要求せらるゝものとすれば、その物價に及ぼす影響は累積的ならざるを得ぬと謂ふにある。(pp. 99. 100)。

又 Smith に從へば、賃銀騰貴の原因たる國富の增進はまた利潤率減少の原因たるを以て、賃銀の騰貴と利潤の減少とは常に相伴ふと謂ふことである。然れどもこは同一の原因が賃銀を騰貴せしめ、且つ利潤を減少せしむと云ふに止まり、Ricardo に於けるが如く、一定量額中賃銀



の收得すべき部分が增大したる爲め、利潤に歸すべき殘額は減少し、或は利潤に歸すべき部分增大したる爲め賃銀となるべき殘額減少すと謂ふのではない。これは右述の如く Smith が利潤の騰貴が、賃銀の下落の之を償ふ以上に價格を騰貴せしむること、或は賃銀利潤の並に騰貴することあり得べきを認めたること (p. 94) に依て明かであると信ずる。既に「賃銀利潤の高低は價格高低の原因なる」ことを認むる以上、土地資本の私有蓄積行はれたる曉に於て、費されたる勞働量は決して貨物交換比率を左右する唯一の事情にあらざることを認めなくてはならぬ。而して後に記すが如く Ricardo, McCulloch, Torrens 等が Smith を解するところも亦斯の如きものである。

## 四

Adam Smith の學說中人をして其眞意を捕捉するに困しましむるものは、その地代と價格との關係の說明である。既記の如く、彼れは賃銀利潤及び地代を以て價格の構成要素、或は「交換價値の三源泉」となし、是等三要素の自然率は、生產物の自然價格を決定し、貨物の市場價格は究竟その自然價格に歸着せんとするものなることを說いて居る。果して然らば、賃銀利

潤及び地代は、別の原因に由り價格に先だちて決定せらるゝものでなくてはならぬ。賃銀及び利潤に就て Smith が說くところは、大體に於て理解し難くない。獨り地代に就ては、彼れの所說はその價格論と相容れ難き觀があるのである。Smith 謂へらく「土地の使用代價として考へられたる地代は、當然借地人が土地の實狀に於て納付し得る最高の價格である」と。その意は土地の生產收益より資本の維持費、並に其地方に於ける普通利潤を控除せる餘剩を指すに外ならぬ。蓋し借地人若し餘剩の全額を地代として納付せずして、その一部を己れが手中に保留するときは、則ち猶ほ餘力を有するものであるから、之を最高の價格とは云ふことが出來ぬ。又地代がこの餘剩額を超過するときは、借地人は損失を忍んで之を納付するものであるから之を支拂ひ得る價格と謂ふ可からざるを以てである。元來土地生產物は、其普通價格が、投下せられた資本を回收し併せて普通利潤を擧げ得る部分に限つて市場に搬出せられ、而してその價格若し是を行ひてなほ餘あるときは、その餘剩部分は當然地代となり、餘剩なきときは地代は生ぜぬ。而して土地生產物の價格は需要之を決定するといふのであると。果して然らば地代は賃銀利潤と其生產物價格に對する關係を異にするものと謂はなければならぬ。地代も賃銀利潤と共に同じく價格構成部分の一たりと雖も、その趣は同じくない。故に曰く「賃銀及び利潤の高





低は價格高低の原因であつて、地代の高低はその結果である。特定貨物の價格の或は高く或は低きは、これを市場に搬出する爲め支拂ふことを要する賃銀及び利潤の或は高く或は低きが爲めであるけれども、地代の高く低く、或は悉無なるは、貨物の價格の或は高く或は低き爲め、彼の賃銀と利潤とを支拂ふに足る以上大に餘剩あるか、少しく餘剩あるか或は全く餘剩なきかに由るものである」と (pp. 145, 146)。けれども玆に至つて Smith は循環論に陷つたとの譏を免かれ難い。奈何となればその說くところは、地代の有無多少は生產物の價格に由て決せられ、生產物の時々の市場價格は究竟その自然價格の支配するところとなり、一物の自然價格はその構成要素卽ちその生產に參加せる勞働資本及び土地に對する賃銀利潤及び地代の自然率に由つて定まり、而して價格構成要素の一たる地代は生產物價格の決定を俟つて始めて決せらるゝと謂ふに歸するからである。地代にして果して價格を俟つて始めて決定せらるゝものならば、市場價格と自然價格とに關する其說は之を放棄しなくてはならぬ。自然價格は市場價格以外に獨立して成立すること能はざる道理であるからである。

今此篇の主題たる Ricardo は價値を論ずるに當つて、貨物交換比率の決定は、土地資本の私有蓄積の前と後とに由りて果して其法則を異にするものなりや否や、及び地代と生產物の價格

とは何れが先づ存して他を決定するかの點を明かにすることに頗る力を用ゐたのである。

## 五

Ricardo の Principles 第一版(一八一七年)を取つて見るのに、彼も亦市場に於ける時々偶發的の原因に由りて定まる貨物の現實價格又は市場價格(actual or market price)の外に究竟之を支配する本來的自然價格(primary and natural price)なるものを求め、市場價格は時々の需要供給に由りて變動を免れずと雖も、自由競爭の行はるゝ限り、久しきに亘つては二者は相離るゝこと能はずして、市場價格は結局自然價格に一致すべき約束あるものとした(Principles, 1817, Chs. IV, XXVIII)。而して Smith にあつては、その謂ふところの自然價格は卽ち貨物の交換價値に外ならざるものであらうと推測せらるゝに止まるけれども、Ricardo はその然る事を明記して、「貨物の交換價値卽ち一貨物が有する購買力に就いて論する場合には、予は常に貨物が何等一時的偶發的原因の妨害なかりし場合にそれの有すべき力をば意味する。是れが而して其自然價格である。」と謂つた(ibid., p. 89)。故に彼れの交換價値論は、貨物と貨物との市場に於ける現實の交換比率は究竟何に由つて支配せらるゝかの法則を立てんとするに外ならざ



るものである。

交換價値の法則を立つるに先だち、Ricardo は Smith と共に使用上の價値と交換上の價値とを區別する。Ricardo にあつても、使用價値は特定物の利用、交換上の價値は其物の所有に由て賦與せらるゝ他物購買力の義である。而して謂へらく、如何なる方法に於ても人の滿足に寄與するところなきものに交換價値のあるべき筈はないから、交換價値は使用價値あることを不可缺前提となすけれども、利用大にして價値僅少又は皆無なるものがあり、又利用小にして價値大なるものあることは人の日常目擊するところなるを以て「利用は交換價値に絶對的に缺く可からざるものではあるが其尺度ではない。」既に利用あるものとせば、「貨物の交換價値は二個の源泉より生ずる。其稀少性と之を取得するに要する勞働量と是である。」人爲を以て其存在量を增減すること能はざる貨物の價値は、當初之を造るが爲めに要したる勞働量と何等相係はるところなく、一にその稀少性に由てのみ決せられ、之を獲んと欲するものゝ富裕並に嗜好の度に應じて變動する。珍奇なる繪畫、彫刻、稀觀書、古錢、一定の土地を限りて栽培せらるゝ葡萄にて釀せる特殊の酒の價値の如きは卽ち是である。然れども Ricardo に從へば、此種貨物は日常賣買せらるゝ貨物中の極めて小なる一部分をなすに過ぎず、大部分の貨物はその獲得に必

要なる勞働の投下に由つて、際限なく之を增加せしむる事を得るものであり、「彼れが交換價値を論ずるに方つてその念頭に置くところも、常に人間の努力に依てその數量の增加し得べく、而してその生產上に無制限なる競爭の作用あるものゝみである」(ibid., pp. 1—3)

此種の貨物の價値は、その生產に費されたる勞働量に依決せられる。乃ち曰く「社會の早期諸段階に於ては、是等貨物の交換價値、或はその一方の貨物の幾許が他の貨物と交換せらるべきやの規則は一に (solely) その各自に費されたる比較的勞働量に由りて定まるものである」(pp. 3—4)。而して「若し諸貨物に體現せられたる勞働量にして、その交換價値を左右せば、勞働の增加毎に、その加へられたる貨物の價値は必ず之を騰貴せしめ、その減少は必ず之を下降せしめざるを得ぬ」と(p. 5)。既に交換價値を左右するものは貨物の生產に費されたる勞働量なりとせば、費されたる勞働量はまた價値の變動を測定せる尺度たるを得るであらう。故に曰く「若し世に一貨物の如何なる時に於ても之を生產する爲め正に同一量の勞働を要するものありとせば、その價値は不變なるべく、依て以て他物の價値の變動を測定すべき絕好の尺度たるであらう」(p. 11)と。「是に由て觀れば Ricardo は費されたる勞働に貨物交換決定の原因を求むると共に、既有の價値の測定尺度をも併せて此に求むるものである」。



此に於て彼れはその經濟學的思索の基礎となれる Adam Smith と所見を異にする。彼れは、凡そ一物の眞實價格、卽ち之を獲得せんと欲する人が、眞に爲めに費すところのものは、之を獲得する努力煩勞である。「凡そ一物の之を獲得し、而して之を或る他の物と換えんと欲するものに取りての眞價値は、彼れが自ら免れて他人に課することを得る努力煩勞である。」「勞働は一切物に對して支拂はれたる最始の價格、本來の購買貨幣であつた。」資本の畜積土地の私有未だ起らざる原始社會に於ては、貨物獲得に要する勞働量間の比例はその相互の交換の規則たるべき「唯一の事情」たるが如しと云つて、「交換價値の眞源泉を定義すること爾かく正確なりし Adam Smith が、自ら別の價値の標準尺度を立て、一貨物と交換せらるゝ勞働量又は穀物量を以て之に充てんとしたることを以て一貫を欠くの嫌あるものとなすのである(pp. 5—6)。

「Ricardo を以て觀るに、勞働の生產物が悉く報酬として勞働者の手に收得せらるゝものとせば、價値を測るに費されたる勞働 (labour expended on, realized in, exercised on, bestowed on, necessary or required for the production of commodities) を以てするも、支配せらるゝ勞働 (labour purchased or commanded) を以てするも擇ぶところがない。」蓋し或貨物が一定量の勞働量を支配するといふは、反面より之を觀れば、勞働一定量に對して報酬として一定量

貨物の與へらるることに外ならぬから、例へば勞働生産力倍加するとき、その報酬たる貨物量も亦同じく倍加するものとせば、該貨物の價値は、之を生産する爲めに費されたる勞働量を以て測るも、之に對する報酬貨物量に由て之を測るも結果に於て異なることがないからである。然れども實際に於て勞働者は勞働生産物を悉く收得せざるを以て、採用せらるゝ尺度の何れなるかに由つて其結果は同じくない。Adam Smith は詢によく其自體の價値動搖を免れざる金銀の以て價値計測の尺度となすべからざるの理を說明したけれども、彼れが尺度たるに適するものと認めたる勞働又は穀物の交換價値と雖も決して此理の外に立つものではない。卽ち穀物の價値は供給增加の難易、需要の增減、新地域の開發、輸入の有無等に由て高低し、勞働の價値なる賃銀も亦啻に需要供給の關係の爲めのみならず、勞働者生活必需品の價格と共に變動する。Adam Smith が勞働の購買し得る貨物の數量には增減あるべきも「變動せるは貨物の價値であつて之を購ふ勞働の價値ではない。」「勞働のみ遂に其自體の價値に變動なきを以て、獨り有ゆる時、有ゆる處に於て一切貨物の價値を測定比較すべき終極眞實の尺度である」と謂つたのは當らぬ。「貨物の現在又は過去の相對價値を決するものは、勞働が生産すべき貨物の比較量にして、勞働者がその勞働と交換して受くる貨物の比較量ではない」と謂ふ(ibid., pp. 6-11)。



Ricardo は先づ此點に於て Smith の價値論より離れたのである。

## 六

「貨物の價値はその生産に費さるゝ勞働量之を決すと謂ふけれども、種類を異にせる勞働は單に其量のみを取つて之を相互に比較することが出來ぬ。例へば熟練ある打金匠一日の勞働と、尋常力役夫一日の勞働とが、その生産物の價値を等しうせざるべきは論なきところであるから、「今進んで、同量の勞働の生産物は互に同價なりと謂はんと欲せば、豫め或種勞働の一定量は、果して他種勞働の幾許量に相當するやの換算標準を立てなくてはならぬ。」然るに Ricardo が論ぜんと欲するところは、「貨物相對價値の變動の效果に關するもので、その絕對價値變動の效果に關せぬから、彼れは深く之に觸るゝことなくして、此難關を通過することを得たのである。卽ち彼れはたゞ二物の交換比率を決するものは、生産に費さるゝ勞働量にして、一方の勞働量が相對的に增加するときは、その生産物の價値騰貴し、減少するときは價値下落することを謂ふに止めるから、「その取りて相比較するところは、常に同種勞働の量の增減に外ならず、遂に異種勞働を相互に比較するの必要に會せぬのである。」例へば打金匠の勞働は、之を織

匠の勞働と比較すること甚だ困難であるけれども、一時期に於ける打金匠の勞働と、別の時期に於ける打金匠の勞働とは、之を相比較することが難事でない。此種の勞働に要する特有の熟練と强度とは、時を距つるも略ぼ變ることなきを以てである。「今羅紗一片に亞麻布二片の價値があり、而して十年後に羅紗一片の通常價値が亞麻布四片であつたとしたならば、羅紗を造るに要せらるる勞働が增加したか、亞麻布一片を造る爲めの勞働が減少したか、或は兩原因俱に作用したか何れかなりと我々は論結して差支ないのである」と (ibid., p. 14)。而して是は人の一定時に於ける毛織物勞働と、別の時に於ける毛織物勞働との比較に依り、敢て毛織物勞働と麻織勞働との價値產出力を相互比較することを俟たずして論結し得るところであるのである。

「貨物の價値は之に費されたる勞働量之を決すと謂ふに當つて、Ricaodo が謂ふところの勞働は、啻に直接一貨物の生產に費されたる勞働のみならず、貨物生產上の用に供せらるゝ資本生產の爲めに費されたる勞働をも併せ含んで居る。」謂へらく、Adam Smith が引ける原始社會の例に於ても、既に多少の資本は鳥獸を獵獲する爲めに之を缺くを得ぬ。從て此の如き社會に於ても是等鳥獸の價値はその獵殺に必要なる時と勞働とのみならず、又併せて獵夫の資本、卽ち賴りて以て獵獲を行ふべき武器の供給に必要なる時と勞働とに由りて左右される。假に海狸はそ



の捕獲困難にして、之を射擊する武器精巧なるを要する爲め、鹿を獲んが爲めに要する武器よりも勞働を費やすこと多しとせば「一頭の海狸は當然二頭の鹿よりも多くの價値を有するであらう。而してその然るは正しく全體に於てその捕殺には、より多くの勞働を要すとの理由に由るものである。此理は原始社會に於けると、文明社會に於けるとに由りて異なることなく、貨物の價値は常に直接に之を造る勞働の外、使用機械、道具、原料等に投ぜられたる勞働合計に由つて決せられ、其何れかに於ける增減は、必ず生產物の他の貨物に對する價値を增減せしめずんば已まないのである (ibid., pp. 16-21)。而して此理はまた資本(機械、道具、原料等)の使用者が、其所有者と同一人なると否とに由りて異なることなく、又生產物が資本の所有者とその使用者と、卽ち資本家と勞働者との間に分配せらるゝ比例如何は、生產物の價値に影響することがない。蓋し資本利潤又は賃銀率の高低は、各種產業に對して均等の作用を加ふるを以てである(ibid., p. 18)。

「以上述ぶる限りに於ては、Ricardo の說は、最も單純明瞭なる勞働價値說と稱すべきものである。」

## 七

以上述ぶるところは、姑らく資本の耐久力上の異同を無視しての論である。今新たに此一事を取つて考慮に入れると、Ricardo の說は當然面目を改めざるを得ぬ。

「彼れは資本の消耗の速かなると否とに由つて流動資本と固定資本とを分つた。高價にして耐久力大なる建物機械を生產上に用ゐるものは、多額の固定資本を用ゐるものと稱せられ、之に反して、その資本の主として賃銀支拂の用に充てられ、從て衣食物の購入に費さるゝものは、資本の大部分を流動資本として用ゐると稱せられる。」「故に二の生產業に投ぜらるゝ資本は同額なるも、その固定部分と流動部分との占むる比例は同一ならざることあるべく、又二業に投ぜられたる固定資本と流動資本とは各々同額なるも、その固定資本の耐久力の同じからざる事あるであらう。既に斯の如き場合を想像すれば、上に述べたる價値學說は修正を要すること勿論である。」「故に曰く、「貨物の相對價値の、その生產上に要する勞働の增減よりして起る變動の外、更に貨物は、また投ぜられたる固定資本の價値等しからざるか、又はその耐久力等しからざる場合には、賃銀の騰貴及びその結果たる利潤の下落より生ずる動搖を免れぬ」」と(ibid., p. 23)。



例を以て此理を說明すれば、假に上記原始社會に於て、獵者及び漁者の各々生產上に用ゐる獵具漁具は、共に同一量勞働の生產物にして、且つ共に等しく十年の使用に堪ふるものとせば、「獵者一日の勞働の產物たる鹿の價値は、正に漁者一日の勞働の產物たる魚の價値に等しかるべく、魚と鳥獸との比較價値は、生產量の幾許なるか、及び一般賃銀又は利潤の高低如何に拘らず、一にその各自に體現せられたる勞働の左右するところたるべし。」「利潤は賃銀の或は低く或は高きと正に比例して或は高く或は低き」を以て、賃銀の高低は利潤の問題に取つては最も重要の事項であるが「賃銀は兩生業に於て同時に等しく或は高く或は低きを以て、毫も魚獸の相對價値を動かすことを得ぬ。」獵者にして、その賃銀として割き與ふべき獵獲物の部分增大せることを理由として、その生產物の、魚に對する價値の增加を求めたならば、漁夫も亦同じ理由を以て之に對抗するからである。魚獸の交換比率はたゞ之に費さるゝ勞働量の增減に由りてのみ變動する。今假に一貨物、例へば金は、常に機械道具の援助なき勞働の同一量に依て生產せられ、從てその價値不變なるものなりとせば、魚獸の價値の變動は金に由つて之を測定することが出來よう(ibid., pp. 23-30)。然るに今獵者と漁者とが各々投下する固定資本は、共に等しく十年の使用に堪ふるも、その流動資本に對する比例を同じうせずして、例へば獵者は百

五十磅の固定資本と五十磅の流動資本とを、漁者は之に反して、五十磅の固定資本と百五十磅の流動資本とを用ゐ、而して利潤率は一割なりとせば、獵者はその生産物を七十九磅八志（流動資本五十磅に、之に對する一割の利潤を加ふるときは五十五磅、更に之に利率一割のとき現在價値百五十磅なる十年間年金額廿四・四磅を加ふるときは七十九・四磅となる）漁者は之を百七十三磅二志七片（流動資本百五十磅に、之に對する一割の利潤を加ふるときは百六十五磅、更に之に現在價値五十磅の十年間年金額八・一三磅を加ふるときは百七十三・一三磅となる）に賣らなければならぬ。然るに今生産上に費さるゝ勞働量は依然同一なるも、賃銀は騰貴することなりとせば、獵者は舊と同數の人を雇傭する爲め僅かに三磅の資本增額を行ふことを要するに過ぎぬけれども、漁者はその三倍の增額を必要とすべく、資本利潤は下降して四歩となるべく、獵者はその生産物を七十三磅十二志六片（流動資本五十三磅に、之に對する四歩の利潤を加ふるときは五十五・一二磅更に之に利率四歩なるとき現在價値百五十磅なる十年々金額十八・四九磅を加ふるときは七十三・六一磅）漁者は之を百七十一磅十一志五片（流動資本百五十五磅に之に對する四歩の利潤を加ふるときは百六十五・三六磅更に之に利率四歩のとき現在價値五十磅の十年間年金額六・一六二磅を加ふるときは百七十一・五二三磅となる）に賣らなけれ



ばならぬ。卽ち獸と魚との比價は、前に 100 : 218 なりしもの、今は 100 : 233 となるであらう。卽ち一般に賃銀騰貴するときは、資本中流動資本重きを占むる産業の生産物は、資本中固定資本重きを占むる産業の生産物に比して其相對價値騰貴すべき道理である。(ibid., pp. 31-33)。

Ricardo に從へば、固定資本はその消耗の速かなるに從ひ、其性質流動資本に近づくものであつて、上述の理はまた固定資本と流動資本との比例は同一であつても、固定資本の耐久力相等しからざる場合にも適用せられる。卽ちその生産上に固定資本の使用せらるゝものにあつては、その使用久しきに耐ふる程度に從ひ、その生産物の價格は、賃銀の騰貴、利潤の下落の爲めに下落すると謂ふのである。Ricardo 自ら其所說を概括して曰く「或種の生産に充用せらるゝ固定資本の量と耐久力とに比例して、斯る資本を用ゐて生産せられた貨物の相對價格は賃銀と反對に變動し、賃銀騰貴するときは下落するものゝ如くである。また如何なる貨物も單に賃銀騰貴せるの故を以て絕對價格騰貴することなく、之に投ぜらるゝ勞働の增加するにあらずんば決して騰貴することなきのみならず、その生産上固定資本の用ゐらるゝ一切の貨物は、賃銀の騰貴と共に啻に騰貴せざるのみならず、却つて絕對的に下降するやうである」と(pp. 41-2)。

上記 Ricardo の說は凡べて貨幣の價値は不變なりとの假定に基づくものである。然るに貨幣は、一般貨物と同じく、其價値に變動あることを免れぬ。而して貨幣價値の變動より生ずる賃銀の騰貴は、一般物價の騰貴と相伴ふものであつて、又其故に何等利潤に對して影響を及ぼすことがない。たゞ利潤を下降せしむるの作用はあつて、生産物の價値を騰貴せしむるの影響がないのは、勞働者に對する報酬の豐富となり、又は賃銀を以て購ふべき必需品獲得の困難より起る賃銀の騰貴是である(pp. 42-3)。

是を千八百十七年に於ける彼れの價値論の大要とする。

## 八

Principles 第一版價値論の章を讀むものが注意を惹かれざるを得ないのは、Ricardo が賃銀の騰貴は必ず貨物の價格に傳へられると有力なる學者間の通說に反對して、賃銀の騰貴は價格の下落と兩立し得べしといふ「新奇」の說を主張する爲めに特に力を用ゐたことである (pp. 38, 42)。而して彼れの說明を聽けば、固定資本と流動資本との比例を同じくせざるか、又は固定資本の耐久力を等しくせざる二生産業に就ては、其生産物の交換比率は賃銀の騰貴卽ち利潤



の下降の爲めに變動すべきものであつて、その變動は貨物にして其生産に充用せらるゝ資本中固定資本が重きを占めるか、或は固定資本の使用久しきに堪ふるものゝ比價は下落して、然らざるものゝ比價は騰貴するに在りと謂ふべく、若しも金の生産が固定資本を要するものならば(事實は然り)、是よりも固定資本を要すること少なきか、又はその消耗の速かなるものにあつては、生産物の價格は賃銀騰貴の爲めに騰貴すべき筈であるに拘らず、Ricardo が頗るその下落の一面を力說するに努めて、騰貴の一面を云はなかつたのは何故であるか。

Ricardo 研究の一權威たる Jacob H. Hollander (The Development of Ricardo's Theory of Value, Quarterly Journal of Economics. Aug. 1904 pp. 455-491 -David Ricardo. A Centenary Estimate. Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science Series XXVIII No. 4, 1910) は之を解釋して Principles の第一章が單獨なる價値の說明たるよりも、寧ろ Ricardo が之をその凡そ千八百十三年以來唱へ來れる其の實際政策上の主張に對する理論的根據たらしめんことを期したる事情に由るものだとしてゐる。而して件の Ricardo が唱へ來れる實際政策上の主張とは、彼れが(一)Malthus に反對して利潤下落の原因は究竟賃銀騰貴の外に之を覓むべからざることを固執し、(二)McCulloch が提議せる國債利子を穀物價格

に應じて削減せんとするの案の正當衡平の策にあらざることを主張し、(三)穀物輸入税の撤廢は一般物價の下落を來たすべしとの世間の憂惧に同ずるを肯んぜざりしこと是であるが (ibid., p. 464, p. 82)、是等の主張を支持せんが爲めには、何れも賃銀(穀物)の騰貴が必しも價格を騰貴せしめざることを證明するの必要がある。今就中吾人に取りて興味があるは、その利潤高低の原因に關する Malthus との論爭である。

千八百十三年に於ける英國農業不安と、議會に於けるその論議とは Ricardo の注意を促し、千八百十四年始以來 Malthus と穀物關税の賃銀、利潤、地代、價格に及ぼす影響に關して、頻りに說を戰はしたことは、その書簡集の示すところである (Letters to Malthus pp. 34-55)。Ricardo の說は當初より穀物輸入の制限は、其價格の騰貴を來たし、食物價格の騰貴は賃銀を騰貴せしめ、賃銀の騰貴は利潤利子の下落と相伴ひ、而して「農業企業家の利潤は他の一切産業の利潤を支配する」と謂ふに在つた。

Malthus は之に反して、農業企業家の利潤が他の一切産業の利潤を支配すと云ふは、その正反對よりも眞なることなく、從て食料獲得の方法を低廉ならしむることは、必しも利潤引上の唯一の途ではない。卽ち新外國市場の開拓は國内商品の價格を騰貴せしめ、特定産業の利潤を





膨脹せしめ、結局農業上の利潤をも騰貴せしむといふ說を以て之に對した。既にして Ricardo はその Malthus に與へた書簡 (一八一四年六月廿六日付) に於て、「經濟學上、穀物輸入に對する制限は輸入國に於て利潤を下降せしむるの傾向があるといふ命題以上に予の確信せるものはない」、食物生産の難易は「資本利潤を左右する殆ど唯一の原因である」(同十月廿三日附) と云ひ、千八百十五年に至つて Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock を著はし、分配理論に基づいて、穀物自由輸入を主張し、Malthus の保護主義的結論はその一般自由貿易論と一致せぬものなる事を明かにせんとした。然れども賃銀の騰貴は必然價格を騰貴せしむるものであるときは、賃銀の騰貴は利潤下落の唯一の原因たることを證明すること能はず。蓋し資本家は賃銀の騰貴の爲め失ふところを、生産物價格の騰貴に依て償ふことを得るからである。故に其利潤論の正しきことを立證せんが爲めには Ricardo は先づ賃銀騰貴するも價格は必しも騰貴せざるの理を明かにしなくてはならぬ。然るに當年經濟學界に於ける有力の學說を窺へば、此新見解は容れられ難きの觀がある。卽ち Adam Smith の此點に關する所說は、大體に於て穀價の騰貴は賃銀並に他の一切貨物の價格を騰貴せしむる事を認むるに傾き (Wealth of Nations, Bk. IV. Ch. V.)、Malthus は夙に其人口論(第二版)に於て「特定

國に於ける貨幣價格は勞働並に他の一切貨物の價格を左右する最有力なる成分なること疑を容れず」と謂ひ、(p. 458. Observations on the Effects of the Corn Laws, p. 11)J. B. Say は「穀物價格にして增加せば、彼れは〔企業主、農民、製造家又は商人は〕同じ比例に於てその生産物の價格を增進せしむることを餘儀なくせらる」と謂ひ、(Traité d'économie politique 1803, tome 1, p. 294) Torrens は「穀物價格の騰貴は勞働の價格を騰貴せしめ、勞働の騰貴は勞働が直接生産するところの貨物並に勞働が之に對する等價物として用ゐらるゝ貨物の一切に傳へらる」と謂ひ、(An Essay on the External Corn Trade, 1815 p. 88) 否な Ricardo 其人すら、嘗て穀價若しくは賃銀の騰貴は一切貨物の價値又は價格を騰貴せしむるものなるを言明したことがあるのである (Letters to Malthus pp. 34, 39)。

Influence of a Low Price of Corn on the Profit of Stock の公刊より經濟學及び課稅之原理の著述に至るまでの Ricardo が苦心は專ら此點に存した。此期間に於て彼れがその思索上に跨んだ行路の決して平坦でなかつたことは、千八百十六年十月 Malthus にその經濟學原理著述の進行を報じて「予は其に關する從來の觀念が正しくなかつた爲めに價値及び價格の問題の爲めに、大に妨げられた。予の現在の見解も或は同じく謬つてゐるかも知れぬ。それは予が



豫想せる一切の意見と異なる結論に導くからである。予は、予自身を滿足せしむるに過ぎぬ迄も、我理論に一貫せる形態の附與せらるゝ迄研究を繼續するつもりである」(Letters to Malthus p. 120) と謂つたのに徵して窺ふことが出來る。「斯くして彼れは既述の如く、二貨物のその生産に投ぜらるゝ固定資本の同額なるか、或はその耐久力及び固定資本、流動資本の比例を同じうする場合に於ては、生産上に費されたる總勞働量その價値を決定して、賃銀の高下は全然之に影響を及ぼすことなきも、流動、固定資本の比例一ならざるか、或は固定資本の耐久力等しからざる場合に於ては、固定資本の重きを占むるか、或はその耐久力一層大なるものにありては、生産物の相對價値は實に賃銀騰貴の爲めに下落するといふ結論に到達したのである」。Ricardo が曩に Adam Smith の費された勞働を價値の尺度となす事を以て一貫せざりしの不徹底を難じたる(本書第九一頁)に拘らず、自ら敢てその當初の原則に修正を加へたのは、Hollander の解するところを以てすれば、此修正が正に彼れの第一に求むる、價値が賃銀騰落の爲に騰落せざる事の證明を與へるからであるといふ。謂へらく、價値論の章の結末「諸貨物は賃銀の眞實の騰貴の結果として、その價値を下降せしむることを得べしと雖も、此原因よりして之を騰貴せしむることを得ず。他方に於て、諸貨物は、賃銀下落するときは、高き賃銀が與ふる生産

上の特殊利益を失ふが爲め、其價値は却て騰貴することがある」といふ一句には殆ど意氣揚々の響きが聞かれるのである(Hollander, p. 475, p. 90)。

素よりRicardoが賃銀の騰落必しも貨物の價格を騰落せしめず、時として價格は賃銀騰貴の爲めに却て下落し、賃銀下落の爲めに騰貴することあるの理を證明する爲め頗る力を用ゐた形跡は甚だ顯著である。併しながら、果してRicardoの意はHollanderの謂ふが如く、此證明を以てその實際政策上に固執し來れるを主張の理論的根據たらしめんとするにあつたか否か。少くもその賃銀と利潤との關係に關する限りに於ては、疑を容るべき餘地がある。「Hollanderに從ふときはRicardoは利潤が賃銀の騰貴の爲めに下落することを云はんが爲めには、賃銀騰貴の爲めに價値の騰貴することなきを要するから、此理を證明せんとして其價値論に苦心したのであると云ふ。」けれども價値が賃銀の變動に由て全く影響せらるゝことなき少數の場合は姑らく措き、固定資本と流動資本との比例に異同あり、又は固定資本の耐久力同一ならざる場合に於て、價値は賃銀騰貴の爲めに却て下落することありと云ふに方つては、彼れは賃銀の騰貴は、當然利潤の下落を意味するものとして、之を其推理の前提に置いて居る。卽ちRicardoが賃銀騰貴の爲め、固定資本を要すること多きか、或は固定資本の耐久力大なるものを用ゐる産



業にあつては、その生産物却て下落すと云ふ理由は、二産業中比較的多くの流動資本を用ゐて生産を行ふものは、賃銀騰落の爲めに直接影響せらるゝところ多く、之に反し、固定資本は放下の期間長きに亙るものであるから、之を用ゐること多きものは、利潤率の高下に依りて直接影響せらるゝところ多きものであるのに、今「利潤は正に賃銀の或は低く或は高きに比例して或は高く或は低かるべく。」例へば賃銀百分六の騰貴は、利潤百分四の下落を來たすから(p. 32)二貨物の比價は賃銀騰貴の爲めに變動し、その生産上流動資本が重きを占めて賃銀の影響を受くること比較的大なる貨物の價値は騰貴し、固定資本重きを占めて、利潤の影響を受くることと大なるものは其價値が下落すると謂ふに在ることは前述の如くであるから、「若しRicardoの目的が、利潤下落の原因は賃銀の騰貴に外ならざることを證明せんが爲めの基礎を求めるに在つたとすれば、彼れはその最後に求めんと欲する答を先づ前提として論を進めたものと謂はねばならぬ。」Ricardoは素より全然推論理上の規範を犯すことなき人だとは言はれぬとしてもまた恬然として斯の如き非論理を敢てする人だとは思はれぬ。「Ricardoの價値學說の發達」に關するHollanderの細密周到なる研究には固より頗る傾聽すべきものがあるけれど、「右の一點に關する推測に至ては、多少の留保を以て聽かねばならぬ。」

## 九

Principles 第一版は千八百十七年の春公にせられた。然るに此書に於て Ricardo は學界の通說に反する「新奇」の說なる事を自覺しつゝ賃銀騰貴の却て價値を下降せしむる事あるを力說したるに拘らず、學者の批評は此點には加へられずして、抑も費されたる勞働の以て價値の尺度たらしむるに適するや否やの點に加へられた。批評家の最有力なる一人は Torrens であつた。彼れはその "Strictures on Mr. Ricardo's Doctrine respecting Exchangeable Value" (Edinburgh Magazine and Literary Miscellany, October 1818) に於て、費されたる勞働を以て有ゆる社會に於ける價値の尺度となすの失當なることを論じて、謂ふのに Adam Smith が勞働量價値を測定するといふ原理を、原始未開の社會に限つたのは細心にして當を得たものである。Ricardo は更に是よりも歩を進めて邪途に踏み入つた。寔に彼れは資本の耐久力等しからざる場合に、此原理の適用すべからざることは之を認めたけれども、Ricardo は此を例外の場合とした。然るに是は例外でなくて、却て通則であるから、彼の原則は全然是が爲めに覆へされる。又假に資本の耐久力は相等しきも、資本が動かす勞働量は等しからざることがあらう。



而かも猶ほ競爭は、生産物の價値を同一點に到達せしめなければ已まぬ。故に等額の資本が、等量の勞働を動かすときは、同額の價値を生ずることは勿論であるが、此二個の條件の間には何等必然の關係なく、價値はその全然異なる場合にも相等しきことあるであらう。故に交換價値を決定するものは勞働量ではない。Ricardo は「偶然の一致を必然の結合」と錯認せるものであると。而して Torrens は其所說を概括して「資本を構成する原料と賃銀との比例等しからざるとき、一業に於ける賃銀率の偶々他に於けるよりも高きとき、資本の耐久力同一ならざるとき、耐久力は等しきも支出賃銀額の同じからざるときは、生産物の價値は之に投ぜられた勞働量に比例せぬであらう」と謂つたのである (Letters to McCulloch p. 16)。

Malthus も亦此點に於ては Torrens と見解を同じうするものである。彼れは既に千八百十七年九月 Principles 再讀の後、Ricardo に向つてその價値尺度の問題に就ては所見を異にすることを告げ、Ricardo も之に對して自家の價値學說の利潤率を異にする諸國に於て支持すべからざることを容認した (Letters to Malthus p. 139)。Malthus は更に後れて千八百二十年の早春 Principles of Political Economy を著はすや、其の一全節（第二章第四節）を擧げて一貨物に費された勞働の果して貨物交換價値の尺度たるに宜しきや否やの論に充てた。謂へらく、一貨

物の生産に費された勞働量は、之を單獨に取つて見れば價値の尺度たりと謂ふことを得ぬ。蓋し一切の貨物等しく其生産上に要する勞働量を增加すれば、その交換價値は不變なるべきを以てである。又之を相對的の義に解して、貨物の交換價値はその各自に費された比較的勞働量之を定むと云つても、社會發達の階段にして此原則の之に適用せらるゝものはないのであるから(p. 86)、Smith 又は Ricardo が「彼の資本の蓄積と土地の占有とに並びに先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要なる勞働量の比例は、その相互交換の規則たるべき唯一の事情なるが如くである」と云ふのは當らない。社會發達の最初期に於ても、既に勞働は生産費の唯一要素ではなくて、「收益の遲速」(varying quickness of the returns) なる新なる一要素は、全然勞働とは關係なく價値決定の一必要々素を形成する。文明社會に於て同じ原因の作用することは言を俟たぬ。Ricardo の勞働價格騰貴せば多數貨物の價格下落すべしとの說は當を得て居る。若し其語法を自然にして、多額の固定資本の投下せられてある爲め、之に對する利潤が生産費の主要部分をなせる諸貨物にあつては、その價格は利潤下落の爲め下降すると云つたならば、人を驚かすこと更に少なきを得たであらう。一般に賃銀騰貴して利潤下落するときは同一量の勞働を動かす爲めに充用せらるゝ資本の比例異なるに從ひ、費さるゝ勞働量は同一



なるも、或貨物の價格は騰貴し、或貨物の價格は下落し、極めて少數貨物の價格のみ依然不變であらうと (pp. 88–95)。Malthus は更に此外(一)製造業に使用せらるゝ外國貨物の數量(二)課稅及び(三)地代の支拂が、投下勞働量の外に價格高下の原因たることを認め(pp. 95–101)、結局「一貨物の生産上に費されたる勞働量は、同時同處に於ける相對價値の正しき尺度にもあらず、又異なる諸國及び異なる時代に於ける……眞交換價値の尺度にもあらず」との斷定を下した(pp. 107–8)。

## 十

吾々は玆に暫らく停まりて、Ricardo の所說中勞働價値說と稱すべき部分の根據を吟味する必要がある。貨物の價値はその生産上に費されたる比較的勞働量之を定むと謂ふは、證明を待たざる自明の公理ではない。Ricardo は如何にして二貨物の、之に投ぜられた勞働量が定むる比率に由らずして、相交換せらるることのあり得ざるを保し得るか。此問に對する解答は、自然價格と市場價格との關係を論ずる Principles 第四章中に之を求めることが出來よう。是に由るときは、市場に於ける需要供給の關係に由て決せらるゝ貨物現實の價格が、必しも常に投

下勞働量に由て定めらるゝ其價値と一致せざることは、Ricardo 之を認めるけれども、久しきに亘つて見るときは、貨物の市場價格は其交換價値より離るゝこと能はずして、究竟之に歸着せんとするの約束あることを說くものである(Letters to Malthus pp. 148-9)。而して貨物の市場價格をして久しく其價値の上下に逸脫すること能はざらしむるものは、資本の競爭、從て其結果たる利潤率の平均である。「各人にして其の資本を、その欲するところに使用すること自由なる限り、彼れは當然資本の爲めに最有利なる用途を求めるであらう……。凡ての資本使用者の側に於ける比較的不利なる業務を去りて有利なる業務に就かんとする此の不斷不休の欲求は、凡ての利潤率を均一ならしめるか、或は之を當事者の評價上、或者が他人に對して特に享有し、若しくは享有すと認めらるべき利益を償ふに足るが如き割合に定めんとする强き傾向を有する。」今一貨物の市場價格その自然價格以上に昇るときは、資本は他の比較的不利の業務より此の有利なる生產業に集中し來り、貨物の供給を增加せしめ、從つて價格を下落せしむべく、市價が自然價格以下に降れば、反對の作用が行はれて、究局此二者を一致せしめずんば己まぬであらう。Ricardo に從へば、利潤率平均を得たるときは、卽ち貨物の市場價格とその價値との一致せる時である。故に曰く「されば、貨物の市場價格が引續き久しく遙に其自然價格



以上又は以下に留まることを妨ぐるものは、各資本家が懷ける、其基金を比較的不利の用途より有利なる用途に轉ぜしめんとするの欲求である。諸貨物の交換價値をば、その生產に必要なる勞働の賃銀と、使用せられた資本をその效力の原狀に復せしむるに要せらるる他の一切の出費とを支辨した後、殘餘の價値又は餘剩が、各業に於て使用せられた資本に比例するやうに調節するものは實に此競爭である」と(pp. 87-8)。卽ち Ricardo の勞働價値說に若し證明ありと謂ひ得るならば、それは利潤の平均を其基礎とする證明であると云ふことが出來る。

然れども此證明は暗默の間、同額の資本は必ず同量の勞働を代表すること(卽ち同量の勞働者を雇傭すること)を前提とする。斯る前提の下に於てすれば、貨物の市場價格は假令一時其價値の上下に離隔することがあつても、利潤率平均の作用に由て早晩必ず是に復歸すべき道理であることは勿論であるが、一度此前提を撤去して、同額の資本必しも同量の勞働を代表せざることを認むるときは、復た投下勞働量に由て定められたる貨物の自然價格が、究竟その時々の市場價格の吸引中心たることを信ずべき理由は存せぬのである。假に例へば二人の同じく一萬磅の資本を投じて生產を行ふものがあつて、一人は其資本の大部分を機械に投じ、一人は之を勞働者の雇傭に充てゝ賃銀として支出し、而して生產物は各々その投下勞働量に比例して賣

却せらるゝものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一人が受くる收益は甚だ少なく、一人が受くる收益は是に比して甚だ大なるべきを當然とする。此に於て、此の利潤率の不平均を正さんが爲め、資本が彼の不利の生産業を去つて此の有利の産業に移り、供給の增減、從て一方の價格の騰貴、他方の下落に由り、利潤率の平均を得るに至つて始めてその流動が止んだとしたならば、その平均を得た場合の二貨物の比價は、決して其に對する投下勞働量に比例するものでないことが明白である。故に資本中固定資本と流動資本との占める割合が常に同一であるといふことの假定せられざる限り、貨物の交換比率は投下勞働量之を定むとの理法は、之を證明することが出來ぬ。右に述べた Torrens, Malthus の批評も亦畢竟此點を指摘するものと見得るのである。

Ricardo は始めから此理を解せざりしものではない。「されば彼れは Torrens の批評に對しては少しく平なる能はず。その McCulloch に與へた書簡中に「耐久力等しからざる資本の生産上に用ゐらるゝとき、價値の勞働量のみに由て左右せられざることは、予之を拙著の中に明記して居る」と謂つたのである(p. 14)。然れども Torrens, Malthus 等の批評は、Ricardo をして漸くにして費された勞働量が價値を決定するといふ斷定の宜しく制限せらるべく、利潤の價値



に及ぼす影響の重要視せらるべきを覺らしめたものゝ如くである。千八百十九年に出でた Principle 第二版に加へられたる訂正は殆ど云ふに足らぬものではあるが、猶ほ右述の事を念頭に置いて之を見るときは、Ricardo の思想の動きつゝある方向を是に由て察することが難からぬのである。

「即ち彼れは第一章を五小節に分ち(Ashley が Principles 第一版を小節に區分することは第三版に始まると記せるは誤解を招くの嫌がある。Economic Classics P. 1 note)諸所の字句を改めたるの外、Torrens の批評に鑑みて(Letters to McCulloch, p. 14)費されたる勞働の價値尺度たる原則に對する例外として、既に第一版に擧げたる(イ)固定資本と流動資本との比例一ならざる場合(ロ)固定資本の耐久力等しからざる場合の外、更に新に(ハ)流動資本の回轉し、若しくは其投資者の手に復歸する時期の甚だ異なることある」事情を加へ、賃銀騰貴して利潤下落するときは、二貨物中其資本の回轉に比較的長時間を要するものは其比價下落することを認め、明かに其勞働價値說を叙べるのに更に一段の愼重を加へたのである (Hollander, Ricardo, p. 106)。」

Ricardo の思索の經過は、明かにその McCulloch 宛の書簡に依て窺はれる。McCulloch は Ricardo を師匠とするものであつて、曩に Torrens の Ricardo を評するや、直ちに同じ誌上

(Edinburgh Magazine) に之に答へて、Ricardo の所謂勞働は、啻に資本の蓄積せられたる後之に加へらるゝ勞働を意味するのみならず、資本の蓄積其事に投ぜらるゝ勞働をも含むものであつて、資本は畢竟蓄積せられた勞働に外ならずとして Ricardo を辯護し、Malthus の Principles の出たときも、直ちに起つて辯護の文を "Scotsman" に掲げ、Ricardo は之を多としたけれども、(Letters to McCulloch p. 63) 彼れは猶ほ此辯解を以て安んずること能はずして、既に生産に要する時間が、之に要する勞働量と相併んで貨物の價値を決定する原因たることを確認したのである。

即ち同じ書簡(一八二〇年五月二日附)に於て、彼れは「此問題(價値の問題)に關して爲し得べき最善の考慮を盡したる後、予は貨物の相對價値の變動を來たし得る原因の二あることを信ずるものである。第一は貨物の生産に要する相對的勞働量、第二は斯る勞働の成果が市場に搬出せらるゝ迄に經過すべき相對的時間がそれである。固定資本の一切の問題は此の第二の規則の下に屬する……」と謂つたのである (p. 65)。約六週間の後 Ricardo は McCulloch の問に答へて、再び同じ問題を論じた。曰く「一切の價値ある貨物は勞働の生産するところである。蒸氣機關の製作に投ぜられたる勞働が、高價なる家具の製作に投ぜられたる勞働と量に於ても



その行はれたる時間に於ても共に同一なりとせば、蒸氣機關と家具とは同價値であらう。一年の終りに於て家具師は其家具を一千磅を以て賣つた。蒸氣機關も亦一千磅の價値があるけれども、賣られないで、次年の資本として使用せられる。假に利潤は一割なりとせば、勞働量及び機關所有者が投ずることを要する(此點に於て彼れは家具師と同地位に在り)流動資本と關係なく、機關所有者は其年の終りに於て、其蒸氣機關を效力の原狀に復せしめ、且つ固定資本として用ゐられた資本一千磅の利潤として、其生産物に百磅を課せねばならぬ。若し蒸氣機關に依て行はれた作業の收益を收むるに二年を要すとせば、彼は第一年の利潤として百磅、第二年の利潤として百十磅を收めねばならぬ。而して是は市場に搬出せられた貨物に現に蓄積せられたる勞働とは全然無關係の事であるのである。今假に高價なる一機械を用ゐ、而して予は二年間何等の收益を此機械より得ることなしとせば、二年の終りに於て、予の機械と予の生産物とを合したるものは、之が生産に投ぜられたる一切の勞働と、並びに此期間何等の收益を擧げざる資本の蓄積利潤との價値がなくてはならぬ。然るに同じ結果は、予が流動資本のみを用ゐ、而して我貨物を二年間市場に出さざる場合にも生ずるであらう。二年の終りに於て、貨物の價値は之に投ぜられたる一切の勞働のみならず、併せて予の資本が斯く用ゐられた期間の全

蓄積利潤に相當するであらう。「されば嚴密に謂ふときは、貨物に投ぜられたる勞働の相對量が其相對價値を左右するのは、勞働以外に是に投ぜらるゝものなく、而してその投ぜらるゝ時間の同一なる場合に限るものである。」時間同一ならざる時も、之に投ぜらるゝ勞働の相對量は、依然その相對價値を左右する主要成素たるものであるが、併し唯一の成素ではない。蓋し貨物の價値は勞働に對して償ふの外、併せて貨物の市場に出さるゝまでに經過する時間を償はねばならぬからである。」一般原則に對する例外は、總て此の時の規則の下に屬する。而して一貨物完成に要する時は、多岐多樣であるから、假令生産上常に同一量の勞働を要する貨物の求め難い困難に打ち克つことを得たりとするも、猶ほ一貨物を擇んで之を一般的價値尺度となすことは困難である。端極なる二個の場合は、(一)貨物が資本の中介を俟たず、勞働のみに由りて、而かも即時に生産せらるゝ場合と(二)貨物が多量の固定資本の産物であつて勞働を含有することと甚だ尠なく、且つその長時の猶豫を待て始めて生産せらるゝ場合とであらう。一般貨物に最もよく適合せるものは恐らく此二者の中間であらう。此間の一方に位せる貨物は、勞働價格の騰貴、利潤の下落と共に其比價騰貴すべく、反對の側に位せるものは、同一原因よりして其價値下落するであらう」と(pp. 69–71)。而して價値尺度の問題の解決容易ならざることを嘆じ



たる後、若し予にして拙著の價値の章を書き直ほすとすれば、予は貨物の相對價値を支配する原因は一でなくて二なること、即ち該貨物を生産するに必要なる勞働の相對量及び資本が睡れる時間並に貨物が市場に搬出せらるゝ迄の利潤とであることを認める」と謂つた(p. 71)。

## 十一

Principles は一八二一年の早春其第三版を出した。Ricardo は意の如く其價値論の稿を改むる遑を得なかつたが、而かも猶ほその「困難なる價値の難問題に關する意見を前版に於けるよりも十分に說明せんことを試み、」之が爲め「第一章に若干の增補を加へた。」而して此增補の如何なる性質を帶ぶるものなるかは、既揭著者の書簡を書んだ者の既に推測し得るところであらう。

Ricardo は舊版に、社會發達の初期に於て單に貨物の交換價値は勞働量に依りて、若しくは「一に(solely)勞働に依りて定まると云つたのを殆ど專ら(almost exclusively)勞働に依りて定まると改め(Principles 3rd ed. pp. 3, 13 拙譯同書 第六頁及び九頁)、舊版に於ては五小節に分つた同章を七小節に分ち(註) 就中貨物の價値は費されたる相對的勞働量に依りて決せらるとの

原則の、固定資本の使用と流動資本回轉の遲速との爲めに修正されなければならぬ理由を說明することに於て詳細を加へた。而してその到達した結論は、利潤は勞働量と相並んで貨物交換價値を左右する原因たるものなれども、たゞその有力の程度に於て後者に遜ると謂ふことと是である。

註、Principles 第二版と第三版とに於ける第一章小節の區分の相異を示せば左の如し。

第二版

第一節

一貨物の價値、若しくは之と交換せらるべき他の貨物の數量は、其生產に必要なる相對的勞働量に由りて定まり、其勞働に對して支拂はるる報償の多少に由て定まるものではない。

第二節

資本の蓄積は前節に述べたる原則を變へることなし

第三節

前節に述べたる原則は固定資本として機械の使用せらるることに依て餘程修正せらる

第三版

第一節

同上

第二節

品質異なる勞働は異なる報酬を受ける。此事は貨物相對價値の變動の原因たるものではない。

第三節

啻に貨物に直接加へられたる勞働が其價値を動かすのみならず、斯る勞働を援助する器具、道具及び建物に投ぜられた勞働も亦た然るものである。

第四節

諸貨物の生產に投ぜらるる勞働の量が其相對價値を左右するとの原則は、機械其他の固定且つ耐久的なる資本の使用の爲めに餘程の修正を受ける。

第五節

價値は貨銀の騰落と共に變動せずといふ原則は、また資本耐久力の等しからざること、及びその資本使用者に復歸する遲速に依ても修正せらる

第六節

不變の價値尺度に就て

第七節

常に以て價格を表現せらるゝ媒介物たる貨幣の價値の變動より生じ、又は貨幣を以て買はるる貨物の價値の變動より生ずる樣々の結果





第四節

價値は貨銀の騰落と共に變動せずといふ原則は、また資本耐久力の等しからざること、及びその資本使用者に復歸するの遲速に依ても修正せらる

第五節

常に價格を表現すべき仲介物たる貨幣の價値變動より生じ、又は貨幣を以て買はるる貨物の價値變動より生ずる樣々の結果

即ち Ricardo は第一第二兩版に於けるが如く、先づその當然勞働價値說と稱せらるべき、學說を述べた後、第四第五兩節に於て此原則の行はるべき場合を制限する。その謂ふところに

従へば、生産物の價値が投下勞働量に比例し、或は是と共に增減するのは、(一)生産上勞働のみを投じて機械を用ゐず、而してその市場に搬出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合、及び(二)生産上に用ゐらるゝ固定資本が、價値及び耐久力を同じうする場合に限られ(P. 28 拙譯同書第二七頁)此以外の場合に於ては、價値は敢て投下勞働量の增減を伴はず、賃銀の變動(卽ち利潤率の變動)に由つて變動するものである。彼はその既に McCulloch 宛の書簡中に擧げたるものと類似の例を引いて此理を說明する。

甲乙二人があり、各〻一年間勞働者百人を雇傭して機械を造らしめ、更に丙があつて同じく一年間同數の勞働者を傭つて穀物を作らしめたりとせよ。年の終りに於て、甲乙の機械と丙の穀物とは何れも同一勞働量の生産物であるから、其價値は相等しからう。然るに第二年に於て甲乙二人は其の第一年に造らしめた機械を利用し、更に各一百人を傭ひて、甲は羅紗、乙は綿布を織らしめ、丙は前年と同じく引續き一百人の勞働者をして穀物を作らしめたりとせよ。今投下勞働量のみを念頭に置いて考ふれば、甲の有する機械と羅紗との價値合計、若しくは、乙の有する機械と綿布との價値合計は、何れも丙が第二年に於て作らしめたる穀物の價値の二倍なるべき筈なれども、甲の機械と羅紗、又は乙の機械と綿布とは穀物の價値の二倍以上であら



う。蓋し、毛織業者及び綿織業者の資本に對する第一年間の利潤は其資本に加へらるゝに反し、農業家のそれは消費せられ、享樂せられたからである。「されば其資本の耐久力の程度を異にする爲め、或は—畢竟此と同一事に歸着することであるが—一種の貨物の市場に齎さるゝ迄に經過しなければならぬ時間の爲め、此等のものゝ價値は精確に之に投ぜられたる勞働量には比例せぬであらう。それは一に對する二ではなくて、價値多き方のものが市場に齎さるゝ迄に經過しなければならぬより長き時間を償ふ爲め、多少是以上に上るであらう。」假に一勞働者に支給せらるゝ賃銀は年額五十磅、利潤率は一割なりとせば、第一年の終りに於ける機械並に穀物の價値は、共に等しく五千五百磅(賃銀總額五千磅に、是に對する一割の利潤五百磅を加ふ)なる筈であるが、第二年の終りに於ては、丙の穀物は其價値依然として五千五百磅なるべきも、甲及乙の生産物は之に加算するに、第二年の始めに方り、既に存したる機械の價値(五千五百磅)に對する利潤五百五十磅を以てせる六千五十磅を以て之を賣らねばならぬ。然るに、今賃銀騰貴するときは、羅紗と綿布とは爲めに同一の影響を受くべきを以て、其相互の比價は不變なるべきも、穀物と羅紗、又は穀物と綿布との比價は爲めに變動して羅紗綿布は比較的下落する。Ricardo に從へば、賃銀の騰貴は、利潤の下落なくして起ることがない。今上記の例に於

て、賃銀騰貴の爲めに利潤率は一割より九歩に低落したものとすれば、穀物は依然五千五百磅なるべきに反し、甲と乙との生産物は六千五十磅たらずして、五千九百九十五磅（5500×1.09＝5995）たるべきであるからである。（姑らくRicardoの計算に從ふ。正しくは、利潤率低下後に於ける比價は、穀物の五千四百五十磅（5000×1.09＝5450）に對し、羅紗若しくは綿布五千九百四十五磅（5500×·09＋5000×1.09＝5945）たるべきではないか）故に曰く「勞働騰貴又は下落に因る財の相對價値變動の程度は、使用せられた資本全額に對し固定資本の占める割合の如何に由て定まるであらう。極めて高價なる機械を用ゐ、或は極めて高價なる建物内で生産せられ、又は市場に搬出せらるゝ迄に長時間を要する有らゆる貨物の相對價値は下落し、一方凡ての主として勞働に依て生産せらるゝもの、若しくは速かに市場に搬出せらるべきものの相對價値は騰貴するであらう」と（p. 32 拙譯同書第三〇頁）。

右に述ぶるところは、同額の資本を構成する固定資本と流動資本との割合同一ならざる場合に就ての論であるが、素と Ricardo に從へば、固定資本の耐久性減少するに連れ、其性質流動資本に接近し來るものであるから、同一の理はまた資本構成部分の比例は同一なるも、固定資本の耐久性同一ならざる場合にも適用せられる。即ち「賃銀が騰貴するか、――或は畢竟それと



同一事に歸着するが――利潤が下落すれば、耐久的性質の資本を以て生産せられた貨物の相對價値は必ず下落し、比較的消耗し易き資本を以て生産せられたものは比價を比例的に高めらるゝであらう。賃銀下落の結果は正に此の「反對」であるのである（p. 37 拙譯同書第三五頁）。

## 十二

斯くの如く「Ricardo は今生産に要する時間或は利潤率の、投下勞働量と相並んで別に貨物の價値を左右する原因たることを説明するに甚だ努めたけれども、此二者の輕重如何と云ふときは、投下勞働量の重くして、生産に要する時間の要素の輕きことを明言して憚らざるものである。」これより先き Ricardo は、單純なる勞働價値説を固持せんとする MeCulloch に對しては、價値決定原因の勞働量の一ならずして、是と生産物の市場搬出に要する時間との二なることを反覆力説せること前述の如くであるけれども、是と同時に、勞働價値説の反對者たる Malthus に對しては、勞働價値説の最も眞理に近く、賃銀即ち利潤の變動より生ずる價値の變動の甚だ輕微に過ぎざることを切言したのは注目に値する。即ち一千八百二十年十月十日、彼れは Malthus に與へた書簡中、後者の批評に答へて曰く、「貴下は『僅少の例外の外、貨物に

投ぜられたる勞働量は是等のものゝ相互交換せらるゝ比率を決すと謂ふ予の主張は根據充分ならず』と謂はれた。予も亦その嚴格に眞ならざることは認めるけれども、予の聞知する限りに於ては、その相對價値測定の尺度として最も眞理に近きものなることを言ふのである。貴下は需要供給が價値を左右すると謂はれるが前段に述べた理由に基づき、此は何事をも意味せずと思ふ。價値を左右するものは供給であつて、供給其者は比較的生産費に依て支配せられ、貨幣に現はされたる生産費は、勞働の價値と並に利潤とを意味する。今假に予の貨物と貴下の貨物と同價値なりとせば、其生産費は同一でなくてはならぬ。然るに生産費は多少の差錯を以て、投ぜられたる勞働と比例する。予の貨物も貴下の貨物も共に其價値一千磅である、故に二者は恐らく各同量の勞働の體現せられたるものであらう。此學說は、之を比較せらるゝ諸貨物の絕對價値同額測定の用に充てずして、時々相對價値上に起る變動測定の用に充つるときは、異論を受くるの餘地より尠なきものである。是等の變動は何の原因（予の意味するのは永續的原因なり）に之を歸すべきか。二原因に、而して二原因にのみ之を歸すべし。其效果重大ならざる一原因は、賃銀の騰貴若くは下落、或は予の畢竟此と同一事なりと認むる利潤の下落若しくは騰貴であつて、極めて重大なる一原因は、諸貨物生産に要せらるべき勞働量の大小是である。



此の第一の原因よりしては大なる結果の生ずることはない。利潤其者は價格中の一小部分を成すに過ぎずして、是が爲めに其の大に增減することなきを以てである。然るに第二の原因に對し三ては際限を附することが出來ぬ。諸貨物生産に要せらるゝ勞働量は變動して二倍若しくは倍することがあり得るからである」と（Letters to Malthus, pp. 175-6）。而して曩にMcCullochに對しては其價値論の章を書き改めんと欲すると謂つたその Ricardo が、Malthus に向つては「予の第一章は大に變更せらるゝことなからう。原理上に於ては全然變更せられざるべしと思ふ」（p. 177）と謂つたのは注目すべきである。今 Principles に於ても（pp. 32-3 拙譯同書第三一—三二頁）彼れは賃銀卽ち利潤の變動より生ずる價値の變動は比較的輕微なりとし、貨物の價値變動の原因を考ふるに當りて「勞働騰貴又は下落の爲めに起る結果を全然考慮せぬことは失當なるべきも、是を大に重要視することも亦同じく正しくない」と謂つたのである。「故に Principles の後章に於て、彼れが價値の上に於ける大なる變動は生産上に要せらるゝ勞働量の變動に基づくものとして立論したのはその輕忽に出でたものとはいはれない。唯だ是は價値變動の原因として重きを投下勞働量の增減に置くと云ふに止まり、彼れが是を以て唯一の原因となしたるにあらず、原理上利潤の是と相併んで價値決定の要因たることを確認したのは上に詳

述したるところに由て疑ひないのである。

## 十三

第六節に於ては不變の價値尺度なる問題が論ぜられて居る。謂へらく、若し其自體の價値不變なる標準尺度があれば、諸貨物の價値變動したる場合之に照らしてその何れの眞價値（real value）が騰貴し、何れの眞價値が下落したるかを確知することが出來よう。けれども、Ricardo の見るところを以てすれば、此の如き標準尺度は之を求めて得られぬものである。「何となれば、其自體その價値を確かめんとする諸物と同じ變動を蒙らざる貨物なるものあることがないから、即ち其生産に要する勞働の增減することなきものはないからである。」而して姑らく此原因より生ずる變動を除外するも、猶ほ標準たるべき貨物と、之に依てその價値を測定せんとする貨物との間に於て、生産上に用ゐらるゝ固定資本と流動資本との比例、固定資本の耐久力の異同、及び生産物の市場に搬出せらるゝに要する時の長短に基づき、賃銀の騰貴に由て生ずる價値の變動を免れ得ないからである。たゞ Ricardo は金の價値の變動を免れざることを充分容認しつゝ、姑らく之を不變と假定し、〔貨幣〕價格の上に於ける變動を總て貨物の變動に由



て生じたるものと見做すことを便宜とするのである（p. 45 拙譯同書第四一頁）。

此の價値の不變尺度の問題と關聯して起るのは、Ricardo の論究の目的が果して貨物の相對價値にあるか、將た絶對價値にあるかの疑問である。上述するところに依れば、Ricardo の主張するところは、貨物の交換價値又は相對價値、即ち一貨物の幾許量が他の貨物と交換せらるゝやの規則は、その各自に投ぜられたる比較的勞働量之を決すると云ふに在る。而して彼れは啻にその論ずるところが、「貨物の相對價値の變動の效果に關して、その絶對價値の效果に關せざる」ことを明言するのみならず（p. 15）、更に「予は一貨物に一千磅を要する丈けの勞働が投ぜられ、別の貨物には二千磅を要する丈けの勞働量を投ぜられてあるから、一方には一千磅の價値があり、他方には二千磅の價値がある筈だとは謂はぬ。予はただ此等貨物の相互に對する價値は一に對する二であり、而して二物は此比率を以て相交換せられるであらうと云つたのである。此學說の當否如何に取つては、此貨物の一方が、一千一百磅に賣れて、他方が二千二百磅に賣れるか、或は一方が一千五百磅に賣れて他方が三千磅に賣れるかは問ふに足らざる所である。予はたゞ是れ丈けの事を主張する。曰く、彼等の相對價値が、その生産に投ぜられた勞働相對量に由て支配せらるるであらうと（p.46 拙譯同書第四一—四二頁）と云つて居るから、

此限りに於ては其目標が貨物の相對價値に存したること疑ないやうである。然るに今價値の不變尺度を論ずるに當て、彼れは一物の生産に投ぜられたる勞働量は、他物の生産に投ぜられたる勞働量と關係なく、單獨に其物の價値を決するもの丶如くに說いて居る。念頭に置いてゐるものが物の相對價値であるならば、其自體の價値の不變なる一物を求めるといふこと其自身既に意義を成さざるに似て居る。相對價値は一貨物と他の或貨物と相對することに由て現はる丶ものであるから、一物の價値の變不變を云ふには、その如何なる貨物に對する價値なるかを附加しなければ意義を成さぬのである。所謂價値の不變は、特定の貨物に對する交換比の不變の謂か。果して然らば、所謂價値不變の貨物は他物の價値昇降を測定する尺度たることを得ぬであらう。また價値の不變は一切貨物に對する價値の不變なることを意味するとすれば、假令該貨物の生産に要する勞働量には增減なきも、他の何れかの貨物の生産費に增減あるときは、其價値は不變なること能はざるべく、又該貨物の生産に投ぜらるゝ勞働量は增減しても、他の貨物に費さるゝ勞働量にして同じく增減せば、其價値は當然不變であらう。故に Ricardo が其自體の生産に要する勞働量に增減なく、從て價値不變なる貨物を求め得ば、是に照らして他の諸貨物の眞價値の昇降を測定することを得べしと謂ふに方り、その所謂價値又は眞價値は、



一貨物が、例へば其生産に勞働の費されたと云ふが如き一定の條件を充たすことに由り、他の貨物との關係を離れて、單獨に得喪する絶對價値の義であると解すべき根據がないのではない（Liebknecht S. 34-5, 93）。更に此解釋に加勢するの觀があるのは第廿章「價値と富。其特質」に關して Ricardo の述べる說である。

Ricardo に從へば富と價値とは相背馳する。彼れは Adam Smith の所說に從ひ、人の貧富はその人生の必要品、便宜品及び娛樂物を享受するの程度如何に由て岐るゝものとなすから、彼れの所謂富裕は、使用價値の豐富なることを意味するものと解すべきである。然るに、貨物の價値は、其生産に要する勞働量と共に增減するから、技術の進歩に由りて貨物の生産容易となるに連れ、財の供給は益々豐富となると同時に、其交換價値は益々下落すると謂ふのである。たゞ此理を說くに當つて、彼れは絶對價値を念頭に置いて、一定量の勞働の投下は必ず單獨に一定額の價値を生ずると解したるものゝ如き言明をして居るのである。卽ち「價値は本質的富とは異なるものである。價値は潤澤に由て定まるものでなくて、生産の難易如何に由て定まるものだからである。製造工業に從事する一百萬人の人の勞働は常に同一の價値を産出するが必しも常に同一の富は生産せぬ。機械の發明に依り、熟練の進歩に依り、分業の改善に依

り、若しくは一層有利なる交換を行ひ得べき新市場の發見に依つて、社會の或狀態の下に於ける一百萬人の人は、別の狀態の下に於て生產し得べき富、卽ち必要品便宜品及び娛樂品の二倍又は三倍の數量を生產するかも知れぬが、併し乍ら、價値は其爲めに少しも增加せぬであらう。云々」と謂ひ（旁點は著者の附するところ(p. 320 拙譯同書第二六八頁)、又「獨り不變なる貨物は、それを生產する爲めに常に同じ辛苦と勞働との犧牲を必要とする貨物のみである」と(p. 322 拙譯同書第二七〇頁)云つたのは是れである。是はその論ずるところが「貨物の相對價値の效果に關して、その絕對價値の效果に關せず」と謂へる言明(揭出)と相容れぬこと明かである。

後に Ricardo の反對論者 Samuel Bailey は此點を指摘した。卽ち Ricardo が前に引ける如く「獨り不變なる貨物はそれを生產する爲めに常に同じ辛苦と勞働との犧牲を必要とする貨物のみである」と云つたのを評して曰く、「然れども價値が一の關係 (relation) を現すに過ぎぬものとすれば、此句は眞なることを得ぬ。吾人は問ふことを得る。何に對する關係に於て此商品は不變の價値を有すると謂ふかと。相關物は果して何であるか。それは他の有ゆる商品と比較して同價値を有すべきか。或はさうかも知れぬ。然れども其の然る所以は、その勞働の不變



量に由りて生產せらるゝことには存せぬのである。奈何となれば、假りに勞働は此場合に於て依然不變量たるも、他の商品に投ぜられた勞働量に增減があれば、一商品と爾餘一切の商品との價値關係は、Ricardo の學說に基づき直ちに變動するからである」と。(A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the Author of the Essays on the formation and publication of opinions etc., London 1825, p. 10) 彼れは又 Ricardo 及び其嘆美者 De Quincey の念頭には、一個の積極價値 (positive value) の觀念浮動せることを難じて、「兩論家の疵病は明かに價値の本質を解すること不精確なるより生ずるものである。價値を見るに二物間の關係を以てせずして、彼等は一定勞働量に依て生ずる積極的結果として之を見たやうである。」「此學說に從へば、AとBとの價値は相互に製作勞働量と等しき關係をなし、或は……製作勞働に依て決定せらるゝの故を以て、彼等はAの價値は何等他のものに關係なく、單獨に其製作勞働の量に等しと論結したものゝやうである。」と云つた(S. Bailey, op. cit., pp. 30–32)。

此批評には根據なしと謂はれない。Diehl の如きは是に對して辯じて Ricardo の眞意の誤解の餘地なく、その說明せんと欲するところは、一貨物Aが他の貨物と比較して幾許の價値を

示すかに在りて、Aが其自體幾許の價値を示し、若しくは含有するかに存せず、此點に關して異論を招くは、Ricardo の語法嚴密ならざるの罪に歸すべく、上に引用せる諸章句はたゞ二貨物の比價變動せる場合、その一方の生産に要する勞働量に增減ありて、他の一方には增減なしとせば、變動の原因は彼れにありて此れに在せざることを謂はんとするに過ぎぬと謂つて居る(a. a. O. S. 24-8)。固より Ricardo が詳論するところが相對價値にあつて、絶對價値でなかつたことは勿論であるが、併し絶對價値の觀念が全然彼れの念頭に存することなかりしと斷言するは稍々過ぎたるを覺える。上記の引用句に照らして、彼れの相對價値論の底に稍々茫漠たる一種の絶對價値論があつたものと解するのは決して不當と評すべきでない。たゞ絶對價値を論じて、一定量勞働の體現せられた貨物は、其自體單獨に一定額の價値を有すと主張せんが爲めには、先づ異種の勞働を一の標準勞働に約元して、その一定量を以て直ちに一定額の價値を生み或は含むものとなさねばならぬが、既說の如く(本書第九三—九四頁)Ricardo は輕く此問題の表面に觸れて通過したから、彼れの絶對價値論は遂に成形發展する基礎を得ずして終つたと謂ふべきである。

これが Principles 第三版に現はれた Ricardo の價値學說である。



## 十四

Principles 第三版以後其死に至るまでの Ricardo が思想に就て記すべきものは、今其書簡集に殘れる一方に於ては、依然投下勞働を以て嚴格なる價値尺度となす McCulloch (及び Mill) と、他方に於ては新たに支配せらるゝ勞働を以て確實の尺度となすに至つた Malthus とに對する論爭である。此論爭に於ける Ricardo の態度は、著しく否定的である。彼れは精確なる價値尺度の求め得べからざることを認め、自說の正しきことを主張するよりも、論敵の說の更に一層謬れることを力說したのである。

James Mill は Ricardo が投下勞働量と相併んで生産に要する時間の同じく價値決定の原因たることを明認したのに贊同せず、その Principles 第三版と踵を接して出でた Elements of Political Economy, 1821 に於ては、嚴格なる勞働價値説を主張して僅かに「等量の勞働を秤量するに方つては其難易及び熟練の程度の斟酌せらるべきこと勿論なる」を認めた以外には、此原則に對する例外を容認せぬ。資本は畢竟「保藏せられたる勞働」(hoarded labour) に過ぎずして、其自體前の勞働の結果にして、直接勞働援助の具たるか、或はその之に投ぜらるゝ主

體なるか、孰れかに外ならぬと謂ひ、「されば勞働量は究局貨物相互の交換の比例を決定することは證據最も明白なるが如くである」と斷定したのである(Hollander, pp. 110–1)。

McCulloch に對しては Ricardo が價値を決定するものゝ決して投下勞働量のみでないことを反覆力說したること既記の如くなるに拘らず、前者は遂に其師と說を同うするに至らずして、二者間には見解の相違が依然として存したのである。卽ち千八百二十二年の始め McCulloch が人を以て其講義の原稿を示したるに對し、Ricardo は答へて、「貴下は諸貨物の價値を測るに、其生產に要せらるゝ勞働量を以てすること少しく予に過ぎてゐる。貴下は何等の例外又は制限を認めざるが如くであるが、予は常に貨物相對價値上に於ける變動の或者は、之を其生產に必要なる勞働量以外の原因に歸し得べきことを容認するを辭せぬものである。假に百個の煉瓦の、高價なる機械を用ゐて生產せられたモスリンの一定量に對する相對價値が變動したとせば、こは二原因の何れかに之を歸することを得よう。二貨物の何れかを生產する爲めに要せらるべき勞働に增減あるか、或は賃銀の一般的に騰貴若しくは下落したるか何れかであらう。第一の事が變動の原因たることに關しては、貴下と予とは全然同意なるも、貴下は煉瓦とモスリンとには各々同量の勞働投ぜらるゝに拘らず、一に勞働の價値の騰落の爲めに、二者の相對



價値の變動し得べきことを容認せられぬやうである。而かも予を以て見れば、此事實は動かすべからざるものゝ如くである。予は此の第二の原因に對して重きを置くこと、Malthus 氏及び其他諸氏の如くではないが、亦全然目を之に對して閉づるを得ぬ」と云つた (Letters to MacCulloch, pp. 131–2)。

彼れは McCulloch の說を以てしては葡萄酒の久しく貯藏せられ、槲樹の植付けられて後年を經て其價値を增すの理を闡明すること能はずとなすものである。卽ち千八百二十三年八月八日付の書簡に於て、「予は三四年間窖中に貯藏せられたる葡萄酒、若しくは當初勞働上に於ては恐らく二志をも費さずして而かも百磅の價値あるに至つた槲樹の難問に克つこと能はず」と云つた。McCulloch の說明は、「三年間貯藏せられたる一樽の葡萄酒は、一日貯藏せられたる葡萄酒よりも、多くの勞働の之に費さるゝことなしと雖も、此の時間に基づく價値の增加は、同額の資本が現に勞働の雇傭に充てられたる場合、同時間內に行ふべき蓄積に由て之を算定しなくてはならぬ、又二百年間生長せる槲樹に現に費されたる勞働量は極めて僅少なりと雖も、其價値は投下せられたる當初の勞働が同時間內に生ずべき資本蓄積に由て之を算定せざるべからずと謂ふにあるのである(Letters to Malthus p. 222)。然し Ricardo は固より此說明に滿足せずし

て曰ふ、「吾人は何れも……二者の複利法に由る年々の累積が終に一百磅を生ずべく、又利潤の均一を維持する爲め爾かせざるべからざるを認めるけれども、予は此蓄積利潤を呼ぶに勞働の名稱を以てし、又斯くして一百磅の價値ある貨物を之に投ぜられたる勞働量に比例して價値ありと云ふことの適否を疑ふものである。始めに勞働の爲め二志を費し、後に百磅の價値を有するに至れる此樹には、斷じて其價値二志以上の勞働は投ぜられてゐないのである。――一人の勞働に依て五十二週間内に生産せられたる一貨物は、五十二人に依て一週間内に生産せられたる別の貨物よりも價値が多く、又價値が多くなくてはならぬ。貴下は曰はれる、然り、使用五十二週間に亘れる資本は、使用一週間に亘る資本よりも勞働を雇傭すること多きが故にと。けれども是等二貨物には、事實上等量の勞働が存するに過ぎないのである。……問題は一貨物を不變ならしむるに必要なる諸事情は何であるかと云ふことである。蓋しこれ當に吾等の尺度の性質たるべきものであるからである。是れ一切の價値尺度がそれに依て驗せらるべき試金石であつて、予は貴下が提議する何れの尺度をも是に照らして之を驗せねばならぬ。貴下にして『予の知れる一切貨物の中、彼の一定時間勞働の之に投ぜられ、且つ常に勞働の同一量を要するものは、最好の價値尺度なり』と謂はゞ予は貴下に同意するであらう。乍併貴下は之を全く批難の



餘地なき尺度として之を提議してはならぬ。若し爾かすれば、Malthus は、予が彼れに對して用ゐる論法を以て貴下に酬ゐ、『若し君の貨物にして日傭勞働に依て海濱上に採取せる予の小海老、若しくは金に對する好尺度たらば、何ぞ予の尺度(斯くして採取せる小海老又は金)の君が貨物に對する好尺度たらざることあらん』と謂ふであらう。……吾人が麻布一片の長さを測るや、その長さのみを測り、而して之を行ふに、不變の長さを有する一貨物に依てする。然るに價値は有りと有ゆる比例に混合せる賃銀と利潤との二要素の複合より成れるを以て、貴下の尺度が、測定せらるゝ貨物と賃銀利潤の比例に於て精密に一致するにあらずんば、之を精確に測定せんとするも得ないのである。賃銀のみを含んで利潤を含まないのは Malthus の尺度であつて、これは勞働と利潤とを共に含める諸貨物に對しては精確の尺度たらぬのである。……若し勞働のみに依て生産せらるゝ貨物が最多數ならば、予は Malthus の尺度を取るに躊躇せぬけれども、事實は反對であつて、大多數の貨物は一定時間に亘り、勞働と資本との結合に依て生産せられるのであるから、予は予の撰擇せるところに改むべきものを有せぬ。予は之を中庸と認める。Malthus の尺度は權衡の一極端にあり。老槲樹は他の極端にあるものである。一方に於ては勞働の外何物も存せず、他方に於ては殆ど何等の勞働なくして利潤よりせる資本の蓄

積あるのみであるから、二者は共に價値の尺度たるに適せぬものである」と。Ricardo は究局「數學的精確」を有する價値尺度は之を求め得べからず、予の見るところを以てすれば、吾人はたゞ不完全なる尺度中に於て撰擇をなし得るに過ぎぬ。本來完全なる尺度なるもの存せぬから、吾人は斯るものを求め得ぬやうである」といふ結論に到達したのである（Letters to McCulloch, pp. 174, 176, 177)。

## 十五

Malthus に對する論爭の究竟到達するところも亦同じ否定的結論である。

Malthus はこれより先き其 Principles of Political Economy に於ては穀物と勞働との價値の平均を價値の尺度ならしむべしとの說を立て(Sect. VII)、Ricardoの容認せぬところであつたが、後に至つて Adam Smith と同じく「支配せらるゝ勞働」が價値の好適尺度なることを認むるに至り、Ricardo の死後著はされた Definitions in Political Economy 1827 中に「……一貨物が支配すべき勞働、若しくは其爲めに買手が敢て投ずることを辭せざる勞働は、其の上に作用する有ゆる價値原因の——貨物の交換に際し人心上に作用する一切諸多の考慮の結果を測



定する」(p. 221)。「一地一時代に於ける一貨物の自然價値の尺度は、其地其時代に於てその自然普通の狀態にあるとき其貨物と交換せらるべき勞働量である」(p. 243)と謂ひ、又尺度たるべき標準勞働を最も品質低き普通農業上の日傭勞働に求めた(p. 257)が、既に Ricardo の生前に於ても The Measure of Value Stated and Illustrated, with an Application of it to the Alterations in the Value of the English Currency since 1790, 1823 に於て同主旨の說を唱へ、物の相對價値は「貨物に投ぜられたる蓄積勞働及び直接勞働と、斯る前拂(advance)に對する普通利潤とを加へたるもの」の量額に由て測定せられるけれども、此兩者の合計は「必然彼等(貨物)が支配すべき勞働量と同一ならざるを得ぬ」と謂つた(pp. 14, 16)。

Ricardo は此書を讀んだ後 McCulloch に告げて Malthus の論は「終始誤謬なるが如し」と謂ひ(Letters to McCulloch p. 151)、Malthus 其人に與へた私信に於ても毫も其意見を藏むことをしなかつた。千八百二十三年四月廿九日附のものを以て始まり、同八月卅一日附を以て終る六通の長文書簡は、悉く Malthus が提議せる價値尺度の自說よりも更に一層取るべからざる所以を論ずるものである。而して支配せらるゝ勞働の價値尺度として取るべからざるは、其自體本來尺度の要件たるべき不變の性質を欠いてゐるからである。謂へらく、假に疫病流行の爲

め人口減少して、舊の四分三に下らば、他の一切貨物に比較せられた勞働の價値は騰貴するであらう。然るに、Malthus は、勞働の供給の外に何等の變動がないに拘らず、之を勞働の騰貴と云はずして、諸貨物の價値下落と呼ばんとする。これ何等の進歩と稱すからざる說であると (Letters to H. Trower, p. 210)。

Malthus に與へたる書簡中に Ricardo は別の一例を設けて同一の理を說明する。謂へらく、二國があつて其國民の勤勉及び熟練の程度は同一なるも、其生活程度異なりて、一方は馬鈴薯一方は小麥を常食とするとせば、利潤は一方の國に於て、他方の國に於けるよりも高からう。貴下は又苟も勞働以外のものを價値尺度となさば貨幣が二國に於て略ぼ同價値なることを容認すべく、更に又二國間に廣く貿易の行はるゝことをも承認するであらう。今「假りに一人があつて馬鈴薯國より一百磅を値する葡萄酒一樽の小麥國に於ては百十磅に賣らるべきものを輸出したりとせんに、貴下はたゞ單に一層多量の勞働を支配し得たりと云ふ理由を以て、葡萄酒は輸出國に於て高價なりと云ふであらう。葡萄酒は小麥國に於て啻に、より多額の貨幣と交換せらるゝのみならず、より多量の他の一切貨物と交換せらるゝに拘らず、貴下は敢て斯く謂ふであらう。予は此事が進歩と認むべからざる新說なることを主張せんとするものである。これ一切



の慣用概念を混同し、吾人に課するに一新言語を學ぶ必要を以てするのであらう (p. 216)。

又曰く「貴下の予との相違は左の如くである。貴下は一物は大なる勞働量を支配すべきが故に高價なりと謂ひ、予は其生產に大なる勞働量投下せられたる時にのみ高價なりと謂ふこと是れである。一貨物は印度に於ては二十日の勞働を以て生產せらるべく、而して三十日の勞働を支配すべし、英吉利に於てはそは二十五日の勞働に依て生產せられ、而して僅かに二十九日の勞働を支配することあらう。貴下の謂ふところに從へば、此貨物は印度の方が貴く、予に從へば英吉利の方が貴いのである。此處に予の一般的價値尺度としての貴下の尺度に對する批難が存する。一貨物に投ぜらるゝ勞働量は增加しても、貴下の尺度に於ては下落することあるべきを以てである。それはより少なき勞働量と交換せられ得るのである。こは貴下の尺度を正當にその測定せんことを期する客體にのみ適用すれば起り得べからざる事である。例へば、海濱に於ける小海老の生產又は金の拾取により多くの勞働を投じ、而かも猶ほ以前よりも少なき勞働に對して之を賣るといふことが果してあり得べきか。勿論ない。然れども一片の羅紗を造るに以前よりも多くの勞働を投じて、而かも猶ほ羅紗片の以前よりも少なき勞働と交換せらるゝことは充分あり得べきことである。これ予の認めて貴下の尺度を採用することを非とする決定的

反對論據となすものである」と(pp. 233-4)。

Ricardo は頻りに價値尺度に關する自說の Malthus の說に優れることを反覆縷說するけれども、彼れは、決して其自家の價値尺度が完全無缺のものなることを謂ふのではない、其態度は甚だ謙虛であつて、Malthus の謙虛ならざるを責むる語氣の嚴しきと好對照をなして居る。卽ち彼れは或はその從來爲し來れるところは、畢竟完全無缺なる價値尺度なるものを發見するの極端に困難なる事を漸次に覺れることに外ならずと謂ひ(p. 230)、又「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精確なる價値尺度を與へたりと主張することにある。予は此權利主張に反對する。予は成就し、貴下は失敗せりと云ふのではなくて、貴下も予も共に失敗せること、而して一人の爲し得るところは、大多數の場合に適用し得べく、多くの場合に於て甚しく正確より外るゝことなき價値尺度を發見するを以て盡くること是れである。予の自ら得たりと嘗て揚言し、今現に揚言するところは是を以て盡きる。貴下にして是よりも大なる權利主張を爲すことなからんか、予は一層謙遜であらう。たゞ予は、貴下がその志せる大目的を成就したりと揚言するのを容認し得ないのである。君に答ふるに方つて、予は實に君がそれに依てのみ破らるべしと謂へる武器を用ゐつゝあるものである。而して予は告白する、此武器は貴下の尺度に對し





ても予の尺度に對しても等しく適用せらるべきものである。予が謂ふところは、絕對的價値の尺度なるものはないとのいふことの議論卽ち是である。此の如きものは存在せぬ。貴下の尺度も予の尺度も貨物生產に要せらるゝ勞働の多少より生ずる變動は之を測定するけれども、困難は勞働と利潤とに歸屬する比例の異同に關して存する。是等比例の變動は、諸物の相對價値を、之に包含せらるゝ勞働及び利潤の大小に應じて變更する。而して是等の變動に對しては未だ嘗て何等の價値尺度存せざりき、而して予はその遂に存せざるべきを信ずる」と謂つたのである(p. 237)。これが其病死(千八百廿三年九月十一日)に先だつこと一月(同八月十五日)の事である。

以上述ぶるが如く、Ricardo は頻りに價値論確立の困難を說き、自他の學說の共に完全に遠きを嘆ずるに止まつて、何物をも新たに積極的に主張しなかつたから、此等の書簡集は以て彼れの價値學說將來の發展方向を豫測する資料とはならぬ。吾人は Ricardo の平生より推して長く價値學說を此の如き不滿足の狀態に放置するは、恐らく其の甘んぜぬところであつたらうと云ひ得るに過ぎぬ。進んで彼れが其完成を何れの方向に求めたるべきかを推測するのは、根據なき一の好事的詮索に終るものであらう。

## 十六

Ricardo は逝いた。其晩年の數個月間に於て殊に Ricardo を惱ました價値尺度の問題は、彼れの死後猶ほ暫らく Malthus, De Quincey, Bailey 等の論究するところとなつた。Malthus は既掲の書 Definitions in Political Economy 中に於て、稍々詳かに支配せらるゝ勞働量を價値の尺度となすべきの理由を述べる。

Malthus は物の交換價値を以て其一般的購買力なりとすの定義に嫌らざるものであるが、姑らく此定義を承認するも、猶ほ勞働は一般貨物の最好代表物であるから、最もよく此購買力を測定し得るものであると云ふ。謂へらく、一貨物の交換價値を其一般的購買力なりと定義するも、購買せらるべき貨物數には際限なきを以て、之を實際に適用せんと欲せば「最も好く一般大數の平均を代表する一個物、若しくは一團の物を指定」せねばならぬ。然るに、生産物の一般大數の平均を最も好く代表するものが勞働であることは瞬時も之を否定すべきでない。苟も社會の認めて富となす貨物にして第一に勞働と交換せられざるものはあることなく、又大に之と交換せられざる貨物は甚だ稀である。而して此は勞働及び勞働を代表する流通用具以外、他

欠

MISSING

English Political Economy, 1904 p. 98)。故に Ricardo の價値學說は價値の原因說明として のみ後世經濟學に大影響を有するものである。而して後世經濟學者は Ricardo の價値學說に許すに果して如何なる待遇を以てしたか。又今日の理論を以てすれば Ricardo の學說には果して幾許の取るべきものと捨つべきものとを含んでゐるか。

## 十八

Ricardo に從へば、貨物の市場價格又は現實價格は、時々の需要供給に由つて左右されるけれども、自由競爭の行はるゝ限り、貨物の市場價格は絕えず其自然價格に一致せんとするものであつて、久しきに亘りては其上下に離反することを得ぬ。蓋しその然る所以は利潤率平均の一事あるが爲めであつて、Ricardo の所見に從へば、一貨物の市價其自然價格以上に昇るときは、其生產者は普通率以上の利潤を收めるから、資本は他の比較的不利なる業務を去つて、此の特に有利なる生產業に集中し來り、貨物の供給を增加せしめて其價格を下降せしむべく、また市價が自然價格以下に下降するときは、之と反對の作用が行はれて、究局此二者を一致せしめずんば已まぬからである。是を以て觀れば Ricardo が所謂貨物の自然價格は、之を生產せん

が爲め費されたる資本額と、放下資本に對する平均利潤との加算に他ならぬ。而して費された資本は、之を分解すれば直接に支出せられた賃銀額、及び生産用具生産の爲め間接に支出せられたる賃銀と、之に對する利潤との二者に歸着する。Ricardo が別に一貨物の生産費と稱するものも亦、此貨物生産の爲めに投ぜられた賃銀と利潤との總和を指すものである。(Principles p. 46 note〔拙譯同書第四二頁註〕Letters to Malthus p. 176) 故に貨物の市場價格は、また其生産費の周圍に旋廻して、結局此に歸着せんとするものなりと謂つても Ricardo の眞意に反することはない筈である。(「價値を左右するものは供給にして、供給其者は比較的生産費に依て支配せられ、貨幣に現されたる生産費は、勞働の價値と並に利潤とを意味する。今假に予の貨物と貴下の貨物と同價値なりとせば、其生産費は同一でなくてはならぬ。」Letters to Malthus p. 176) 而して右に述べた貨物の自然價格は卽ち其交換價値に外ならぬものであつて、而して此價値は生産上に要する勞働の相對量に由て決せらるゝものであると謂ふ。

此說明は、暗默の間同額の資本は必ず同量の勞働を代表(或は雇傭)するといふ推定を前提とするものであつて、此前提にして正しきを得ば、貨物の市場價格は假令一時其價値の上下に離隔することがあつても、利潤率平均の作用に由りて早晚必ず是に復歸すべき道理であること勿



論なるは、既に述べた通りである(本書第一一三頁)。然るに、此推定の事實ならんが爲めには二個の條件の備はることを必要とする。第一、賃銀額の正確に投下勞働量を反映すること、第二、資本家の支出資本中に於て賃銀の占むる割合の同一なること是である。第一の條件に就てはRicardo の論ずるところは、周到明確なるを得ぬけれども、彼れは略ぼ此條件の實現せらるべきことを信じ、賃銀額の異同は投下勞働量に相應せんとするの傾あることを認めたるものゝ如くであるが、第二の條件の事實に於て備はり難いことは Ricardo 自ら明かに之を認めた。卽ち其 Principles 第一章の後半に於て、其價値說に修正を加へ、又單純なる勞働價値說を固執せる McCulloch に對して、價値を決定する原因の決して一ならずして、生産上に費さるゝ勞働量と、始め勞働の投下せられてより生産物の完成販賣せらるゝに至る迄の時間との二なることを反覆力說したのは此に由るものである。

今 Ricardo 以後凡そ Jevons 現はるゝに至るまで、英吉利經濟學の主流をなせる學者の價値論は、概ね Ricardo を基礎として發足し、或點に於て之を擴充し、他の點に於て之に精鍊を加へたに外ならぬものである。而して此の擴充精鍊は、主として上記二條件の上に就て行はれ投下勞働量と價値との關係を漸く稀薄ならしむる資本家生産費說は、結果として到達せられた

結論である。然れども Ricardo 其人が貨物の交換價値は必要勞働量之を決すと謂つたのも、其論據は、貨物間の交換比率は貨物の相對的生産費に由て決せられ、而して生産費は勞働量に比例すとの推定に基づけること右述の如くなるを以て、生産費と勞働量とが比例を保たざることが明かとなれる上は、純粋なる勞働價値説の維持すべからざることは充分明白であつて、Ricardo 自身も亦決して之を認むるに吝ならざりし事既述の如くであるから、後の生産費説は、Ricardo 自ら端緒を開ける勞働價値説に對する修正の、更に數歩を進めた當然の成果と認むべきものであらう。Ricardo 以後 J. S. Mill 以前の理論家として指を先づ屈すべき Nassau W. Senior が、生産費として、勞働と共に節欲(abstinence)を擧げたのは、Ricardo が價値決定の原因として、勞働と共に生産物の完成販賣に至る迄の時間を擧げたのと脈絡相通ずるものであつて、決して Ricardo 流の價値學説と相容れ難きものとは評すべきではないのである。

## 十九

Senior は富なる語を解して、(一)利用を有し、(二)供給に制限あり、而して(三)賣買、讓渡、貸借し得る (transferable) もの是なりと謂ひ、而して此等の要件を備ふることは、價値を



有すと云ふと同義であると云つた(Political Economy, 3d. ed. 1854)。

此三要件中 Senior は最も重きを供給の制限に置き(ibid., pp. 11-13)、勞働の投下が物をして價値あらしむる如きも、勞働の投下を必要とすることは、即ち供給の制限を意味するが故に外ならず、從て供給制限の要件備はる限り、勞働の投下は之なきも妨げずとなし、更に勞働の投下に由らず、供給の制限に由て價値を有する貨物の富の重なる部分を占むることを認めて、Ricrado 價値學説の適用範圍を狹めた。即ち曰く「詢に利用あるところに於ては、生産に必要なる勞働の附加は必ず價値を成立せしめる。如何となれば、勞働の供給には制限があるから、從て其供給に之を必要とする物體は、此必要其者に依て供給を制限せらるゝからである。然れども供給を制限する他の如何なる原因も、一貨物の價値の有效原因たることに於ては、其生産に對する勞働の必要と毫も擇ぶところはない。而して事實上、若し人の使用する一切貨物が、何等人間勞働の干渉なくして、自然に由て供給せられ、而かも正に現在と同一量に於て供給せらるべしとせば、その或は價値なきに至り、或は現在と異なる比率に於て相交換せらるべしと想像すべき理由は存しないのである。Ricardo 氏に對する答への第一は、富の諸貨物にして、其の價値の主要部分を各自その現實生産に投ぜられたる勞働に負ふ事なきものは、その重要な

らざる小部分を成すものではなくて、實に富の要部を形成するものなること、又第二に供給の制限は、勞働其者の價値に缺く可からざるものであるから、價値の據て立つ條件として、勞働を取つて供給の制限を排するのは、啻に一般的原因に代ふるに部分的原因を以てする所以なるのみならず、明かに、指定原因の力源たる眞原因其者を排する所以であること是である」と(ibid., p, 24)。

斯の如く價値は供給の制限の支配するところたりと雖も、人爲に由て供給を增減すること能はざるものは措き、規則正しく、或は略ぼ規則正しく之を增減し得るものにあつては、供給は生産費に由つて制限せられ、而して彼の所謂生産費は生産に必要なる勞働と節欲との合計を以て成ること前述の如くである(ibid., p. 101)。節欲なる新術語は彼れに從へば「人のその支配し得るものゝ不生産的使用を節し、若しくは故らに直接の結果の生産を捨てゝ、遠き將來の結果の生産を擇ぶの行爲」を意味し、而して此行爲は勞働及び自然要因以外の生産要因にして、資本存在の爲めに其協力を必要とし、其の利潤に於けるは猶ほ勞働の賃銀に於けると等しきものであると謂ふ(pp. 58, 59, 89)。斯の如く節欲と、之に對する報償たる利潤とを區別し、之に照らして Malthus, Torrens 其他前人の生産費の定義に對して彼れの下せる批評(pp. 97—



101)には、頗る傾聽すべきものがある。卽ち勞働と共に利潤を以て生産費構成要素の一となせる Malthus に就ては曰く、「節欲若しくは之と同義の語を缺きたる事は、Malthus 氏をして言語の不精確に陷らしめた。氏は單純なる勞働の外猶ほ或物の生産に缺く可からざることを感知したるものゝ如くである。氏は單純なる勞働のみが不毛の荒地を化して價値ある森林たらしめざるべきこと、樹木栽培者には幼樹を植付け、且つ之を保護する勞働の外、之に加ふるに遠き將來の結果の生産に其勞働を向くる附加犧牲あること、累代の所有者は幼樹の成長を忍び待つことに依りて、其後繼者の利益の爲めに自己の利益を犧牲にせることを感知したのである。氏は是等の犧牲が森林生産費の一部なることを感知したものゝ如くである。而かも之を謂ひ現はすべき術語を有せざるより、之に命ずるに是に對する報償の名を以てしたのである。氏が利潤を以て生産費の一部となせるとき、氏は利潤を意味せずして、彼の利潤を以て酬ひらるゝ行爲を意味したものゝやうである。これ正に彼の賃銀を生産費の一部と稱して、實は結果である所の賃銀を意味せずして、賃銀を其報酬とする所の勞働を意味するものが犯せると同樣の不精確である」と。

## 二十

右の如き意味に解せられた生産費は、貨物交換價値決定の上に果して如何なる作用を發揮するか。Senior に從へば、平等自由なる競爭の行はるゝところに於ては、貨物の價格は其生産費に一致せんとするものである。而して此點に關する Senior の理論の結構は Ricardo の夫れと稍々趣を異にして居る。卽ち彼れは生産費を、賣手の側に於ける生産費と、買手の側に於ける生産費とに分ち、前者は價格の最低限、後者はその最高限を定むるものなれども、完全なる競爭の行はるゝところに於ては、此兩極限は同一に歸するものであるとなし、貨物の價格若し之を超過するときは其供給增加し、之に及ばざるときは供給減少するを以て、生産費は常に價格動搖の中心たるものだと謂つたのである。原文を引用すれば左の如くである。曰く、「……生産費……は、之を生産者又は賣手の側に於ける生産費と、消費者又は買手の側に於ける生産費とに分たねばならぬ。第一は勿論一定種の貨物、又は勤勞を提供して賣らんとするものが、能くその生産を繼續せんが爲め、忍ばねばならぬ勞働と飾欲との量であつて、第二は一定貨物又は勤勞の買手たらんとする人々が、若し之を買はずして、彼等自ら、或は其中の或者が自己及



び爾餘の者の爲めに、之を生産すべき場合に、其の忍ばねばならぬであらう勞働と飾欲との量是である。第一は價格の最低限に等しく、第二は其最高限に等しい。何となれば、一方に於ては、何人も賣買がその生産に費すところより低いものを、販賣の目的を以て引續き生産することなかるべく、又他方に於て、何人も彼等自ら、或は彼等の或者が自己及び爾餘の者の爲めに、更に少なき失費を以て生産し得べきものを、引續き購入することなかるべきを以てである。彼の平等なる競爭の支配を受け、何人も均等の便益を以て生産し得べき諸貨物、或は更に的確に謂へば、貨物の部分又は屬性の價値に就ては、その生産者に取りての生産費と消費者に取りての生産費とは同一である。故に是等のものゝ價格は、其生産を繼續する爲め必要なる勞働と飾欲との總量を代表する。其價格にして、此よりも下降せんか、其生産に携はれるものゝ賃銀又は利潤は、生産の繼續せられんが爲めには之を忍ばねばならぬ勞働及び飾欲の平均報酬以下に下降せざるを得ぬ。從つて生産は早晩中止若しくは短縮せられ、遂に生産物價値の、供給減退の爲め引上げらるゝに及んで已むであらう。又價格にして其生産費以上に騰貴せんか、生産者は必ず其犧牲に對する平均報酬以上のものを受くべく、此事の發見せらるゝや否や、資本と勞働とは、此に異常の利益を生ずるものと假定せらるゝ用途に向つて流集し、前に買手たり、若

しくは買手の爲めに代れる人々は、自ら生産者に轉じて、遂に供給の增加が價格と生産費とを平均せしむるに至るであらう」と(p. 101)。

## 二十一

斯の如く完全なる競爭行はるゝときは、價格、卽ち價値は(Senior にありては價値の貨幣を以て現されたるものを價格とす)生産費に一致せんとするものではあるが、此生産費は勞働と節欲とより成り、而して生産費中にあつて勞働と節欲との占める比例の必しも一ならざることは Senior の明かに認むるところであるから、(Torrens は「同額の資本の用ゐらるゝところに於て、若し一方が他方より夙く市場に販出せらるゝときは、生産物の價値の異なることあるべきを認むと雖も、彼れは此差違の基づくところの原理を示さぬ。此原理は双方共に投ぜられたる勞働は同一なるも、一方の場合に於ては他方よりも多くの節欲を必要とすること是である」pp. 100–101)。價値が勞働量と比例するの約束がないことは明白である。然るに更に Senior は Ricardo の明かに否認せる地代 (rent) の價格中に入ることを認むることに由りて、勞働量と價値との關係を一層稀薄ならしめる。Adam Smith が地代を價格構成要素の一に數へ、



Malthus が收益の遲速、製造上に使用せらるゝ外國貨物の數量及び租稅賦課と相並んで、地代の支拂が、投下勞働量のみに由りて價値の支配せらるゝを妨ぐる要素であることを認めたのは、既に述べた通りである。(本書第七八頁—一一〇頁參照)

Senior の論は是等諸家の說を繼承するものであるが、彼れは更に其獨特の理由に由りて、rent の概念を土地地代以外のものに擴張することを試み、勞働者の收むる賃銀の中にも、生産上の犧牲に比例せざる rent の要素含まるゝことあり、從つて賃銀と投下勞働量との比例よりして、勞働量と價値との關係に新なる罅隙の生じ得べきことを認めたのである。Senior も始めに於ては、rent の語をば慣用の如く、占有せられたる土地の地味の肥沃、または位置の便利より生ずる特別收益の意義に解したけれども(p. 90)更に進んで此語を生産上に犧牲を忍ぶことなくして生じ、或は忍べる犧牲の比例以上に生ずる一切の收益に適用する。謂へらく「既定の區分に從ひて、一切の生産せられたるものは、分ちて地代、利潤及び賃銀とせらるべしとし、……而して賃銀及び利潤は、之を特殊の犧牲に對する報酬と認むべしとせば、……地代なる語の下には、何等の犧牲なくして、收得せるもの、或は別言すれば、その犧牲に對する報酬以上に收得せるもの、自然又は運命が、或は何等其收得者の努力を待たず、或は勞働の發揮又

は資本の使用に對する平均報酬以上に與ふるもの一切を包含せしめねばならぬことが明白である」と(pp. 91-2)。

されば Senior の所謂地代は、本來の地代の外、人の任意に企及すべからざる知識、才能、特權等より生ずる一切の特別收益を包含する。是に由て觀るときは、通常賃銀として勞働者が受くるところの所得には、眞に勞働に對する報酬の外、更に別の要素が含まるゝものと云はねばならぬ。故に曰く、「然らば異常の才能ある勞働者の異常なる報酬は、之を地代と名づくべきか、又は賃銀と名づくべきであるか。その天惠より生ずる限りに於ては、そは地代なるが如くである。然れどもそは勞働に服するの條件の下に於てのみ收得される。此限りに於ては、そは賃銀なるが如くである。そは勞働者のみ之を收得することを得る地代、又は自然要因の所有者のみ之を收得し得る賃銀……と稱することを得るであらう。然れども、勞働は既に普通賃銀を以て酬いられてあるから、そは明かに一の餘剩であつて而して、此餘剩は天然自生の恩惠であるから、吾人は之を地代と稱することを最も便宜と思惟したのである』と(pp. 129-130)。而して Senior の所見を以てすれば、勞働者の受くる報酬にして、此の地代の要素を含むことなき場合は却つて稀であるから、賃銀額が投下勞働量を代表せざることは、卽ち事物の通則たるもの、如くである。故に曰く、「異常なる體力心力が異常なる報酬を受けて居らぬ業務は尠ない。啻に一層良好に働くのみならず、また一層容易に働くことは才能の特權である。故に一般に、第一流職人の生産せる貨物又は勤勞は、平均價格以上で賣れるに拘らず、其の費用は平均勞働量以下なることを見るであらう」と(p.129)。

右に述ぶるところを概括すれば、Senior は價値を構成するものを賃銀、利潤、地代の三者となし、而して究局賃銀其者も亦必しも投下勞働量と相應するものにあらざることを認めたのである。Ricardo 其人既に純粹なる勞働價値說を奉ずる者ではないが、Senior は上述の諸制限に由つて Ricardo よりも是に遠ざかること更に數歩なりしものと謂はねばならぬ。

## 二十二

J. S. Mill に至つては、Ricardo の開拓した本道に沿ふて歩む事 Senior よりも遙かに忠實であつたが、猶ほ且つその究局到達した結論は Ricardo の意見よりも勞働價値說と隔たること の明かに相遠きものである。今その述ぶるところの大要を記せんか(以下 Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917 に據りて引用す)、一物の價値とは、之と交

換せらるゝ他の或物、若しくは一般の物の數量の義であつて、もと相對的の語であるから、一切の物の價値が悉く同時に騰貴若しくは下落することはあるべき筈がない。或物の價値の騰貴は、當然他の物の價値の下落を意味し、或物の價値下落は、當然他の物の價値騰貴を意味する。

一物をして價値あらしめんが爲めには、二條件の備はることを要する。利用あること、及び其獲得上に困難（difficulty in attainment）あることが是である。獲得の困難の上より見て、Mill は貨物を三種に分つた。その供給量の絶對的に限定せらるゝもの、勞働と出費とによつて、際限なく生産することを得るもの、及び供給量は生産によつて增加することを得るも、此の生産增加の爲めに投ずる勞働及び出費は、比例以上に多きを要するもの是である。供給量の增加すべからざる貨物にありては、其價値は需要供給の決するところである（pp. 448, 478）。無際限に增加し得べき貨物にあつても、其一時價値又は市場價値（temporary or market value）は、同じく需要供給が之を左右するけれども、此外に物の永續價値自然價値又は自然價格（permanent, natural value or natural price）なるものがあつて、市場價値を支配し、後者は常に前者に一致せんとして之を中心として動搖する（pp. 456, 478 etc.）。此自然價格を定めるものは、貨物の生産費と普通利潤とである。而して貨物の市場價格をして、久しきに亘りて其自





然價格より離反すること能はざらしむるものは、Ricardo の場合に於けると同じく、利潤率の平均であつて、「若し一貨物の價値にして、其生産費を償ふに啻に普通の利潤率を以てするに止まらず、更に之より高き利潤率を以てせんか、此の非常利益に參加せんが爲め、資本は突進し來り、此貨物の供給を增すとに由りて其價値を下落せしめる。」「されば通則として、諸貨物は、各生産者をして生産費と普通利潤とを償ふことを得しむるが如き價値に於て、換言すれば、總ての生産者に、其支出に對して同一利潤を與ふるが如き價値に於て、相交換せらるゝの傾がある。然れども支出卽ち生産費の相等しき場合に、利潤をして相等しからしめんが爲めには、諸貨物は平均上其生産費の比に於て相交換せられざるべからず、其生産費の同一なる諸物は同價値でなくてはならないのである」（p. 452）。但し後段に於て（p. 479）Mill は、生産費を構成する不變普遍的要素として賃銀と利潤とを擧げてゐるから、右の如く生産費及び利潤と云ふのは蛇足なるに似てゐるが、その何れに從ふも利潤が價値を決定する一因素たるとは爭ふことが出來ぬ。

玆に吾人の知らんと欲するのは、右述の如き生産費又は自然價格を決定する上に於て、生産上に費さるゝ勞働量は、果して如何なる位置を占めるかの一事是である。Mill の云ふところに從へば、生産費の主要々素たるものは勞働量であつて、賃銀はその業務に由り異同ある限り

に於ての外生産要素を構成するものでない(p. xli)。蓋し價値は前述の如く相對的の語であるから、均しく諸貨物の生産要素に影響するものは、その相互間の價値を變動せしむることがない。故に一般賃銀率の高下は、諸貨物の價値を動かすことがない。たゞ一業務に於ける賃銀が他の業務に於けるよりも高く、或はその一業務に於て永續的に騰貴若しくは下落して、而して他の業務に於ては此事なき場合に於て、此不平等は價値に影響すると謂ふものである。

然るに前記の如く、Mill が價値は生産費之を決すと謂ふは、若し貨物の市場價値より資本の出費を控除せる餘剰額の該出費額に對する比率が、平均利潤率以上に昇るときは、其生産者は普通以上の利益を收めるから、資本は他の産業を去りて、特に有利なる此の産業に集中し來り、其生産額を增加せしめて市場價値を下落せしめ、市場價値が生産費以下にあるときは、反對の理に由つて生産額減少し、從つて之を騰貴せしめずんば已まざるべきを認めしに由るものであるから、玆に所謂生産費は、直接に生産者の出費項目中に現はるゝものでなくてはならぬ。(Mill は資本家が利潤の爲めに行ふ生産を論の對象となし、勞働者自ら生計の爲めに行ふ生産は、姑らく之を顧みないのである p. 480)。今勞働に關してこれを謂へば、生産上に費さるゝ勞働量は、ただその資本家の支拂賃銀額に現はるゝ限りに於てのみ生産物の價値に影響する。



費された勞働量には增減があつても、資本家の出費之が爲めに增減することなき限りは、生産者の利害は影響を受けることがない。勞働量はたゞ賃銀を通じてのみ生産費を構成するものである。故に今 Mill が勞働量と賃銀とを併立せしめて、その價値に對する影響を論ずるのは、Senior が勞働と賃銀、節欲と利潤とを峻別して論を立てたるに比較して劣ること數等であるが、(Whittaker, p. 109)、姑らく甚しく語句に拘泥せずに之を讀めば、Mill の論旨は必しも人をして了解に苦しましむるものではない。蓋し勞働量は資本家の支出賃銀額を通じて價値に影響するものであるとはいふものゝ、賃銀率にして單一普遍的ならんか、勞働量の多少は直ちに支出賃銀額の多少に比例すべく、又諸貨物の生産に投下せらるゝ勞働量既に一定せるものとすれば、勞働者の受くる報酬率の異同は、直ちに資本家の出費の異同となつて現はるべきを以て、此意味に於ては勞働量と賃銀率とは相待つて資本家生産費の決定要素なりと云ふも差支ないのである。彼れが任意可增貨物の價値は、之を生産する爲め支拂はれたる比較的賃銀額、及び此賃銀を支出せる資本家の收むべき比較的利潤額之を定むるも、「比較的賃銀額は、半ば比較的必要勞働量に依り、半ばその比較的報酬率によつて定まる」と謂つた、之を此意義に解すれば、承認し難からぬ所であらう。斯の如くにして一業務に於ける賃銀率が其普通率以上にある

ときは、此差異は其生産物の價値に影響する。例へば、熟練勞働の産物が不熟練勞働の産物の大量と交換せらるゝが如きは、其勞働がより高く支拂はるゝが爲めに外ならぬ。樣々の原因より生ずる賃銀率の不平等は、凡て明かに諸貨物の相對的生産費を變更し、從つて完全に其自然價値又は平均價値に現はるゝものであつて、「諸貨物生産の爲めに必要なる勞働の相對賃銀は、其價値を動かすこと正に勞働の相對量と同じである」たゞ價値變動の原因として勞働量と賃銀と何れか重きと云へば、Mill は勞働を以て答へる。蓋し必要勞働量の增減は、毎時一貨物若しくは數貨物に就て起るに反し、賃銀の變動は一般に行はれ、從つて著しき影響を價値に與へざるを常とするからである(p. 461)。

## 二十三

利潤の價値に對する關係は果して如何。Mill は Senior の造語を採用し、利潤を以て節欲に對する報酬としてゐる(p. 462)。謂へらく、利潤も亦賃銀と同じく價値を定むる生産費の一要素をなすけれども、一般賃銀率の高下が價値に影響を與へざると同じ理に由て、その有ゆる物の生産費中に入る限りに於ては、利潤は何れの貨物の價値をも動かすことを得ぬ、「その價値に



對して多少とも影響あるは、利潤が或物の生産費中に入ること他の物に於けるよりも其程度大なることに依てのみ然るものである」と。利潤が或物の生産費中に入ること他の物に於けるよりも其程度大なるは、或業務に於ける利潤率の特に他よりも高き場合、及び利潤率は同一なるも、資本の投下し置かるゝ期間に長短ある場合是である。此の資本放下期間の長短より起る影響に就ては、Mill も Ricardo の時以來屢々引用せらるゝ、保藏に由て增進する葡萄酒の價値を一例證とした(p. 463)。一定量の葡萄酒と一定量の羅紗は同一量勞働の造るところであつて、而して此勞働は同一率の報酬を受けたものと假定せよ。今保藏によりて羅紗の價値は增進せぬ。葡萄酒の價値は增進する。假に葡萄酒をして希望の如き品質を有せしめんが爲めには、五年間の貯藏を要するとせんに、釀造者又は酒商は、葡萄酒の賣價が五年の終りに複利法を以て蓄積せる五年間の利潤額丈け羅紗よりも高くなり得るのでなければ、敢て之を貯藏せぬであらう。而かも葡萄酒と羅紗とは、本と同額の出費を以て造られたるものである。玆に二貨物の相互に對する自然價値が其生産費のみに適合せずして、生産費に加ふるに更に或物を以てしたものに適合する一例を見るのである。而して生産上に機械の利用せらるゝ場合が此と其理を同じうすることは、既に Ricardo の詳說するところであるから玆に再び Mill の說明を引用する

必要はあるまい。

斯の如く生産費中に含まるゝ利潤の比例一ならざるよりして、二個の結論を生ずる。一は異種の勞働の受くる報酬率の異同を斟酌するも、猶ほ諸貨物は單に其生産に要する勞働量の比例を以て交換せられざること、二は利潤率の一般的騰落が價値に影響し、貨物の生産費中利潤を含むこと比較的多きものは、利潤率の騰貴下落に由りて其價値或は騰貴し、或は下落することは是である。一般賃銀率の高下もその利潤率を動かす限りに於て、生産物の相對價値を動かすものである(pp. 464-6)。

Mill に從へば、際限なく其供給を增し得るも、此を行はんが爲めには費用の遞增を要する諸貨物にあつては、其價値は現在最不利なる事情の下に於ける生産費が之を定め、これよりも有利なる事情の下に生産せらるゝ貨物は、この費用の增額に等しき地代を生ずる。而して Mill は「地代は之を生ずる貨物の生産費中の要素たらぬものである」(pp. 469-473, 479)と明言した。卽ち地代に就ては Mill は原則上 Ricardo の壘を固守するものであるのである。

今 Mill の價値と勞働量との關係に關する見解を Mill 自身の語を以て概括すれば左の如くである。曰く「若し二物の一方が、平均上價値を有すること他方よりも大ならば、其原因は必



ずこれが生産の爲めに或はより大なる勞働量を要するか、或は永久的に一層高率の報酬を受くる種類の勞働を要する事、若しくは此勞働を支ふる資本又は資本の一部分が、之を一層長期に亘つて放下せざるべからざる事、若しくは最後に生産が永久的に高率の利潤を以て償ふことを要する何等かの事情を伴ふ事に存せねばならぬ。是等諸要素中生産に要せらるゝ勞働量が最も重きを占める。爾餘のものゝ效果は、何れも輕微ではないが、之よりも小である」と(p. 480)。資本放下期間の長短が、勞働量と價値との關係を亂す要素たることは、既に Ricardo の縷說するところである。業務の種類に由つて利潤率に異同あることは Ricardo は詳論しては居らぬが、猶ほ之を看過したのではない(Principles, p. 83)。故に Mill が勞働價値說に Ricardo 以上に新たに加へた修正は、熟練勞働に對する高率賃銀が勞働量と相並んで價値形成の要素たることを認めた一事に存するものである。之より先き Senior は、勞働量と價値との比例を破る原因として、地代と、熟練勞働に對する特に高率なる賃銀との二者を擧げることに歸着する說を述べ、Mill は地代の價格形成要素たることを否認して、一歩 Ricardo に還らうとしたけれども、猶ほ賃銀が必ずしも勞働量を代表するものでないことを認めて、明かに Ricardo よりも勞働價値說に遠ざかつた。Mill の次に出た Cairnes の所謂不競爭團 (non-competing

groups)の說は、賃銀と勞働量との失比例を論ずることが更に一段の精緻を加へたものである。

## 二十四

Cairnes が價値は諸貨物が公開市場に於て相互に交換せらるゝ比率を現はすもの、價格は價値の貨幣にて現はされたものであると謂ひ、而して價値存在の要件として利用、獲得の困難、及び可讓渡性の三者を擧げたのは (Some Leading Principles of Political Economy Newly Expounded, 1874 pp. 3,4,7, q)、概ね前人の踏襲に出づるものであると謂つて好からう。彼れはまた Cherbuliez に倣つて、傳來の自然價格なる術語に代ふるに正常價格又は正常價値 (normal price or normal value)の語を以てしたけれども(p. 46)、所謂正常價値は市場價値動搖の引力中心點たるものなること從來學者の所謂自然價格と異なるところはない。Cairnes の學說にして特に稍〻詳かに傳ふべきは、その勞働者の間に階層があつて、同階層者相互間には競爭行はるゝも、異階層間には競爭行はれ難き爲め、勞働の犧牲とその受くるところの報酬とは均衡し得ざるの事實に着目し、此點よりして貨物の正常價値と其生產費と相疎隔し得べきの理を力說したるもの是である。



Cairnes が謂ふところの生產費とは何であるか。彼れは先づ Senior と同じ立脚地よりして Mill が生產上の費用と費用に對する報酬とを混同したる非論理を責める。曰く、「經濟的思辨の範圍內に屬する有ゆる觀念中相互に最も根本的に相反するものは、費用と費用の報酬とである。……費用と報酬とは相互に相反概念をなして居る。……然るに予の引用せる (Mill の) 生產費分析に於て、此の二つの相反物は同一視せられ、犧牲なる費用、人間が自然に對して、產業的報酬を得んが爲め支拂ふものたる費用は、賃銀及び利潤、卽ち自然が產業的犧牲に對して與ふるところのものより成れりと謂はれるのである」と(p. 50)。Cairnes は費用は犧牲であつて、斷じて犧牲の報酬にあらざることを力說するものである。生產上の犧牲は、彼れに從へば、勞働と節欲と危險(risk)とより成り、文明諸國に於ては、勞働は廣義に於ける勞働者、節欲は資本家、而して危險は勞働者資本家並に之を負擔すると謂ふ(pp. 81-3)。然れども彼れが危險に就て費すところは、僅かに數言に止まり、その生產費として、正常價値との關係に於て論ずるところは、專ら勞働と節約とに限られた。而して一貨物生產費の測定は、勞働にあつては其生產上に雇傭せらるゝ平均勞働者の數と其勞働時間との積（同時に勞働の寬嚴及び之に伴ふ危險の程度を斟酌す）に由つて之を行ひ、節欲にあつては、享樂を節したる富の量に、含む

ところの危險を顧慮し、之に節欲の期間を乘じた積によりて之を行ふものとする（p. 97）。この勞働及び節欲によつて感ずるところの苦痛は人によりて同じからぬけれども、Cairnes が價値に影響すと認める生産費は各人個別の犧牲にあらずして、平均犧牲である。曰く「顧慮すべき犧牲、交換價値を支配する犧牲は、ＡＢ又はＣの閲みしたる犧牲にはあらずして、貨物生産者たる資本家又は勞働者の所屬階級が閲みしたる平均犧牲是である」と(p. 95)。

## 二十五

Cairnes が生産費の語に由つて解するところは右述の如くである。此生産費は果して、又幾許の度に於て貨物の交換價値に影響すべきか。Cairnesの 以爲らく、人のその勞働者たると資本家たるとを問はず、敢て生産上に犧牲を拂ふことを辭せぬのは、之に對する報酬を得んと欲するからである。而して犧牲に對する報酬は、究局生産物の價値を其源泉とする。「斯の如く各産業部門に於ける賃銀及び利潤は、該産業部門にて生産せられた諸貨物の價値より生じ、而して（地代の同じく貨物價値中の一要素たる場合を除けば――而して、地代の經濟理論に親しめるものゝ認むべきが如く、此場合は大體の論證を動かすものではない）賃銀及び利潤はまた價



値の全額を吸收するを以て、他の事物にして同一なる限り、當然生産者の一定集團が收得する賃銀及び利潤の總額は、常に彼等が生産する貨物總量の價値と共に變化する。故に諸産業に於ける賃銀及び利潤の、忍べる犧牲に比例せるところに於ては、是等諸産業にて生産せられた諸貨物の價値は同じ犧牲に比例するであらう、換言すれば諸貨物は其生産費に比例して相交換せらるるであらう」と(pp. 61-2)。

即ち Cairnes に從へば、勞働の報酬たる賃銀と節欲の報償たる利潤とがよく各々其犧牲に比例することを得ば、是等賃銀と利潤との合成する貨物の價値は、またその生産費に比例すると謂ふのである。故に貨物の價値が果して其生産費に比例するや否やは、懸つて賃銀の果して諸産業を通じて勞働の犧牲に比例するや、利潤の果して節欲の犧牲に比例するや否やに存すべき道理である。然るに賃銀と利潤とは、生産者の間に完全なる競爭の行はるゝ限りに於てのみ、即ち各勞働者各資本家が自由にその欲するところの産業に勞働又は資本を投じ得る事實上の撰擇權を有する場合に於てのみ、よく忍ばれた犧牲と比例する。「故に競爭は産業上の報酬と犧牲との一致に對する保障たると同時に、またそれあるの故を以て、諸貨物の價値とその生産費との一致に對する保障たるものである」(p. 63)。

然らば勞働及び資本の間には果して完全なる競爭行はるゝや否や。資本に就ては Cairnes その然るを認め、「資本の競爭は……各商業國の全產業を通じて有效に行はるゝを以て、諸貨物の價値の、資本家の犧牲に對する報償に充てらるゝ「利潤基金」と認むべき部分は、國內產業の全範圍を通じて、費用中の資本家の負擔する部分と一致すると云ふけれども(p. 74)、勞働に就ては、前段に記したる如く、競爭は勞働者の各階層內部に於てのみ行はれて、異階層間に行はれざるを以て、異階層に屬する勞働者の生產物は、相互其生產費(勞働の犧牲)に比例して交換せらるゝことなきを力說するものである。謂へらく、「事實上吾人の目睹するところのものは、無差別に相競爭せる全人民ではなくて、相異なれる一聯の產業的階層である。而して是等各階層內部に於ては、幾多の就職候補者は實際の有效なる撰擇權を有するも、別の諸層を占むる者は、有效なる競爭を行はんとするが爲めには、事實上相互に孤立してゐるのである」と。Cairnes は試みに是等諸階層を分つて第一に最低位を占むる無熟練若しくは準無熟練勞働者（農業勞働者を含む)、第二に工匠、指物師、鍛工、石工、靴工、裁縫師、製帽工等の如き第二級熟練勞働者を包含する手工業者の集團、第三に例へば機械及び土木技師、藥劑師、眼鏡師、時計工等の如き、其仕事の資力あり、有利なる敎育の機會ある者のゝみ能く修得する資格を必要とする



生產者及び商人の一團、第四に學者藝術家其他 profession に從事するもの、及び略ぼ是と同地位にあるものゝ一團とした。固より是等の諸階層間の境界は、踰越すべからざるものではないが、之を能くするは例外の人の場合であつて、普通勞働者にあつては、何れの階層に屬するを問はず、その能くし得るは、事實上限定せられた特定の職業間に於ける競爭のみであつて、上級の層に於て、人が如何なる有利の報酬を受けてゐても、彼れは往いて之に與かることを得ないのである。Cairnes の不競爭團 (non-competing groups or non-competing industrial groups) と稱するものは、斯の如く相互間の競爭の事實上遮斷せらるゝ產業上の諸層の謂である。

勞働者間の階層の相互の競爭を妨ぐること斯の如くなりとせば、各層勞働の生產物は、同層勞働の生產物とは各其生產費に比例して相交換せらるべしと雖も、その異層勞働の生產物との交換比率は、當然其生產費に適應することなかるべき筈である。不熟練勞働の生產物は他の不熟練勞働の生產物と、普通手工業者の生產物は他の手工業生產物と、何れも其生產費に比例して相交換せらるべしと雖も、手工業者の生產物と不熟練勞働の生產物とは、その生產費に比例して相交換せらるゝことなし。例を以て說かんに、一縱材卓の價格と普通鎖錠の價格とは、其生產者が現に忍べる犧牲に相應すべく、又一晴雨計の價格と一時計の價格とは、同じく其生產

費に相應すべしと雖も、晴雨計又は時計の價格と樅材卓又は錠前の價格とを比較するときは、其比は各自の生産費には比例せずして、前二者の價格の其生産費の比例以上に高きに居ることを見るであらう。蓋し同一層に屬する或勞働者の、特に高率の報酬を受くるものがあるときは、其儕輩は競ひ集り來り、同種貨物の生産額を增加せしめて其價値を下落せしめ、從つて勞働に對する報酬を下落せしめるけれども、上層勞働者が高率の報酬を受くるに對しては、競爭に由つて之を下降せしむる途がない。「……一定の局限せられた産業的區域内に行はるゝ取引上に於ての交換價値は生産費の原則之を支配すと雖も、諸多の區域と區域との間に於ける相互取引に於ては、其作用が行はれないのである」(p. 75)。斯の如く費用法則は「普遍的に如何なる階級の貨物の價値をも支配するものではなく」て「或貨物の或交換に於ける價値を支配する」に過ぎぬものである。

## 二十六

生産費の法則の適用範圍は斯の如く狹められた。けれども Cairnes の所見に從へば、不競爭團相互間に於ける貨物の交換比率は、何等の法則準繩に遵ふことなくして恣に變動するものではない。同階層生産物間の現實交換比率が生産費を中心とし、之に歸着せんとして其周圍に旋回すると同じく、異層貨物間の交換比率も亦其歸嚮中心を有し、而して之を定むるものは所謂相互需要の法則 (law of reciprocal demand) であると謂ふ。此法則は素と J. S. Mill が國際間の貨物交換比率（國際價値）を說明せんが爲め立てたものにして、其要旨を約說すれば、國際價値は通商諸國の各々他國生産物に對する相互需要に由つて、或は一層的確に之を云へば、各一國の生産物に對する有ゆる他の國の需要と、之に對立する其國の他の有ゆる國の生産物に對する需要とに由つて決せらるるのである。此諸力作用の結果は、一國の輸出は全體に於てその他の凡ての國に對する債務を果たすこと是である。諸國に於て此結果を確保する爲め必要なる交換比例が如何なるものにもせよ、是等の交換比例は正常のものとなり、國際價格動搖の歸向すべく、究局に於て之に一致すべき中心たるべしと云ふこと是である (pp. 99–100)。Cairnes は不競爭團相互間の交換は、國際間の交換と理に於て正に同一なるものと認め、彼の Mill の法則を借り來つて、之を此種の交換に於ける正常價値の法則に充てたるものである。たゞ生産費の法則も相互需要の法則も、共に貨物の市場價格の動搖中心を說明するものであると謂ふけれども、其趣きは同じくない。Cairnes に從へば、生産費は個々の貨物の價格動搖の中心を定むる

ものであるけれども、相互需要が定むる中心は、多數貨物の總體の平均動搖に係はるものである。帽子の生産の減少は、帽子の價格を下降せしむべしと雖も、二通商國間に於ける相互需要の變動は、特定の一貨物の價格に影響するものでなくて、貿易商品悉く其影響を被るものである。國内に於ける不競爭團相互間の交換に於ても亦同一の理が行はれると謂ふ(pp. 105-6)。

然れども、國際貿易と國内に於ける不競爭團相互間の交換との比論は、今詳說する必要はあるまい。吾人が着目せんとするところは、勞働者間に階層の存する爲めに、其相互の競爭が妨げられて、勞働の犧牲と其の受くるところの報酬たる賃銀との不平均を來たし、而して之が爲めに生産費が價値を支配する領域の甚だしく局限せられた一事是れのみである。Cairnes が所謂生産費は、既記の如く勞働と節欲と危險とより成れるものであるから、假令完全なる競爭が行はれて、生産費よく價値を支配し得たりとするも、猶ほ勞働は此生産費中の僅かに一要素たるに過ぎず、危險の一事は姑らく除外するも、猶ほ節欲は勞働と相並んでよく價値を動かす原因たり得るのである。而して今勞働者間に階層があつて、相互の競爭が妨げらるゝが爲め、價値が生産費の支配を受くる場合の局限せらるゝことと上記の如くなりとすれば、生産上に費さるゝ勞働量の價値に及ぼす形響は、愈々間接稀薄ならざることを得ぬ。予は曩きに(本書第一六一頁)



資本家(企業家)が生産の主宰者たるところに於て、貨物市場價格の旋回中心たる自然價格が、投下勞働量に比例せんが爲めには、第一、賃銀額の正確に投下勞働量を反映すること、第二、資本家(企業家)の支出する資本中に於て賃銀の占むる比例の同一なることの二條件備はるを要すると謂つた。而して第二の條件の事實上備はり難きことを認むるは、恐らく Ricardo の欲せざりしところであつたかも知れぬが、猶ほ己むことを得ずして之を敢てした。第一の條件に至つては、Senior, J. S. Mill 相踵いでその同じく備はり難きことを指示したが、Cairnes は最も此點に力を注ぎ、投下勞働量と賃銀との比例し難き場合の多いことを論證せんとしたるものである。勞働者間に上下種々の階層があつて、下層の者の自由に上層者と競爭すること能はざる爲め、上層者が特に其勞働に比して高率の賃銀を收得することは、吾人の日常目擊するところであつて、而かも此事實は、少なくも現經濟社會の下に於ては之を目するに一時的變態現象を以てすべからざるものである。たゞ或は Ricardo は姑らく常に自由競爭の完全に行はるゝことを前提として立論したものであるから、Cairnes の不競爭團の說は、形式上 Ricardo の結論の價値を傷けるものではない、と謂ふ者があらうし、予も亦勞働價値說に存する困難としては、後人の所謂資本の有機的組成の異同に重きを置いて、賃銀率と勞働量との不均衡を第二

にするものであるが、猶ほ今 Cairnes の所說に照らして見るときは Ricardo は甚だ事實に遠き假定を基礎として其論を進めたといふ批評を免れぬであらう。

Ricardo の勞働價値說に近き生產費說を以て出發した英吉利經濟學は、上記の如く、約半世紀にして、漸く勞働價値說より隔たれる生產費說に到達した。而して全體として之を通觀すれば、此推移の過程には過失がない。此推移は當然あるべくしてあつて、玆に到つたものである。此は啻に Ricardo の學說に於て然るのみならず、有ゆる勞働價値說又は勞働價値說に傾かんとする學說の上に當さに加へらるべき修正である。資本家(企業家)が生產の主宰者たるところに於ては、一貨物の生產に費された勞働量は、賃銀率及び利潤と相俟つて、企業家の生產出費を構成し、企業家出費の一要素たる資格に於てのみ生產物の交換比率決定に影響する。Senior が始めて用ゐ、Mill, Cairnes が繼承したる節欲なる術語の當否は、今之を論ぜぬけれども、苟も同額の費用を投じた生產物にして直ちに使用に堪え、若しくは直ちに市場に販賣し得るものと、一定年月の經過を待ちて始めて然かすることを得るものとがあつて、而して若し二者共に同價値なりとすれば、人は必ず後者の生產を避けて、前者の生產を希ふべきこと疑を容れぬ。而して斯くして必然生ずる一方の比較的供給過剩は、其價格をして他よりも下位にあらしめね



ば已まざるべく、二者の價格の等差は、正に生產物完成(販賣可能)の遲速より起る利不利を償ふものであらう。此の時の遲速より生ずる利不利は、何の名稱を以て呼んでも妨げないけれども、此事あるが爲めに、生產物が必然其勞働費用に應じて相交換せらるゝことを妨げらるゝ一事は、此名稱の如何を問はず、之を認めなければならないのである。Ricardo の價値學說を費用學說の見地よりして論ずる限りに於ては、Senior—Mill—Cairnes を通じての英吉利價値學說の發展は、自ら此に對する當然の批評となるものであつて、予の試みた Ricardo 以後に於ける學說の史的叙述は、また同時に自ら Ricardo に對する論理的批判となるものである。

## 二十七

上記諸家の Ricardo 批評は、彼れの價値學說の費用學說としての不備を補ふものではあるが、未だ費用學說其者の基礎に斧鉞を加へんとしたものではない。敢て之を試みしものとしては、英國經濟學史上に於ては W. S. Jevons を擧げなければならぬ。Jevons は Ricardo 並に其追隨者の學說の此の點若しくは彼の點を匡さんとするものではなくて、此學說全體を謬れる基礎の上に築かれたとなすものである。Jevons が試みたのは、Ricardo の擴充修正又は補綴

ではなくて、其破壞又は其放擲である。其の偶像破壞の意氣の旺んなることは、Ricardo を評して、經濟科學の車輛を邪路に走らしめたる、有爲なれども頭腦の謬れる人と謂ひ（Political Economy, 4th. ed. 1924, p. 1）、Ricardo, Mill 父子 Fawcett 其他正統派 Ricardo 派の代表學者に理解されざりし爲め、幾多の創見ある學者の述作中に含まれた貴重なる暗示が、顧みらるゝことなく等閑に附せられたことを慨嘆しては、「斯の如き事情の下にあつては疑はしき通說の單調なる反覆を破壞することは新しき誤謬を冒すの危險あるも猶ほ、積極的貢献たるものである」と謂へるに由つて（p. 277）之を想見することが出來る。而して其主張の骨子とするところは價値の一に利用に依つて說明すべくして、費用に依つて說明すべからずと謂ふこと是である。卽ち曰はく、思索と研究とを重ねたる結果、余は價値は「全然利用に基づくものである」といふ稍〻新奇なる意見に到達した。今日行はるゝ所の說は利用よりも寧ろ勞働を價値の起原となし、勞働は價値の原因であると明言する人すらある。余は反之完全なる價値の理論に到達せんとならば、貨物の所有量に基づく利用變動の自然法則を探究するを以て足ることを示さんとするものである。此理論は事實に合するものであつて、勞働が價値の原因なりてふ說に道理あるが如き場合には、必ず其の道理の說明が與へられる。勞働は屢々價値を定むるものと見



られて居るが、然し、それはたゞ間接の方法に於て、卽ち貨物の利用を其供給の增加若しくは制限に依つて變動せしむるに由つて然るのであると（p. 2）。

Jevons の全價値學說は其基礎を後に Gossen 法則の名稱を以て行はるゝに至つた「利用の高さは貨物の分量と共に變動し、結局分量の增加するに從つて減少す」との命題に置くものである。此命題は之を反面より見るときは、分量が如何に增加しても引き續き同じ强さを以て欲求せらるゝ貨物の一も存在せざることを意味して居る。彼れは一定貨物量より生ずる總利用 total utillity と、其特定部分が有する利用、又は或一點に於ける利用の高さとを區別する。然れども利用の高さを特に擧げて論ずる必要があるのは、一貨物の消費せられたる最後の增量、又は次に消費せられんとする增量に就てのみであると謂つて居る。此の最後の增量、若しくは次に加へらるべき增量の利用の高さは、彼れが稱して「最終利用」final degree of utility と謂ふものである（pp. 51, passim）。而して經濟理論の中心をなすものはこの最終利用に外ならぬ。從來一般經濟學者の誤解は、此の最終利用と總利用との混同より生じたるものが多い。貨物中にありて吾人に取りて最も有用なるにも拘らず、吾人の之を尊重欲求すること切ならざるものあるの理は、此二者の區別に由つて始めて說明せらるべきものである。人間は水なくしては生存

することが出來ぬ。而も通常の場合これに何等の價値を認めないのは何故であるか。他なし、人は通常充分の水を有し、其最終利用が零に達して居るからである。吾人は日々無限の利用を水から享けてゐるけれども、今日有する以上に水を消費せんと欲する念を有せぬのである。然るに一朝干魃の爲め水の供給が不足するときは、吾人の水に對して感ずる利用は漸く上昇するであらう(五、六、七頁)。

斯の如く經濟理論の基礎となるべき利用の性質を說明したる後、Jevons は從來慣用の價値なる語の多義曖昧なることを鳴らし、之に代ふるに誤解の惧なき新術語を以てするの必要を論ず。彼れが謂ふところに從へば、通常價値なる語は少くも

(一)使用價値、

(二)尊重若しくは欲求の强さ(esteem or urgency of desire)及び

(三)交換比率(購買力)なる三個の意義に混用せられる。此三個の意義を表はすに、彼れは價値の一語を以てしないで、各々其場合に應じて(一)總利用(二)最終利用及び(三)交換比率なる三語を以てせんとするものである(pp. 78-84)。Smith, Ricardo, Mill 等英吉利學者の研究對象とするところはみな此交換比率であるが、Jevons は之を最終利用に依つて說明せんとする。曰く「任意二貨物の交換比率は交換完了後に於て消費の用に充て得べき貨物數量の最終利用の比率と反比をなすであらう」と。

例を以て此理を說かんに、二交換團體(交換當事者)ありて、其一方は穀物のみを有し、他方は牛肉のみを有するものと假定すれば、穀物の一部と牛肉の一部との交換は、明かに兩交換當事者を益するであらう。此の交換の利益が如何なる點まで繼續し、如何なる點に至つて止むべきかは、交換比率と利用の程度如何との定むるところである。姑らく交換比率は穀物十封度に對する牛肉一封度なりと假定せんに、穀物所有者に取つて、穀物十封度の利用若し牛肉一封度の利用に劣らば、其團體は更に交換を續行せん事を欲すべく、又對手は牛肉の一封度が穀物十封度よりも利用小なりと認めたならば、亦た同じく交換繼續を希望するであらう。此の如くして交換は、各當事者が出來得る限りの利益を收め、其以上交換を續行したならば、却つて利用の喪失あるべきの點に至つて止まるであらう。此點は卽ち二貨物の增量を旣定の比率にて交換しても、交換當事者に取りて各增量の利用は同一であつて、當事者は是に由つて得喪するところなきの點是である。今 Δx を以て穀物の小增量を、Δy を以て之と交換せらるゝ牛肉の小增量を表はさんに、素と穀物も牛肉も共に各々純一同質(ホモジェニアス)のものであるから、彼の同一物に二價なしと